

---

# 真剣で私たちに恋しなさい！

黒亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で私たちに恋しなさい！

### 【Zコード】

N1374W

### 【作者名】

黒畠

### 【あらすじ】

ある少年“流川海斗”がまじこいの世界で自由奔放の生活をおくる  
目立たなかつた少年の未来には何が待つか

今、武士娘との波乱の日常が始まる！

ご都合主義、駄文注意、ダラダラ小説  
楽しめる方だけ読んでいくください

更新ができるだけ毎日を目指しております

## プロローグ 「退屈」（前書き）

主人公があまりにも羨慕される（「都合主義ともいう」）が嫌な方は  
ご遠慮ください

出来る限り、キャラは崩さないように善処しますが、キャラ崩壊が  
嫌な方はご遠慮ください

先と似たようなことです、世界観を崩されるのが嫌な方も「遠慮  
ください

あくまでまじーこの設定を使わせて頂いているという認識で「覧に  
なってください」と幸いです

最後に自己満足の低レベル小説ですが、これでも楽しめるとこの方  
はお読みになつてください

読んでくださるところの大変嬉しいのですが、感想などくれたら  
泣いて喜びます

## プロローグ 「退屈」

『退屈』…

それはこの世で一番恐ろしいものだ

ある奴はお化けが怖いのだという、またある奴は不良が怖いという  
だが、退屈にはその怖いという変化すら訪れない、まるでリピート  
再生の

ように、ケツまで行つたら頭に戻される、そんな日常のループ

俺はそれを何よりも嫌つた

中には代わり映えしない毎日嫌気がさして、停止ボタンを押す奴

もいる

だが、そんな奴等の仲間入りなんて、さらさらする気はない  
人間は欠陥品だ、止めれば最期、一度と再生ボタンは押せない  
なら、俺は何をすればいいのか

明確な答えなんてあるはずもなく、投げかけた問いは宙に浮いたままで

だから俺は赴く  
変化をもとめて

# プロローグ 「退屈」（後書き）

プロローグ短いんで前書きをガツツリ書いてしまいました、初投稿  
感想欲しいです、でもメンタル弱いんで厳しい批判は…まあもられ  
てから言いましょう

大変綺麗な文章を書く方が沢山いらっしゃいますが、自分は素人の毛が抜けた程度の才能しかないので、寛大な心で、ハードルを下げてご覧ください

## 1話 「俺の日常」（前書き）

若干、今日は長いです  
主人公はオリキャラですが、モデルがいます  
まあ、気づいた人はもう分かつてしまつたかもしれません

## 1話 「俺の日常」

「ういーす、おはよー」「  
おはよ、遅かったね」「  
寝坊でもしたのか?」「  
いや、それがよ…」

「ねえ、昨日のドラマ見た?」「

「見たわ、あのチョーどろどろのヤツっしょ」「  
いやー、やっぱイケメンはいいわあ

今日も今日とて騒がしい教室だ、そういうことも何も変わらない  
言つまでもなく、退屈だ

まあ、だからといって俺がその会話に参加する」とはない  
俺が欲しいのは別に人間ではない、刺激だ  
会話が嫌いというわけではないが、自分から話しへ行くほどではない  
まあ独りでも何も困らないが…

こんなことを言う奴を“ボツチ”と呼ぶとこの前読んだ本に書いて  
あった  
だから、間違つても口には出さない……口に出す相手もいないが  
あれ、俺ってすごい悲しい奴じやね?

なーんて、全部俺自身が仕向けたことなんだよなー

「みんなーん、先生が来ますよー」「  
おい、机の上のDVDしまえ

「起きた、先生来るぞ」

クラスに委員長の声が響き渡り、その後数秒クラスは静寂につつまれる

ホント変わらないな、この流れは… もはや、テンプレだ  
案外、俺は本当にゲームの中の登場人物とかなんじゃないだろ? 何を話しかけても一回目からは同じ言葉で返されるRPGのような。  
だとしたら、わざわざとラダーチームから出してくれ  
もう、うそだよ、宝物庫のおあずけとか、王様とは思えない量の

軍資金とか、国を救わせるのにケチってんじゃねえよ  
こちとら魔王と戦つて、さっさとエンディング見たいんだよ  
あつやは世界の半分、提示してくれ  
そらもう、H様は完敗だよ、主に器の大きさで

そんなしょうもないことを脳内で繰り広げていたら、教壇に女教師が佇んでいた、素人目に見ても隙はないだろう

「起立!」  
「礼!」  
「着席!」

「つむ、では出席をとる」

淡々と教師が名前を呼んでいく、小声だといちやもんつけられるのは皆、嫌と言つほど身に染みてこねりしく、はきはきと返事をしていく

そして、最後の一人である

「流川海斗」

「おう」

「……」

教師が顔をしかめる。とはいっても怒るというよりは困った様子だ最初の方こそ、クラスもざわついていたものの、この数秒の沈黙も慣れたものだ、今じゃわざわざ俺の方を見る奴もいなくなつた

「流川、再三言いつが、その言葉遣いはなんとかならんのか

「ああ」

最低限のやり取りを交わす

こんな形だけの叱責ももつすつかり日常の一部だ

教師は深い溜息をついて諦めたように次の話に入つていった

今までこそ、この対応だが最初の頃はひどいものだった

（1学期開始当初）

「では、新たなクラスとなつたといひで出席をとることにする、呼ばれた者はじつかりと返事をするよ」

.....

「最後に流川海斗」

「おう」「おう」

「…流川海斗」

「おう」「おう」

「貴様、教師に向かつてその態度は何だ！」

素早い鞭が飛んでくる

側面から3発の打撃が入る

俺はその攻撃に対してもなく、沈黙していた

「お、おい、黙つてないでなんとか言わんか」

教師はびっくりしたような顔で俺に発言を促す

クラスメイトはざわざわざわめいてい

大方、俺が痛いと声を上げたり、顔を歪ませたりしないことを不審

がつて

いるのだろう

目立つのは御免被るのだが、これだけは性分だ、どうしようもない  
それにこの対応ならば、クラスメイトが教師の去ったあとで「お前  
すごい

な」と机のまわりに面白半分で集まつてくることもないだろう  
こんな鞭で叩かれて黙つているような奴は気持ち悪いだけだ  
思えば、このときから俺の心象は、無口で、無表情で、根暗の気味  
悪い奴

とこう風になってしまったのだろう。いや、そういうふうに仕向けてが正

たが  
解か

ともかく、こんな対応を来る日も来る日も続いていると、しだいに教師はあきたように形式上の注意をするのみとなつた  
クラスメイトも俺の人物像をしつかりと確定してしまつたようだ結構なことだ

、

といつことで今に至るのだが、目立たないことが退屈につながると  
は完全  
に思慮の外であった

目立たないというのは意外に難しい

それこそヒーローみたいな良い奴でもいけないし、逆にヤンキーみたいな悪い奴でも駄目だ、話しやすくて勿論目立つし、気持ち悪すぎてもイジメやネタの格好的だ

目立つことを避ける一番の方法は他者との関わりを絶つこと  
スポットを避けるのではなく、電源を落としてしまうという方法だ  
それがまさかステージ全体の明るさを奪うことになるとは全くの想定外だ  
つたわけなのだが……

まあ、つまりは他者に関わりたくないと思わせればいい性格の良し悪しに関わらず、人間が最も嫌うタイプは無反応の奴だと思つ

楽しく話しかけても笑わない、いじめても嫌がらないそれでもいいなら、それこそ、そいつは石こうでも相手にしていればいい

だからこそ、そういう奴は総じて相手にされない

見た目も視力が悪いわけでもないのに黒ブチの伊達眼鏡をかけているといつても、所謂おしゃれ眼鏡というのではなく、ダサ眼鏡だなんか、昔のアニメの受験生とかがつけてそうな、頭に田の丸のハチマキ

を巻いて、頬にそばかすがあるような…

また髪を前髪のほうに持つてきてほんわかと皿に影があらわるようにしてい

て、陰気な雰囲気を演出している

要約すると、わざと少しダサく見えるようにしている別にナルシストなわけではないが、人の好みなんて分からない事実、この学校に来る前は街で誘われたことも数回ある当然、告白されたとなれば、どんな奴でもその日の話題は独占だらうまた、告白した子からすれば、答えに関わらず、存在をすぐに意識しなぐ

なるというのは、どちらにしても無理な話だろ？

実際、その一つだけで印象はだいぶ変化した

やり始めた当初は鏡を見る度、靈感に田覚めたのかと疑つたというわけで、見た目的にも注目されることはなく、正真正銘の気持ち悪

い奴と位置づけられているわけだ……言つて悲しくなってきた

そんなどうでもいい自虐を延々続けると名前を呼ばれた気がした

## 1話 「俺の日常」（後書き）

初めて長い文章を書いて、改行と話の切れ目が難しいということを知りました。話によつて、おそらく長さがばらばらになつてしまいそうです

主人公は元はイケメンです、ただ学校ではかけらも見せないといった感じです、いきなり主人公顛願が炸裂していますね

## 2話 「兆し」（前書き）

前回は文章が長かったですが、前回が特殊です  
大体これからは今回くらいの長さだと思います  
そしてやつと、原作キャラの名前がちらちら出でています  
前回まで一言も名前は出してなかつたんですね

## 2話 「兆し」

「流川海斗」

気のせいでもなんでもなく、呼ばれたようだ  
どうやら色々考えていた間にテストを返していただい  
この問題の難易度的に70くらいが平均だうつと思つたので、62  
点ぐら  
いにしておいたはずだ

「62点なので、平均72点にあと一歩だな、次はもっと頑張るよ  
う」

うむ、大方予想通りだ、勿論不正解の箇所は空欄だ  
珍回答でわざわざコードモアを發揮することもない  
平均より少し下くらいが一番目立たない  
教師に褒められることもなく、叱られる事もない、決まって出る  
言葉は

“次は頑張れ”だ  
最高点数100点と黒板に書いてある、すごい奴もいたもんだ  
なんか毎回高得点取つてる奴がいるらしいが、生憎と名前は覚えて  
ない  
てか、会話もしないから、覚えられないし、その必要もない

「そして、今日はこの前のS組との件の処置について話がある」

S組とは隣のエリートクラスの「」とで些細なことでのF組とこちかいを

起こしている、つっこないだも何やら一悶着あつたらしく、詳しく述べる

は知らないが、この俺の耳に入るほど、まさに犬猿の仲なのだ

ウウンと教師が咳払いをする

「学園長にも相談したところ、パフォーマンスも兼ねてタッグマッチ大会を開催することとなつた

「たつぐまつち？」

「ああ、男女の一人一組でのS・F混合のトーナメント戦を行う

「男女か…」

「はいそこ、変な妄想に浸らない

「まあ、その男子数名は置いておくとして、競技はなんですか」「サドンデスの格闘技のようなものだ。フィールドの中で闘い、細かいル

ールなどは一切なく、ギブアップ、フィールドアウト、判定負けが起きる

まで、二対一での戦闘だ、勿論武器の使用も許可する

「よくわからないけど、決闘みたいなものね。まぐまぐ」

「梅先生、そのペアはどうやって決めるんですか

「基本、なりたいもの同士がなるのでいい。決まらない場合は、くじでも

なんでも、とにかくお前に任せる」

教師の言葉でクラスがざわつく  
大体は女子連中のかつこい男子と組みたいという願望の声、またはその  
逆の男子連中の欲望の声であつたが、その中には案の定…

「流川君とは組みたくないよね」

「何考へてるか分からんないし」

「てか、運動神経もそこそこだし、守ってくれないでしょ」

「やっぱり強くてかつこい、風間君とかでしょ」

本人達は小声で聞こえないと思つてゐるのだろうが、自分の悪口といふのは何故かクリアに聞こえてしまつ

そして、自分に都合のいい事は聞こえないと。

人間つて、不便にできてますねー、ホント

：ん？なんか気まずそうな視線が突き刺さる

ああ、どうやら他のクラスメイトにも普通に聞こえていたらしく

クラス中にクリアに響き渡つていたようだ

ただ、こういう一人組のイベントとかで嫌われるか

自分で仕向けたとはいえ、あまりいい気持ちはしないな  
後悔すらもしていないが…

んー、誰か「その大会つて参加しないことは出来ないんですか」と

いう質

問をしてくれ、こんなことに口数を使いたくねえ、無口の印象が崩れる

多くの女子からは嫌悪の目、比較的良識を持った人も不審の目をし

れる

ている

その他も関心のないものもあるが、同情などは一切なかつた  
うむ、予想はしていたが、このクラスに味方は一人もいらないらしい  
くそ、こんな予想もしない形で目立つとは…

誰だ、ダブルマッチとか面倒くさいことを考えたのは  
もうオチが見えてる、最後まで余つてくじで一緒になつた女子に疎  
ましが

られて、後日そいつの友達とかに愚痴られるんだろう、はい正解

「ちょっと待つて」

## 2話 「兆し」（後書き）

今更ですが、ここに小説を読んでくださった方が見ているんですね

ならば、最初に言つことはありがとうございます  
本編では主人公はホントにクラスで孤立しています  
委員長などですら、警戒といった感じです

そして、ようやく物語に動きが。

次回は、やつと原作キャラがガツンと出でくるのではないかと（予定）

### 3話 「救世主は犬」（前書き）

なんと評価が頂けました  
こんな小説に3ヶ月もくださつた方、有難うございります  
もっと遅く書こうと思つてたのですが、嬉しくて投稿しちゃいました  
今度は感想もほしいなーなんて…

### 3話 「救世主は犬」

「ちょっと待つてよ」

「どうした、ワン子」

「アタシが流川君と組むわ」

「「「「はー?」」「」「」」

思わず、俺まで声を上げてしまった、まさかの不正解か  
余るもの嫌だつたが、これは田立つんじやないか

「アタシと組んでくれる?」

近づいてきてクリツとした大きな瞳で見上げられる

この赤髪ボニー・テール少女の名前は”川神一子”

：俺が唯一このクラスで名前を知っている少女である

この打ち解けやすく、明るい少女は全く物怖じすることなく、俺に  
話しか

けてきた、その姿は自然体であり、作った様子は一切なかつた  
邪氣のない笑みを浮かべていて、俺を他の奴と区別していない

「//」ゴ能力のない俺に意味不明な口直口誌といつものが回ってきた  
ときも  
助けてくれたのはこいつだ

)

「……はね、」いつやつて書くのよ

「ふむ」

「で、ここは教科内容を書くの」

「な……」

聞かなくともいいと思いつつも、「なんで、俺に関わるんだ?」  
という言葉が口をついて出そうになつた  
うーん、こんな無垢な少女には少し気が緩む、下心が見えないから  
な……

「な……名前は?」

そう誤魔化すのが適當だと考えた

実際に知らないわけだし、二人のとき聞いたところで目立つ  
うこと

にはつながらない、何より俺にとって想定外の存在だった  
だから、名前くらいは聞いておいても損はないと考えた

「川神一子よ  
「そりか」

ここに何の疑問もなく、答えてくれるところも性格が表れている。その後、俺が話すことではなく、ただひたすらに日直日誌の書き方を教わつていた

（）

「アタシと組んでくれる？」

「ああ、構わな……い！？」

了承の返事を返そうとしたら、突如、背後から鋭い殺氣を感じた嫌悪や軽蔑のような視線は浴びせられ慣れてるが、これは違う気になつて、そちらに視線だけを放ると、柄の悪い男が睨みをきかせていた。

た。面識は当然ないので、恨みを買つ覚えはない…  
かといって、顔は強面だが無闇に殺氣を飛ばすような奴ではなさそうだ

てことは、この女関係か？

まあ、すぐに手を出してくる様子もないし、俺はそこで思考を止めた

「どうしたの？」

「ああ、別に」

「そう？じゃあ、これからアタシたちペアね」

「おいで、ワン子。ほんとにそんな奴とペアを組むのか」

筋肉男が待つたをかける

それを皮切りに、川神一子のお仲間が口々に文句を言い出す

「そうだよ、ワン子、そんなの危ないしさ」

「知らない奴には付いてくなど教えたはずだが」

「知らない人じやないわ、クラスメイトよ」

「そりやそうだが、そいつは何考えてるのか分かんないだろ」

「そんなの話したことがないからよ、これから知つていけばいいわ」

少なくとも俺に声をかけたのは同情などの軽い気持ちではないようだ  
仲間の忠告は素直に聞き入れるタイプだと思ったのだが、俺とタッグを組

むのに狙いがあるのか、とてもそりは思えない

純粹に優しいというか、そういうた親切心からの行動で間違いない

だろう

だがまあ、周りとしてはどうにかして、俺と組ませたくないんだろう

うな

その気持ちはよく分かるぞ、そういう印象を『えてきたんだからな

「ワン子、トーナメント優勝したいよな?」

「モチロンよ」

「だが、そいつは俺よりも弱いくらいだぞ、勿論ガクトなんかとは  
比べ物にならない、それじや戦力にならないだらつ」

お、考えたな、あいつは頭脳担当か?

確かに「イツは優勝を何がなんでも狙うタイプだろ」  
たとえ勝ち田が無い相手でも、「やつてみなきゃ結果は分かんない

わ」と

か言いそうだ

そんな負けん気の強い少女には最も有効な説得だらつ

「そんな私の力でカバーするわ

「……」

おお、自信満々なこいつ  
ほんとに俺とペアを組む気らしいな

「はあ、分かったよ」

「おい、いいのかよ、あいつにワン子を近づけて」

「今のワン子に何を言つても無駄だ、但し困ったことがあつたらす  
ぐ俺に

相談しろ、いいな?」

「うん、分かったわ

どうやら決まつたらしい

俺を訝しげに見つめる視線は変わらないが、一応認められたってと  
こか

こりや結構な番狂わせだ

「じゃあ、よろしくね、流川君」

### 3話 「救世主は犬」（後書き）

ありがとうございました  
波線は一応、時間のずれを表してます、分かりにくくてすみません  
分かった人もいるとは思いますが、殺氣はゲンさんです、はい  
あと、読みにくいとかあつたら、どんどん言って下さい  
改善するように努めますので（感想がほしいだけ）  
ちなみに変なところで改行するのは、メモ帳で書いてるからです

## 4話 「ワンドの努力」（前書き）

初感想頂けました、感謝感激です  
返信もさせて頂きましたので、ぐださつた方は「」見てください  
なんか、回を重ねるごとに矛盾が怖いです  
あまり、固まつてないのに衝動で書くからいつなるんでしょうね

## 4話 「コンサの努力」

ペアが決まったとはい、その後の俺の扱いや生活に変化があるわけでもなく、ほとんど誰とも話さず、学校にいる間は本を読んで、じくたまに川神一子が話しかけてくるという、なんら前と変わらない日々を過ごしていた

そして、あつとこう間にタッグマッチ前日となつた

「では、残りの時間はペアで過ごすよ!」

話の流れからみると、午後の授業を明日のタッグマッチに向けてペア同士の練習や打ち合わせにあつむようだ  
当然、しらみつくれて帰るわけにもいかないだらうそれで、どうするか

肝心の川神一子は遠くで何か言われている

「気をつけろよ」

「何かあったら、すぐに連絡しろ」

うむ、警戒心はあいかわらずMAXのようだ  
そして、仲間にうなずき返した少女がこじりこじりて来た

「じゃ、流川君、ヨロシク」

「ああ」

「明日はアタシが敵を倒すから、流川君は身を守るだけでダイジョブよ」

「おう」

「出来る限り、守りながら戦うわ、任せで」

胸をはって、自信満々に話す田の前の少女

やはり、この状況でも負ける予定はないらしい  
勝ち上ることしか見据えていない、尊敬に値するほどの自信だ  
まあ、当然か

この少女を初めて見たのは同じクラスになる前だった  
やっと日が出てきた頃の早朝、川辺にタイヤをひきずつて走る姿があつた

ものすごく時代錯誤の光景に最初はなんかの撮影かと思つていたが、  
次の

日もその次の日も同じ姿がそこにはあつた

その少女は休憩も少々に、登校時間ギリギリまで走り続けていた  
その毎日の積み重ねが彼女の自信、支えになつているのだろう  
自分で築いた土台だからこそ、安心して堂々と立つていられる  
見ていて気持ちのいい生き方だった

目の前の少女は笑顔だ

あれだけの鍛錬をしていても、苦に感じていないのだらう

努力が好きなのだ

「…つと、聞いてる？流川君」

「あ？」

「だから、これから何しようか？」

知らないうちに話が進んでいた  
といつても、俺は話すと立ってしまつし、練習や特訓なん  
てする  
のは論外だ  
だが、仮にも授業の代わりの時間だ、帰るなんてことは出来ない  
さて、どうしたものか

「じゃあ、シリトリでもしましょ  
「は？」

思わず素つ頬狂な声をあげてしまった  
おそらく練習とかは俺がしたくないといつのを察して、避けてくれ  
たのだ  
ううが、まさか選択肢にシリトリがあるとは思わなんだ

なんか勝手に始まった

「じゃ、アタシからいくわね、”りんご”」

別に一人だけだし、目立つこともないか

だからといって、あまり危ない橋は渡りたくない、ここは…

「 „ „ 」はん」

「 . . . 」

「 . . . 」

「 勝ったわ、初めてしじとりで勝てた」

ものすゞく笑顔だ、てか初めてなのか  
相当、強い奴とやっていたのだろう

その後、何度も勝負をして2ターン目で必ず俺が敗北していた  
そして、6度目くらいの勝利にさしかかるひとつというその時、

「アタシ、もしかして遊ばれてる?」

あ、ばれた

流石に気づかれたか

「ひどいわ、ひどいわ、そうやってアタシで遊んでいたのね~」

なんといつか本気で悔しがっている  
若干、涙目でこちらに訴えかけてくる  
演技でもなんでもないその姿が妙に可笑しかった

「あ！」

「ん？」

「今、笑つたわよね

「な……！」

なんだと、まずい、不覚だ

今まで根暗のキャラで通ってきて、笑みなんて微塵も見せてこなかつたの

に、まさかこんなところでミスるとは……、油断しすぎたな

といづか、この場をどうするか、否定するのもおかしいしつた

そんなことを考えていると絶好のタイミングで終了のチャイムが鳴

「それじゃ

「あ、待つて……」

僕倖と思い、静止を振り切り、すぐに教室から飛び出した

その後は目立たぬよう普通に歩いた

いよいよ明日がタッグマッチだ

## 4話 「ワン子の努力」（後書き）

ありがとうございました

感想でもあったのですが、今回ので少し分かるように主人公は根暗とかではないです、あくまでキャラですただ、こうするのにも色々事情が…

会話も好きでしょうね、地の文の多さからして（苦笑あと、主人公の設定おしえてという要望があったので一つあげておくと、動物好きですかね（基本、何でも）そんなんで次回いよいよタッグマッチです（早つ

#### 4・5話 「大和のしおりと勝負」（前書き）

祝・評価50pt記念 番外編

知らないうちにいつていきました、大変感謝です

今回の話は本編とは関係ないので、読まなくても問題ありません

時間があるから、読んでやるよという方だけご覧ください  
ですが、後書きは読んでくださると助かります

#### 4・5話 「大和のしりとり勝負」

（一子の場合）

「おい、ワン子」

「んー、なに？ 大和」

「しりとりするぞ」

「えー、嫌よ、大和いじめるじゃない」

「勝てたら、このビーフジャーキーをやるぞ」「やるわ！」

「じゃあ、“り”からだ。ワン子いいぞ」

「“りんじしゅう”にゅう”」

「漢字で書けるか？ 臨時収入」

「んーん」

「だらうな、じゃ“薄絹”」

「出たわ、大和のぬ攻め、“ぬか床”」

「“狛犬”」

「うわーん、やつぱりいじめるわー」

（岳人の場合）

「岳人、しりとりでもするか」

「おひ、いいぜ」

「じゃあ、“り”からだ」

「“りんご”」

「“五臓六腑”」

「“プロテイン”！！」

「・・・・・」

（卓也の場合）

「モロ、暇だししりとりやるわー」

「いいよ」

「しりとりの“り”からだな」

「リトルバ ターズ」

「……ああ、“ず”な、“ズワイガニ”」

「ニトロブ ス」

「…もういいか」

（岳人の場合 一回戦）

「よし、こい」

「俺様からいくぜ、 “リング”」

「グループ」

「“プロテイン”！！」

「岳人にはしおりで食券でも賭けようか…」

今日も風間ファミリーは平和です

#### 4・5話 「大和のしつとつ勝負」（後書き）

はい、もう意味わからん、読んでくださった方はありがとうございます

たぶんこの面子だと、こんな感じかなーと妄想しました  
で、記念のこともあるのですが、この後書きでお知らせをしたいが  
ために書いたというのもあります

今、ヒロインに関する要望を集めています

詳しく述べ活動報告を見ていただけると分かると思います

皆様のご協力が頂ければ、幸いです

ちなみに本編の続きは明日投稿しますのでーそちらもよろしくお願  
いします

## 5話 「開戦!タッグマッチ」（前書き）

実は昨日100ptを達成しまして、今日の投稿でお礼を述べさせて頂こうと思つていたら、なんと今日150pt行つてました。本当にここまで行くなんて、読んでくださつている方には感謝できません

余裕ができれば、この二つの記念の闇話も作らせていただきます  
今回少し短いかもですが、これからもよろしくお願いします

## 5話 「開戦!タッグマッチ」

トーナメントといつのは、面白いものだ  
実力が必要なのは言つまでもないが、運も密接に関わつてくる  
例えば、優勝候補同士が初戦であたつてしまえば、自分たちの順位  
が上が  
つたも同然なのである

そんな運がよかつたのか、大した苦労もなくこの次の試合に勝てば  
準決勝  
進出といふじこまで来ていた

「では、準々決勝第一回戦を開始する、始めえ！」

俺は初戦からそうしてきただよ、開始の合図がかかつても、ポケ  
ットに  
手を突っ込んだまま、フィールドの端から一歩も動かない  
そして、川神一子が薙刀を振り回して、相手に向かう  
もはや、観客からのブーイングも起こらない

Side 百代

「おい弟、ワン子とペアの奴はなんだ」「ああ、なんか得体の知れないクラスメイトでね、余りそうだった  
から、  
ワン子が進んでペアになつたんだよ  
「あいつは何をしているんだ」

「何もしていない」

「それは分かる」

「運動神経もなくて、弱いから、手は出せないんじゃない」

大和の言ひよひに端について、戦いに参加するような素振りはない  
身長は高いもののあまり強そうには見えない

だが、一つ不可解なことがある

どんなに弱い不良でも、文化系の部の女子でも、少なからず氣というものの  
を持つている、使えなきや全く意味のないものだが、とにかくどんな雑魚  
でも微量ながらも氣を持っている、そつ、そのはずだ

だが、田の前のあの男からはその微量すら感じ取れない

弱い云々という次元の話ではない、強くなる可能性すらないのだ  
言つなれば、コンセントが入つてない電化製品のスイッチをいくら  
押した

ところで動かないのと同じだ

無と有…〇と1には大きな隔たりがある

多くの人間の氣を探つてきたが、こんな奴は初めてだ

…妹は大丈夫だらうか

Side out

川神一子が怒涛の攻めを繰り広げる

いくら準々決勝まで進んできたとはいえ、無名のS組生徒が勝負に

なるは

すもなく、追い詰めたところで一気に勝負を決めた

「勝者、川神・流川ペア」

会場から拍手が巻き起こる

まあ、全て一子へ向けてのものだということは最早分かりきつている  
今回の試合も俺は一步も動くことなく終わった

…本でも持つてくれればよかつたか

「いよいよ、準決勝ね。腕が鳴るわ」

41

準決勝に残つたのは、川神・流川ペア、井上・榎原ペア、直江・フ  
リード

リヒペア、九鬼・忍足ペア、俺らの相手は井上・榎原ペアだ

フィールドにあがる両ペア、ハゲと白髪女が上がってきた。濃いな  
まあ、今までの奴らに比べて強さは段違いだ  
さて、努力少女は勝てるのかね

「ワン子、頑張れ」「  
負けるなー、ワン子」

「准、ユキ、頑張つてください」

「F組の猿どもに格の違いを見せ付けてやるのじゃ」

おーおー、流石に準決勝ともなると外野が騒がしい  
まあ、応援されてないのが4人のうち1人だけだというのは、触れ  
まい

「両ペア、前へ」

学園長の言葉で場が静まり返る  
フィールド、会場全体に緊張が広がる  
ただ準決勝だからというのではない、「これからぶつかるのは強大な  
力同士

今までのような一方的な試合ではないのだ  
だが、二対一のようなこの状況ではそもそも言えないのが悲しい」ところ  
それでも今までのとは全く違う、いわば本番だ

学園長の開始の合図を俯いて待つ

1秒、また1秒、

そして…

「マシュマロたべる〜?」

意味不明な言葉が飛び出した

視線を下から前へと戻してみると、マシュマロが白髪女から差し出  
されて

いた……え！？なに、俺に

その娘は初対面の俺に嫌悪を示すことなく、マシュマロをくれると

いう

なんか、地味に嬉しいが、戦闘前に機嫌をとろうつたって、そういうかな

い。まったく、裏がないように見えるからって、俺は騙されんぞ  
そんな些細なことで俺の評価が変わるか、白髪乙女め

…あつさりと脳内の俺は買収されたらしい

意外に俺って、寂しがりやなのか、孤独が長すぎたか

「…いらん

「そう…ざとねーん」

何故、そんなに笑顔なんだ  
なんか、この笑顔…  
いや、気のせいか

「仕切りなおすぞい」

咳払いをする

一度去つた空気が戻つてくる

「では準決勝第一回戦、始めえ！」

## 5話 「開戦!タッグマッチ」（後書き）

ありがとうございました

前書きでも書かせてもらいましたが、本当に吃驚で嬉しいです  
ブログとかはやってないので、ホント2・3人に気づいて見てもら  
えればいいなーと思っていたので、感動です

活動報告にもコメントくださいありがとうございました  
ちょっと調子に乗ると、感想も一言でもいいのでもらえるとエネル  
ギーになります、でも読んでくださるだけで十分満足ですね  
次回はいよいよ戦闘です、VSコキ&amp;・準…書けるのか

## 5・5話 「タッグマッチ初戦」（前書き）

100pt記念がやっと出来たと思ったら、200pt行つてました  
もはや、信じられません、本当にありがとうございます  
ですが、150pt記念もまだなのに：

嬉しい悲鳴ですね

番外編のため、飛ばしていただいても問題ありません  
5話の続きでは決してないのであしからず

基本、小数点のつく話はこういう形でいきたいと思します

今回は特筆することもないかなと思つた

初戦の話を気まぐれで書きました、よろしかつたら読んでください

## 5・5話 「タッグマッチ初戦」

タッグマッチが始まったわけだが、正直ほとんどの奴らは楽勝なんじゃな

いかと思つ

仮にもあれだけの努力を毎日している少女エリートで人を見下しているような、いかにも汗臭いのを嫌いそうな一般

層のS組は相手にならないだろう

だから、俺は隅っこで大人しくしてよう

目立ちたくないの、もとよりそのつもりだったのだが。いや色々理由つけないと、一見、最低野郎だからな

少女を戦わせて、何もしない男という現実から逃避させてくれ

勘違にするなよ

俺だってそりや、「ゴーレム級が出てきたら、戦線にたつぜ俺が言つてんのは、ドラキーマくらいは自分で対処してくれつてことだ

はあ、言つてて虚しい

どうせ、ゴーレム出でても動けねえよ

だって、目立つもの、そんなことしたら確実に注目の的だもの

そして、初戦が始まった

俺は目立たないよう元の場を一步も動かない案の定、ブーイングがとんできた

うつせーよ、俺の勝手だろうが

田やうりペットボトルやら、物が沢山とんでくる

「JRで用意したんだ、JRなんもん

審判は何も言わねえし……

いてう

誰だ、このヒーラのペットボトル投げたやつは  
中身満タンで投げたら、もはや鈍器だぞ

そんな試合とは全く関係ないものと戦っている間に勝負は決していた  
ご苦労さん

その後、一回戦目からは諦められたのか、何も飛んでこなかつた  
助かつたが、男としては複雑だ

せめて、心の中で応援でもしつくか

## 5・5話 「タッグマッチ初戦」（後書き）

ありがとうございました  
何とも手抜き感満載ですね

一応、記念というか形に残しておきたいので書かせていただきました  
あと、ヒロインアンケートも活動報告にて、まだまだ募集中なので  
お願いします。コメントもお待ちしております  
本編の6話は明日、投稿します

## 6話 「揺るがなれよ」（前書き）

一日見ていない間に400回もつて…

これは夢なのでしょうか

読者の方にはいくら感謝してもしたりません

今回は初の戦闘？シーンなので、いつも以上に前後不覚な文章にな  
つて

いると思いますが、寛大な心でお許しください

## 6話 「描るやなお瞳」

遂に始まってしまった

相手はおそらく格上、甘く見ても互角といつたところだらう。今回も俺はファイールド端で待機なので、実質一対一となれば、そんな相手

との勝負の結果は見えてるのだが…

隣の少女は全く諦めていないようだ

「せいやああああっ！」

薙刀で果敢に突っ込んでいく

だが、今までとは違い、初撃を難なく回避される

「おひおひ、勇ましいね～」

「ほいほーい」と

一撃、二撃と薙刀を横に振るうが、それも空を切る

やはり、分が悪いか

まあここで終われば、これ以上目立たんし一向に構わんのだが

この俺を選んで、優勝を目指そつといふ精神がもう分からぬこの試合も相手が遊びをやめて、一人がかりで川神一子を獲りに来たら、

1分もつて終了というのが、甘めの推測だ

そんな至極もつともな予測を立てつつ、視線を川神一子に向ける

### 真っ直ぐだった

その瞳は絶望も諦めも不安も、一切の弱さを映してはいなかつた  
ただ目の前の敵を見据え、その先の勝利を見つめている  
自信に、あの毎日積み重ねてきた修行による自信に満ち満ちている  
おそらく、学園長に敗北の判定を受けるまで、その目には火が灯つ  
ていて

自分の勝利を信じて疑わないだろう

はあ、なんつー顔してんだか

直後、回避され続けている横薙ぎから、持ち替えて、縦の攻撃に移  
行する  
今までの攻撃がフェイントとなり、速く鋭い攻撃だつた  
なるほど、どうやらハゲ一人にターゲットを絞るらしい  
なかなか、考えた作戦だ

だが…

受け止められた

相手は今までの奴等ではない、その程度でダウソなら苦労しない  
技のキレは良かつたが、速い分パワーが追いついていないようだ  
一手、足りなかつたか…

「ふふ、残念。あまり女は殴りたかないが…」

「川神流 蠻撃ち！」

「ガツ！？」

：驚いた

攻撃を受け止められた直後、あろつこと川神一子は得物を手放し、

素早

く打撃攻撃へシフトした

まるで受け止められるのを予想していたかのように、といづか予想してい

たのだろう

その日は自信に溢れているが、相手の力量はしっかりと測っているらしい

しかも、武器を受け止め、がら空きのボディに今の内臓をえぐるよう

な正

拳突き。

頭を使えるような奴ではないと思ったのだが：

いや、これも実践を積み重ねた努力の結果なのだろう

ともかく、ノーガードにアレはきく。もう一発打ち込めば、ダウン

だろう

川神一子も承知しているとばかりに相手が落とした薙刀で追撃を放つ

だが、その体は前に進むのではなく、後ろへ吹き飛ばされた

「まつほほーい、やらせないよ～」

そこには、もう一人の白髪乙女が「一二一」と蹴りを放っていた

そう、これはほぼ一対一の勝負だ

どんなに考えて、奇怪な動きで翻弄したとして、圧倒的に手数が足りない

なにせ、こちらは2本、相手は4本なのだから

それに実戦経験といったって、模擬試合のようなものだろうとすれば、基本的に一対一の形式であることは予想がつくつまり、3本目、4本目の腕から放たれる攻撃に対処できないのだ

「おお、助かつた助かつた」

「しつかりしろよお、ハゲー」

「つたく、油断大敵だぜ、お嬢さん」

「僕らは一人でチームだよん」

そのうえ、ハゲまで首をコキコキと鳴らし、体勢を整えてしまった飛ばされた少女はフィールドの端で悔しそうに睨み付けていたこれじやあ勝ち田は薄くなってしまう

……って、なんで俺は勝ち目なんて考えてんだ

川神一子があの二人に勝てるわけがないと分かりきっているのに

はあ、あの真剣な眼差しを見過ぎたか  
毒されるのも大概にしないとな

ここで勝たれたら、晴れて決勝進出だ、少なからず立派てしまふ  
そうだ、これは負けて当然の試合だ

「じゃ、そろそろいくぞお～」

突如、フィールド端にいる川神一子を一人がかりで叩きにくる  
あー、こりや終わつたな

そもそもここまで持つたのが奇跡だろう  
相手がその気になつてしまえば、挟み撃ちでも、同時攻撃でも、幾らでも

手はあつたのだ、ただ今まで相手がそれをしなかつただけのこと

「…くつー」

少女は薙刀を構えるが、もし一人の攻撃をどちらも運良く止められたとし  
ても、反動を受けて、場外に出てしまつ距離だつ

そんな心配こそ滑稽だ、格上の一人の攻撃を受けきれるわけがない

ハ方塞、ジエンドだ

流石に努力じや覆せなかつたか、二対一は：  
俺の予想は遙かに超えていたが、ここまでか

だが、その大きく見開いた瞳には相も変わらず、自信の炎が灯つて  
いる  
ざわつく会場も氣にもとめず、ただ前を見てい

はあ、なんつー顔してんだか

そして、二つの拳は薙刀にかすることなく、突き刺さつた

## 6 話 「描るやれなれ」（後書き）

ありがとうございました  
えー、感想の方で、1話が短いと言われてしまつたのですが  
毎日今の長さでも更新と、日があいても長くするのは  
どちらがいいのでしょうか？

活動報告も後につくつておくので、コメントが感想で教えてください  
ちなみに、自分の勝手な意見だと毎日あげたいと思っております  
しかし、読者の方の要望があまりにも強ければ考え方を変えて頂きます  
長くなつてすみません

次回に続きます

## 7 話 「やる者、やられたる者」（前書き）

はい、話の長々でごめんなさいですが、監修者がやつやすい方をやつていい  
よと  
書いてくれたり、毎回呪たことと書いていたので、今の長々でこ  
れあります  
しかし、余裕があるときは、特に正確なまねかへりこ上手にやれるよ  
うに  
なるのを目標します、本当に魔界あつがとハーレムをした  
これからもよろしくお願いします

## 7話 「守る者、守られる者」

Side 一子

相手は今までよりもずっと強いのが肌で感じる  
大変かもしれないけど、勝つしかないわ  
無理矢理ペアにした流川君を守らなきゃ！

だけど、相手はアタシの予想以上に強かつた  
無闇に一人相手に攻撃を振るつてもするりと回避される  
かといって、1人に標的を絞つたら、この通り端まで吹っ飛ばされた  
相手が逆の端から走ってくる、どうやら一人同時に来るようだ  
すぐに体勢を整えようとするが、思ったより蹴りが深くまで入つて  
いた

でも、絶対に負けられない！  
アタシが諦めたら、誰の支えにもなれない！

アタシは2年生になつて、ファミリーの監とおんなじクラスになつ  
て、と  
ても嬉しかつた

当然、そこには知らない人もいて、そんな中ウメ先生に出欠確認で  
いきなり、鞭で叩かれた生徒がいた、「おう」なんて答えたのだ

その生徒の名前は“流川海斗”

無口で無表情、誰に対しても他人相手の京みたい、ううん、それ以上にそ

つけなく、とにかく人と話してるとこを見たことがなかつた

そんな彼のことが少しだけ気になつた、何故だかは分からない  
たまたま起きていた授業などは彼のことを観察していた

そして、気づいた、その瞳に。

あの誰も信用しようとしたせす、現実に飽き飽きしている氣だるい瞳  
眼鏡のせいによく見えなかつたが、何度も見てようやく気づいた

その瞳はアタシにはよく見覚えがあつた

孤児院にいたとき、親に捨てられたばかりの子たちが一様に持つて  
いたそ

の瞳、人がやつてくるのを拒むようなその瞳

そこでアタシは何度も何人もそれを見た、あるいはアタシもそうであつた  
のかも知れない

これが気になつていた理由だつたのだ

アタシはタツちゃんに守られて、川神院に引き取られて、ファミリーの皆  
と遊んで過ごして、色々な人達に助けられて、支えられて、楽しい  
毎日がある。今のアタシがいる

だから、今度はアタシが助けて、支えになつてあげたかった

実際に話かけてみると、2文字の返答ばかりで流石の無口ぶりだったけど

無視するなんてことは一度もされなかった

絶対に悪い人じやないと思った、本当は優しいんだと感じた

だけど、表情だけは変わらないままだった

もつと知りたかった、彼のことを

そして知つて欲しかった、毎日は楽しいことを

ウメ先生からタッグマッチの話があつた

ペアは自由に決めていいようだつた

途端にクラスの女の子たちは“流川君とは嫌だ”と言い始めた  
ヒソヒソ話のつもりだつたんだろうけど、静かなクラス全体にその声は聞

こえていて、氣まずい空気が流れた

だけど、流川君はそれを大して気にした様子もなく、ただ現実として、受け入れていた

そんな横顔を見たアタシはペアに立候補した  
これでもつと仲良くなれると思つたから

午後の授業がタッグマッチの準備にあてられた  
流川君は大和の話だと、あまり運動が得意でなく、力も強くないと  
いう  
だから、アタシが守つてあげるといった

時間が余つたから、練習も嫌だろつと思つたアタシはしりとりを提案した

相変わらず、無口だつたけど、アタシは見事に遊ばれた

せつかく勝てたのに、悔しくて必死に抗議した

そんなときに流川君が初めて微笑みを浮かべた

無機質でない、今まで見たことのない柔らかい表情だったそれを指摘したら、流川君はぱつが悪そうに帰つて行っちゃつた

嬉しくて胸があつたかくなつた、手をあてると少しどきどきして修行で走り回つたあのどきどきも好きだけど、それとは違つても、何だか心地よかつた

)

目の前で何が起こつているのか分からなかつた

二人の拳がアタシの前に立つ流川君に突き刺さつていた  
守つてたはずの人に、今アタシは守られていた

別に一瞬でアタシの前に移動したとか、そんな離れ技をしたわけじゃない

見えていた、隅にいた流川君が、相手が攻撃のモーションに入る前に、こ

ちらに向かつて歩いてくるのが。

ホントにゅつくりとアタシの方へ近づいてきた

そして、アタシの驚きで大きく開いた瞳を見て、溜息を吐いたかと思つと  
何が起こつてゐるのか分からずにざわめく会場も無視して、アタシの前で停

止  
し  
た

状況が飲みこめず」にただ前の流川君の背中を見ることしか出来なかつた

Side out

右のあばりと左のわき腹に一いつの拳が突き刺さる  
てか、この女の方がダメージでかいつてどりぬけられ  
だが、俺は声を上げることもなく、その場にどどまる

「あれれ？」

「おいおい、こいつ攻撃が効いてねえのかよ」

馬鹿か、しつかり痛いつづーに

しかし  
あわた

我ながら黒鹿なことをしたせんた

放つておけば、試合は終わって、目立つことなく終了したのに……

本略約は、本規約の文書を複数枚提出する場合は、各枚に記載する旨を明記する。

偉い迷惑だよ、人の意志に干渉してくるなんてな  
はあ、もうやつてしまつたものはしょうがない

守つたからにはこの勝負、勝たせてもらわねえとな

## 7話 「守る者、守られる者」（後書き）

ありがとうございました

なんか、前回の終わりに違和感を感じてくれた方は、全てすつきり  
したの

ではないでしょうか

いよいよ、主人公の本来の性格が見え隠れし始めると思います  
そして、戦いは次回も続きます…ダラダラですね

活動報告にて、形式についての質問がござります  
参考にさせて頂きたいのでご協力お願いします

8話 「力無き戦い」（前書き）

今回ついに激突です  
では、散々ひつぱつた海斗の戦いをご覧下さい

## 8話 「力無き戦い」

Side 由紀江

おかしいです、あの方からは絶対に一般人にあるはずの気が微塵も感じません

そういう方も私が知らないだけで存在するのかもしれません

ですが、今の問題はそこではありません

その彼は一子さんを守るために一撃を自ら受けました  
いくら強い人といえば、攻撃を正面から無抵抗に受けるなんて、恐怖です

し、もちろん無事の保障なんかありません

それこそ、気がの人が突っ込んだら、その危険はより現実的なものとなるのは言つまでもありません

それなのに彼は何のためらいもなく、一子さんの前に歩みを進めました

それだけで、彼がとても優しく、仲間思いの人であると分かります  
気がなくとも、本当の意味で強い人であると…

私も彼のようになれば、友達ができるのでしょうか？

ですが、その彼にクラスメイトから歓声の一つも上がらないのは、  
一体、  
何故なのでしょう？

さて、勝ちにいくと覚悟したわけだが…  
こちらから手を出すのは少々危険だ  
だが、これで勝負に負けては、何のためにしゃしゃり出たつてこと  
になる

ざわづく会場は思考の邪魔なので無視する

如何にして、ここいらを倒そうか  
攻撃手段はこの一子しかないのだが、作戦に他者の力を入れてし  
まつと  
誤算が生じやすい

うむ、あまりダメージが蓄積すると、俺もやばい  
なので攻撃を多く受ける前に考えてしまわないとな  
かといって、避けたりしたら、相手を勢いづけるだけだ  
相手もいきなり本気の攻撃なんて仕掛けてこない

その油断の隙に活路を見出してやる…

「あれれー、おつかしいな~」  
「もう一発くらいやがれ」

また、一発の拳が…

いや、蹴りが飛んできやがった

なに、いきなりスイッチ入れてやがんだ、こいつらあと三回くらいは拳の流れだろうが、普通は避けるわけにはいかないので、そのまま受け……るー？

「流川君ー」

危ねえ、

蹴りが見事にヒットした

ハゲが腰に一発と、白髪乙女が首へのハイキックを見舞つてきた  
あろうことか女は俺の意識を刈り取ろうとして来やがった  
しかも、首で一番筋肉がない守りの薄い部分を正確に。  
要するにピンポイントで俺の急所を狙つてきたのだ、加えて結構な威力

俺は誰にも認識されない程度の小さな動きで着弾点をわずかにずらした

攻撃が当たると、激しく脳が揺さぶられたが、無事気絶。ポイントは回避す

るのに成功したようだ

それにしたつて、首への攻撃だ、めちゃくちゃ痛い

ていうか、攻撃が何段階か飛ばして進化しそうだろ

階段は一步一步を大切に踏みしめて上つてこようよ、お嬢さん

「あれー、これも効いてないのかなー」「こいつホントに痛覚あんのか？」

まあ、それでも俺は声を上げず、表情も崩すことはない  
ていうか、痛がつたら、この後ろの少女にきっと心配されそうだ  
あくまで、冷静に作戦を考えよつ、…白髪乙女に注意しながら

「よーし、んじゃ連撃しちゃうよーだ」「

な!?

俺がその声を聞き取った瞬間、拳のラッシュが襲ってきた  
無抵抗の体がサンドバッグにされる

しかも、こいつら段々手加減がなくなってきてないか  
くそ、少なくともアザだらけなのは確定事項らしい

「おらおら~」

「流川君ー」

はあ、マジで体中がいてえ  
何で俺がこんなに殴られなきゃいけないんだ  
負けちまえば楽になれるじやねえか

このまま後ろに倒れれば、場外に出て、負けとなり、こんな理不尽  
な一方

的な暴力から解放されるんだ

そうだ、別に俺が負けたところで何かが終わるわけじゃない  
なら、楽になろううじやねえか

こんな状況、真性のMしか喜ばねえつづーの  
悪いが、俺には一方的にハゲと白髪乙女に殴られる趣味はない

こんなムカつくことはもう御免だ

「これでとどめだ！」

大きく伸びるストレートが俺の胸を強打する  
俺は今までのよつに抗いはせず、力に身を任せて後ろに仰け反って  
いく

まあ、我ながら善戦したと思つ  
やれる手は全て尽くした

あと、俺に残された出来ることな  
…

「なー？」  
「おり？」

…」の両の手に握った手首をしつかり掴んでる」とへりいだよな

殴られんのはもうウンザリだってーの  
さつさと負けをせてもらひわ

つたく、油断大敵だぜ、お一人さん

「試合終了！流川・川神ペアの勝利」

学園長の判定が静まり返った会場に一際大きく響き渡った

8話 「力無き戦い」（後書き）

ありがとうございました  
見事、頭脳戦で海斗が勝利しました（ずるいだけか  
この調子で決勝だいじょうぶでしょうか  
そんなわけで次回もよろしくお願いします

## 9話 「近づく距離」（前書き）

皆様、「ご意見ありがとう」「やれこました」と、今までのままでいきますが、会話に行間を入れるなど、多少の変化はあると思います。

前回の最後、分かりにくかった方はすみませんでは、どうぞ

## 9話 「近づく距離」

Side 百代

ワン子は来る日も来る日も努力していた

だから、その強さは私も認めているが、あくまでそれは一般の武道家たちと比べてということだ、上には上がいる

そして、今回の相手は明らかに格上の相手  
事実上、一対一の試合だったし、始まる前から結果は見えていた  
それでも、ワン子は諦めることなく、果敢に攻め込み、相手の1人に大き  
なダメージを与えた

予想より善戦したが、やはりそれまで

すぐに残りの1人に反撃されて、フィールド端まで追い込まれた  
よく1人だけで準決勝まで進んだと帰つたら褒めてやろう

そんなことを考えていたら、目の前に信じられない光景があつた

あの無気力男がワン子の前に立ち、攻撃を受けた  
そいつはいくら攻撃を受けても、全く痛がる様子はなく、最後まで  
ワン子に攻撃を通すことなく、対戦相手を道連れにして、場外負けとなつた  
氣もない人間がまさかあの一人に勝つてしまうなんてな  
やり方はどうあれ、なかなか面白い奴だ、流川

ふい、なんとか勝てたわ  
てか、体がまじで痛いわ、まあ骨がイつてないだけいいか

「流川君、大丈夫?」

一子が今にも泣きそうな顔で迫ってきた  
なんか、こうして見るとワン子と呼ばれているのも頷ける

「ああ」

「でも、流川君のおかげで勝てたわ、ありがとう」

「ん、別に」

実際、一子がフィールドに残っていたから出来た作戦だし、何より  
この試合で勝ち残っていたのは一子ひとりだけなのだが

まあ、こんな笑顔で感謝してくれることだし別にいいか  
一子には借りもあるし、こんな嬉しそうにしてくれるなら、まあや  
つてよ  
かつたつてどこか

「でも、アタシが守るつて言つたのこ、結局守らねちゃつたわ」

「男が女を守るのは当然だ」

「…………」

口をあんぐりと開けて、一子が沈黙している

やばい、なんかキザなこと言つて、ひかれたか  
でも、これは建前とかじやなく、本心なんだが…  
え、てことは何？他ならぬ俺自身にひいてること？

これは正直、やつれの試合の傷より痛い

「…した」

「ん？」

「初めて文章を話した！」

「…はい？」

「こつも2文字くらいしか喋つてくれなかつたのこ

ああ、分かつた

俺が普通に話したことがかなり驚きなのか

まあ、俺もこのまま誰とも話さずに学校生活が終わると思つていたが  
こいつと一緒に一人で話す分には田立つことにはならないだらう

なんか予定が狂わされてるな、見事に

### Side 一子

本当に驚いた、私の前に立つたときもそうだけど、あの一人を全く手を出さずに倒してしまった、そのことがすぐには信じられなかつたでも、じこちゃんの声が響き渡つて、その光景が現実であることを実感した、本当に勝つたのだ

流川君がアタシの前で相手から一方的にやられてるとき、胸が張り裂けそ  
うだつた、アタシが追い詰められたことで流川君が犠牲になつてい  
ただけど…

何故だか、その守ってくれてる大きな背中を見ると嬉しかつた  
流川君が攻撃されて悲しいのに、その嬉しさも収まつてはくれなか  
つた  
アタシが何もできなかつたのはそのせいもあるのかも

でも、アタシが守るつて約束したのに、守られてしまつたのはやつ  
ぱり、

悔しいし、情けないし、申し訳ない

そのことを流川君に謝ると、真剣な顔で“女は男が守る”んだって

今まで、“ねう”とか、“ああ”しか、話してくれなかつたのに、やつと

会話ができる、ちょっと仲良くなれた気がした

この調子でもつと、毎日を樂しいと思えるよつになつてほしい

でも、アタシの方が流川君に喜ばれることが多かったな…

そして、さつきは嬉しが先行して、なんともなかつたが、後で流

川君の

言葉を思つ出して、じめじめしていた

Side out

次が決勝か、ここまで来てしまつた  
俺の予想では勝ちあがつてくるのは5組だらつ  
ちょっと優勝は流石にまづい、田立つとか最早そつこつ次元じゃない  
やつぱり一応、きいてみるか

「なあ」

「ん、なーに?」

「棄権し…」

「決勝、がんばりましょ」

俺の提案は会議にかけられる前に否決された

まあ、今更か

棄権もそれはそれで田立つし、普通にいつて負けるのが無難か  
次の相手には多少、警戒も生まれちゃってるだろうし

ああいうのって、不意打ちだからな、一発限りなんだよな  
それに相手は決勝に上がつてくるほど実力者  
あれ？よく考えるとなんの心配もないんじゃないか

負けても総合2位なわけだし、一子も文句ないだろ？

Side 大和

正直、“流川海斗”という男が分からない  
人と関係をもつていらない奴は俺にしても調べようがない  
ただの陰気で孤独な奴だと思つていたので、ワン子とペアにならせるのは  
正直、反対だった

しかし、今はますます分からなくなっている  
ピンチのワン子を助けただけでなく、試合にも勝利してしまった  
しかも、全く手を出さずにだ

今の行動、一部始終を見て、クラスメイトは困惑している  
委員長やキャップは警戒を解いて、良い奴かもという認識に改めて  
いると

いう感じだ、逆にそれ以外の人間は今まで多少印象は変わるもの的根本にあるクラスでのアーツのイメージを払拭できていなか

だが、ワン子は実際に守られた身、ある程度の信頼が芽生えていると解釈をして、まず間違いないだらう

相手がそれを狙っているところとも考えられなくはない十分に可能性はあるし、警戒するに越したことはない

今、俺の出来ることは奴の情報をなるべく早く集めて、仲間の安全を確保できるようここでおくことだけができる

Side out

「では、これより最後の決勝戦を開始する」

思っていた通り、5組の九鬼・忍足ペアが勝ちあがつてきていた  
ていうか、このメイドは少しやばい感じがする  
なんつーか、試合への鬪氣つていうよりも、この冷たい感じは…

「始めえー！」

最終試合が始まった

## 9話 「近づく距離」（後書き）

ありがとうございました  
やつと、大量の地の文から解放される兆しが  
見えてきたのではないでしょうか  
そして、フラグは着々と準備します  
ちょろいとかは言いつこなしです（笑）  
次がやつと決勝、のんびりですがよろしくお願ひします

## 10話 「破られた沈黙」（前書き）

初の1日に2話投稿

これは厳しい、慣れるまではあまり乱発できないですね

9話は新しく作ったのではなく、仮8話を編集で投稿したので

読んでない方はこれを読む前にどうぞ

読んでいる方は続きを読むをどうぞ

## 10話 「破られた沈黙」

「まさか、決勝の相手が一子殿とは」

「九鬼クン…」

「うぬぬ、5組の誇りがかかってゐるといえ、心苦しい限りである」

「英雄様、ここは私にお任せください」

「む、なんだあずみ」

「こゝら試合とはいえ、英雄様が最愛の方と戦つ必要はありません、この忍足あずみが責任を持つて勝利しますので、英雄様は客席でお休みになつていてください」

「ふむ、あずみ、素晴らしい忠誠よ。ならば、我は信頼の元にそつさせて

もうおう、フハハハハハ

「もつたいたなきお言葉です、英雄様～」

「・・・・・」

そうじつて、メイドがテゴバツにアイマスクを渡して、テゴバツは  
フリー

ルドの外に出て行ってしまった

あれ、もう既に相手を一人倒しちゃった？

くそ、負けるつもりだったのに、なんでより有利な状況になつてんだ！

…と思つたのも束の間

「はあ、ようやく始められるなあ」

「…」

いきなり、口調が変わった、いや口調だけじゃない  
二重人格ってわけでもなさそうだし、こっちが通常らしさいな  
てことは、デコバツの前では猫をカブつてんのか  
だから、わざわざ田隠しまで渡して、睡眠を促したと…

やばいなあ、こいつから出でんの殺意じやん

「お前、あれだけの攻撃を受けて、動けるつてことは、ある程度強  
いって  
認識していいんだな」

確實に俺に向けて、言つてるよな

無口キャラだが、強いとかいう誤解は解かないと後々めんどい

「弱者は頑丈じゃないと生きれん」

「はあ、まあ強そつには見えないわな」

疑つては見たものの、俺の滲み出る弱さオーラの方を信じていろ  
うだ

つーか、こいつ女のくせに口口わるいなー

「だからって、油断はしないぜ、あんな手に引っかかるなんつーのは御免  
だからな」

そういうて、小太刀を両手に構える  
武器はレプリカだし、斬れることはない  
だが、コイツの場合、武器より殺氣の方がよっぽど鋭い

「んじゃ、戦闘開始だ」

途端、圧倒的な速さでメイドがこちらに向かってきた  
なに、最初から狙いが俺かよ…！

凄まじい量の斬撃がわずか数秒の間に俺の体を襲う  
痛みが先ほどの比ぢやないが、ある意味これはチャンスか?  
ここ倒れておけば、目立つことなく終了だろつ

「せいやああああつー！」

そんな思考を割るように一子が薙刀を振るつた  
メイドはそれをかわし、懷に入つて当て身を見舞う

今の動きは完全にただのメイドを凌駕していた  
護衛つていうより、こいつはどちらかというと狩る側の人間だ  
そんな奴の攻撃をくらつた一子は薙刀でなんとか姿勢を保つている

これは圧倒的だな、悔いなく勝負が決まりそつだ

「不意打ちであたいの首がとれるとと思つたか、小娘」

「くつ…！」

「お前じや敵わねえよ、ぐぐり抜けた修羅場の数がちげえ」

「それでも諦めないわ」

「はつ、努力だけで天才に勝てるなんて、いつの時代のスポ根漫画  
だよ。

どこまで努力したって、その人間相応の限度つてものがあんだけよ、  
その器  
が相手の大きさに足らなければ、いくら器いっぱいに水を注いだと  
ころで  
量が覆ることはねえんだよ」

「……は？」

今、コイツは何を言つた?  
この腐れメイドは何をござきやがつた?

「おい…」

「ああ?なんだよ、根暗ヤロー」

驚くくらい自分の声が震えていた  
言葉から怒りを隠し切ることがまるで出来なかつた

無口だの、根暗だの、地味だの、ひ弱だの、無感情だの、そんな設定は1

つ残らず、頭の中から追い出されていた

「お前は何、馬鹿な」と垂れてんだ?」

「え、どうしたの!ー?流川君」

「なんだなんだ、根暗が狂つたか?」

一子が練習しているのは毎朝見かけた  
強くなるためにひたむきに努力し続けていた  
自分の強さを誇りにしつつも、自分の未熟さも認めていて、まだま

だ強者

には届かないと知つていながら、それに絶望するのではなく、それさえも

糧にして、進み続けていた

その瞳は眩しいほどに真っ直ぐと前を見ていた

そんな鍛錬を多くこなし、自分に人一倍厳しい彼女は、いつも明るく、誰

にでも公平に接した、この俺にもだ

ペアができる嫌われた俺の前でも彼女は同じ笑顔を見せた

どんな困難な状況でも、明るく揺らがないその姿はまさに勇ましかつた

「努力じや天才には勝てないだと……？」

「おいおい、お前まで熱血理論がます気かよ？ 勘弁してくれ」

この勇ましい少女は俺を狂わせた

俺と会話をしようとしたし、笑みまで引き出された

なら、徹底的に狂つてやる

「勘違いしてんじゃねえぞ」

「ああん？」

「どうせこのまま田立たないよう」暮らしたって、この退屈な日々が

永遠に

ループするってのは目に見えてる

「どのみち、一度は絶望した人生

どうなるうが知ったことか

ならば、俺は自分の衝動に素直に従うままで

「努力が超えられない存在が天才なんかじゃねえ」

「流川君？」

「どんなに高い壁を田の前にしても、諦めずに努力し続けられる奴のこと

を天才って呼ぶんだよ」

わざわざ、自発的に俺とペアになろうだなんてな  
ホントに向で、わざわざ印象を変えてまで、人から避けられるよう

にした

んだが、物好きもいるもんだ

「ははっ、何いうかと思えば、ならその天才はあたいの実力とつり合  
つてくれるのか……ねつ！」

俺の顔面に向けて、思い切り放たれたパンチを何もせず受けける

それが俺の覚悟だと自分に言い聞かせるように

これで変装グッズも壊れてしまつたわけだ

戦闘に邪魔なウザい前髪をべしゃべしゃとかき上げ、地べたに転がつた、

もはや本来の役割を果たさないであらう眼鏡も踏み潰す

口の中に広がる鉄の味を吐き出して、言い放つ

「だからよ、お前の相手はここの凡才の俺で十分だ」

さて、じゃあ手始めに俺の後ろでびっくつしてゐる物好きさんに優勝でも、

プレゼントしますかね

## 10話 「破られた沈黙」（後書き）

ありがとうございました  
やつと海斗のスイッチが入りましたね、熱いときには熱い  
長い地の文とはお別れかな？ たぶんそんなことないです  
とこりうか、あずみはこんなキャラじやない。一子とのフラグのために  
犠牲になつていただきました

次回どんな戦いになるのか、期待しないでお待ちください

## 11話 「四対」（前書き）

皆さん、感想くださつてありがとうございます  
主人公を気に入つてくださつた方がいらしたようで、  
書き手としては嬉しいかぎりです  
では、続きをどうぞ

## 11話 「四対一」

Side 大和

F組の応援席は騒然となっていた

「あのイケメンだれよ」

「ていうか、流川君ってあんなに喋るんだ」

「なんか乗り移ったんじゃない?」

クラスの大半はその表情を驚きに彩られてるが、一部の単純な女子たちは  
その姿勢に騒ぎ立てている

本当にあいつのことが分からぬ  
ただ…

あいつのことを見るワン子の目が若干取り返しがつかなくなつてい  
る…

Side out

「お前の相手は」の凡才の俺で十分だ

さて、大見得きつたはいいが、どう勝とうか

目立つの仕方ないにして、やはり弱く見られていたほうが何かと都合

がいい、相手の油断が俺にとって最高の武器だ

出来れば、手を出さずに片付けたいのだが…

攻撃を見舞うというのは、色々と気が引ける

しかし、さつきの方法は警戒されていて使えない

「なら、せいぜい楽しませてくれよ、凡才」

先ほどより、速い攻撃が一瞬のうちに5発繰り出される

俺はそれを全てかわすことなく、体で受け止めた

ただし、さつきと違うのは微妙に体をひねり、その威力を殺していくあくまで、相手に気づかれないと微妙にだ

相手には同じように無抵抗で攻撃を受けているようにしか見えない

なにせ、殴った感覚はそのままにあるからな

戦い慣れたものほど、あまり攻撃の際に視覚を頼りにしない己の感覚を研ぎ澄まし、視覚はどうやらかといつと防御に用いる

「たいそつなことを言つていて、反応もできないのかよ」

いいぞ、もつと油断しろ  
やはり、場外に出るのが一番楽か  
そう思い、攻撃を受けつつもフィールド端に誘い込んでいく

「おつと、そつちには行かねえぜ」

「見抜かれていたようだ

どんなに油断していても、やはり一度は無理か

なら、どうするか

一応、準備はあるが、敵があの警戒状態では手数に欠ける

「相手はアタシもいるわ、タアアアア！」

「くそ、めんどくせえ」

すぐさま、メイドは振り下ろされる一撃に対応して、素早い小太刀の連撃

で一子をこちらに吹き飛ばしていく

：ん？

手数足りるじゃねえか

自分がつこうつきの試合で考えたことだ、今の手数は四対一

俺は一子の腕を掴み、自分のほうに引き寄せた

「うわ、何！？流川君」

何故、そんなに焦る…

田すら合わせてくれないし

俺からアクションを起こすつてことに慣れてないのか？

「今から囁つことによく聞け」

「う、うん」

「俺が合図したら、…………れ

「え、でも…」

「いいから、俺が頑丈なのは分かつただろ？」

「分かつたわ」

「おい、あたいはそんなに気が長くねえが

メイドが突っ込んでくるのを、一歩に分かれ回避する

一子に難しい作戦は無理だと考えたので、一つだけ単純な指示を出した  
これなら、失敗なんてこともないだろう

「フ、そろそろ本気で仕留めてやるよ

案の定、俺の方に向かつてきました  
サポートである守りの俺から潰すといふのは定石だ  
だが…

「敵に背を向けるのは関心しないぜ」

「川神流 大車輪！」

「くつー!？」

薙刀の一撃が真後ろから突如襲う  
メイドは多少、不意をつかれたものの、すぐに反転して、攻撃をい  
なす

「そんな大振りな攻撃じゃあたらねえよ」

「くつー!？」

「はん、雑魚は吹っ飛びやがれ」

「だから、背を向けるのは関心しないって

「なー?」

メイドは今度こそ完全に不意をつかれた

そりゃそうだ、俺から手を出すことはないと思つてんだからな  
回避は不可能とみて、俺からの拳をガードしようつと構えるが、..

俺は手を出さないんだつーの

守るつと前に出された片方の手に手錠をかける

「なんだこれは、アイテムは禁止だろ」

「何言つてんだ、これは俺が正式に申請した武器だ」

学園長はうなずいている

そして、悔しそうにするメイドの前でもう片方の錠を自分の手にかかる

「あ、何やつてんだ、テメエ」

「これでお前は逃げられない」

「何言つてんだ、近接戦闘なら、片手でもテメエに負ける気はしねえ」

「いや、もうお前の負けは決定だ」

「こくわー」

後ろでは一子が薙刀を回していた

どうやら、あの技回すほど威力が上がるらしい

先ほどは急だったので少ないモーションだったが、今度は違う

「ふ、さつきはかわしたが、一度見た技なら止めることも容易い」

まあ、威力が上がっているとはいえ、少なからずその可能性もある  
だろう。  
だけどな…

「川神流 大車輪！」

「何！？」

一子の薙刀は迷わず俺の方に伸びてきた

俺が出した指示はひとつだけ

“合図を出したら、俺を思い切り吹っ飛ばしてくれ”

これならフィールドから若干離れていても、場外に届く  
つまり、相手の警戒の外でチェックメイトができる

肺の空気を根こそぎ持つていくような攻撃が俺に当たった  
ちと、キツイが十分な威力だ

刃の峰ではなく、柄でやつたのは一子の優しさだろう

頑丈だといつても、多少心配だったが、嫌な役やらせりまつた

このメイドはまだまだ力を残してるって感じだつたな  
まあ、学校のイベントごときで本気は出さないか

それにして、油断しそぎだつてーの

つーことで今回はあるの努力少女に優勝をやつてくれや

学園長は俺たちが場外に弾き出されたのをしつかりと確認すると、  
高らかに  
宣言した

「優勝は流川・川神ペア！！」

## 11話 「四対一」（後書き）

ありがとうございました  
勝利したとはいって、まだまだ主人公には何かあります  
そして、ワン子は：  
次回でタッグマッチ完結？

## 12話 「パートナー」（前書き）

タッグマッチ編終了です  
なんか終始ダラダラしていましたが、  
それはこれからも変わりません（断言）

それでも構わないという方はこれからもよろしくお願ひします

## 12話 「パートナー」

Side 由紀江

見事！

その一言に尽きます

あの…“流川”さんでしょうか

全く手を出さずにまたもや勝ってしまいました

相手の忍足さんという方も見たところ相当なやり手です  
それをあんな奇策で出し抜いてしまうとは

しかも攻撃を受けていたように見えて、全ていなしていました  
気こそないですが、の方は相当に強いのではないのでしょうか  
それに…

“高い壁を前にして、努力をし続けられる人が天才”

心に響く言葉です

の方の人間性が分かる一言でした

私ももっと努力しないと…

あうう、友達100人できるでしょうか

Side out

「せつさと外しやがれ」

「はーはー…」

「」のメイド、めっちゃイライラしてやがる  
そんな眼にまつたのが氣にくわねえのか

「おらよ

「はんー」

メイドは不機嫌を隠す様子もなく去っていった

「流川ぐーん」

「おひ

「大丈夫だった?」

「平気だ、頑丈だつたつただろ」

「うふ、良かつたわ」

「の口が言つか

多少のことならいいが、今日は流石にダメージを受けすぎた  
だが、少しでも弱みを見せると、『』は罪悪感を感じちまつだらつ

これから表彰式だが、あいにく興味はない  
優勝を目の前の少女にプレゼントしたかつただけだしな

「おい、一子」

「は？ え、今なんて？」

「は？ 今なんても何も“おい、一子”としか言つてないが」

「か、一子…！？」

「ん？ 名前で呼んじやいけなかつたか」

「い、いや、そういうわけじゃないんだけど… いきなりだつたから」

「今まで機会がなかつただけで、俺の中では最初から一子だつたんだが」

「そ、そつなの…、別にいいんだけどね」

嘘だった

最初はフルネームだつたが、おそらく「イツを守ると決めたときから、自

然と一子になつていた気がする

まあ、基本俺は誰でも名前呼びだ

今まで呼ぶ相手がいなかつただけのこと

「あ、セイジやなへへ、一子」

「まひ」

「…お前は一子と呼ばれる度に、そいつ答えるのか」

「いや、なんか慣れてないだナで」

「まあこい、俺は表彰式出ないで帰るか」

「えー…なんで?」

「別に興味がないし、それに勝ったのは一子だからな。俺は最後の一戦以

外は手を出してないし、その一戦も負けてるしな」

そいつ聞いて、片手を上げて、颯爽とその場を立ち去った

…はすだつた

なんか、思い切り、上げた手を掴まれてる

「勝てたのは、悔しいけど、ほとんど流川君のおかげだわ」

「・・・・・」

「アタシはせいいせいサポートよ、最後の一戦はレベルが違つたし、負けた  
つて言つても倒したのも流川君でしょ」

なんで、いつも元気なのに、こんな時だけ悲しそうな顔をするんだ  
あの自信はないへやらだな……  
仕方ない

「海斗だ」

「え？」

「海斗でいいぞ、俺は名前の方が好きなんだ、最後の一戦は俺がい  
なくて  
も、お前がいなくても勝てなかつた、そりどう？パートナー」

「あ……」

驚いたようにこちらを見つめる顔

その表情はみるみる笑顔に変わっていく

「ナリハ、海斗」

「あ

わざわざの憂い顔はビクヘヤハ、今は満面の笑みだつた  
尻尾でも振るよつた勢いだ

一子をもじつて、ワソニ子とは言ふて妙だ  
本当に周りを安らげる奴だ  
マイナスイオンでも出でるのではないだらつか  
…いや、飼つたことないが

「よし、それじゃあな

「ちよつと待ちなさい

流れで帰らせてもらひえなかつた

こゝは俺の巧みな言い訳で切り抜けてやる

「いや、一子、俺は……」

「表彰式に出ることでしおづ、パートナー」

完全に墓穴を掘つたと悟つた瞬間だつた

Side 百代

フフフ、面白い奴だ

やり方は弟のようにズル賢いがそれでも勝利を収めてしまった

それにはメイドにやられていたときのあの体捌き  
まだまだ何か隠していそだ

本人はそれを知られたくないようだがな。  
気がないことと、何か関係があるのか？

完全に未知の強さではないか

面白い、面白いぞ、“流川海斗”

一度、死合つてみたいものだ

Side out

「では、流川・川神ペアにトロフィーの授与じや」

“じゅよじや”って、言ひにくくないか

… セツでもないか

一子がガチガチになつて、トロフィーを受け取る  
そして、トロフィーを持つて、やり場に困るやつばかりを見つめた

「ああ、やるやる」

「でも…」

「真剣でそんなの家にあつても、かわばるだけだから」

表彰式が終了する頃には口も暮れていた

絡まれる前にやつやと帰るか

そう思つて、校門に向かおうとする

「海斗——」

「あ~.

一子に声をかけられた

てつかり、お仲間のもとに戻つていったものだと思ったが

「あ、あのね、その~」

「？」

「け、携帯のアドレスとか、教えてくれたら嬉しいなー、なんて」  
めっつけや夕日に照らされた真っ赤な顔でそんなことを言った  
そのくらこ、別に構わなかつたのだが…

「悪いな」

「あ、いや…」

「あいにく携帯とか持つてねえんだ」

「えー、あ、そ、そつなんだ。それなら仕方ないわね、うん」

なんか、顔をうつむかせてしまった

「まあ、もし買つたら、そのときは必ず最初に教えてやる」

「あ…、うふ…」

「うつむかせ」と、一子は笑つた

そんなこんなで色々あったタッグマッチは幕を閉じる

やつと普通の日常が…というわけにはいかないだろう  
だが、ある意味それこそ俺が望んでいたもの

“非日常”

さて、これからは少なからず注目されるようになつた俺がどれくら  
い、手  
札を隠していくかだ

だが、今まで少しシビアすぎたか  
元々、自由に生きるのが、俺の性分だしな

これから面白くなりそうだ

## 12話 「パートナー」（後書き）

ありがとうございました  
ワン子が見事に…はい

次回からはしばらく日常ストーリーを書いてくと思います  
変わらず、ダラダラです。いやむしろ、もっとダラダラかも  
次のイベントは何にしましょうかね~

### 1-3話 「あめりか推参」（前編）

はい、今回からグダグダ口常編  
いつまで続くのでしょうか  
ゆるーりと進んでいきますので、ゆるーりとお読みになつてください  
では、どうぞ

「ふあーあ

昨日は飯食つて、よく寝たら、傷が完治してしまった  
我が体ながら、なんと遅しいことよ

エイリアンに改造とかされてないよな  
それを俺に確かめるすべはない  
結局、人間なんて自分の体でさえ、本当に自分のものか分からぬ  
もしかしたら、これは他者の体で記憶を改ざんされているのかも  
おーこわ

そんな感じで俺の頭の中には、朝からカオスが広がっていた  
うーん、今日も平和です

Side 由紀江

あわわ、どうしましょう

日直で早く来たら、前にあの流川さんがいらっしゃいます

しかも、人気者であるう流川さんが1人で登校中

これは神様が私にチャンスをくださっているのではないでしょうか

『そりだぜー、まゆつち一発アタックしつけて』

そうですね、松風

流川さんみたいな優しい人と友達になれば大きな一步です  
き、き、き、緊張しますが、めざせ友達100人

「黛由紀江、参ります」

Side out

あー、なんか昨日の熱も冷めてみると、今日学校行きたくねえな  
後悔はしないけどわ

なんで、眼鏡踏み潰したりしたかなー  
結局、新しいの買ったしさー  
うむ、あれだな。その場のノリって恐ろしい

ん！？後ろからの気配

俺は咄嗟に振り向き、襲つてくるであろう武器を止めようとした  
だが、そこには

「あわ―――っ」

倒れこんでくる少女が。

俺は状況がよく飲み込めないまま、真剣白刃どうしようとしていた手を

その少女の肩に添つような形に急遽変更した  
そして、なるべく衝撃を伝えないようにふわりと受け止める

俺は無事を確認するために腕に抱いた少女を覗き込むと、相手も状況を確認しようとしたようだ、田があつた

その刹那、ボンッと音が聞こえそうなくらい顔が赤くなつた

「ああああ、あのですね、これはあの、」、転んでしまつて、決して悪気とか、迷惑かけようとか思つていなくてですね、その」

な、なんだ、すごい早口でまくし立てられた

一応、昨日である程度、吹っ切れたとはいえ、初対面の人物には警戒をし

なくちゃいけないと考えていたのだが  
この子から滲み出る守つてあげたいオーラはなんだ

思わずペットのジロを…

だから、飼つてないつーに

「まあ、落ち着け」

ぽん、と軽く頭に手を置く

少女はそれによって、自分の存在する位置を再認識すると…

凄まじい速度で距離をとつた

あ、めぢやくぢや強いぞ、この子

「ど、どひしまじょう、松風。いきなり先輩に無礼を」

「おー、落ち着くんだ、まゆつち。」ソレでチャンスを逃したら、次はいつ来るかわからねえ」

「そ、そういうですね、ここが踏ん張り時です」

なんか馬のストラップと喋つてるぞ  
お人形さん遊びみたいなもんか？」

「その子なに？」

「え、はい、松風といいます」

「へえ、松風」

「おー、なんだか、オラの存在がナチュラルに認められてるぜ」

「あの、驚かないんですか？」

「君が松風って言つたら、そいつは松風なんだ」

「おー、「コイツすげえいい奴じゃん、オラ気に入つたぜ」

「あの、ありがとうござります」

「おひ?」

「つーか、まゆつち。オラの紹介よつ自分の紹介しなくつや」

「そ、セリフした、コホン」

咳払いをすると、いきなり怖い顔になつた  
怖いつてこつよりかは、引きつたような

「私、黛由紀江と申します。友達の多い先輩に不羨なお願いかとは  
思いま  
すが、私とお友達になつてくださいませんかー！」

「は?」

「う、すみません、ごめんなさい、やっぱつ  
「こや、わかじやなくてー！」

俺が断ると思ったのか、両手のダムが今にも決壊しそうだ  
ホントに小動物みたいだな

このトを見ると、ペジトの…  
もうええつづーの

違つ、天井やつてる場合じやねーよ

「俺、友達なんて一人もいないけど…」

「えーーてつきり、先輩は優しいから、多いものだと、すみません」

「いや、気にしてないし、全然いいんだけど」

「じゃ、じゃあ友達とかはいらなんですか」

わざわざ面識のない俺に「こんなことを言い出すなんて、この子は友達があまり出来ないので」

容姿は悪いわけじゃないし、さつき感じた強さが原因ってどこかそして、俺のことを優しくと勘違いする始末先が思いやられる子だな

今もすごい不安そうな顔で俺の答えを待つてるし

本当にどうしようか

友達つてことは深入りされることも多くなる  
それだけは、今でも越えちゃいけないラインだ

俺の過去を知られないためにも…

この子を傷つけたくない  
せめて、相手から引いてもらおう

「俺を優しいと思つてるみたいだけど、それは違うぜ」

「え？」

「それは君が俺の一つの側面をたまたまよく捉えているだけだ」

「・・・・・」

「俺はクラスの中で忌み嫌われているし、誰とも話さない人間だ。  
俺の席

は避けられて、クラスの中での位置づけは陰氣で根暗、消極てく…」

「それでも！」

いきなり大きな声で遮られる

「それでも私が見た流川さんは優しかったです！人を思いやる“礼  
”の心

流川さんのそれは嘘には見えませんでした！私は私が見た流川さん  
を信じ

ています。流川さんの自己評価がどうであれつと、周りの人人がどう  
思って

いようと、私は流川さんとお友達になりたいんです！－！」

「は……」

「あ、『いじめんなさい、私つい取り乱してしまって』

真剣で驚いてしまった

話した印象からも拳動からも強く来る子ではないと思っていた  
相手の言つことにも付和雷同する子だとも感じた  
だから、すぐに引き下がつてくれる。

でも、自己紹介のときの声量からは考えられない大声で、俺が言った全て  
を否定された、自分の信念を持つていた

駄目だ、こりゃ  
ますます傷つけたくないんだが  
これじゃ、相手に引き下がらせるのは無理か

：仕方ない

「悪いな」

「あ…、べ、別にいいんです。最初から無茶なお願ひをしているのは  
はこち  
らの方ですから、流川さんが謝ることなんて」

「そんな他人行儀な奴とは友達になれないよ、由紀江」

「え…」

だから、もう覚悟を決めた

傷つけない」と逃げる」とではない  
ばれな「よつて隠し通せばいいだけの」と。

そんくらいのリスク負い込んでやらあ  
多少のハンデがあつたほうが面白いしな  
それに…

「分かったか? 由紀江」

「まい... よりしごく願いします、 海斗さん」

わざわざのやうな顔はじくやい。

こんな笑顔を見れるなら、悪い気はしないな

1-3話 「まゆひ推参」（後編）

ありがとうございます  
今回何が一番難しかったって、松風です、松風  
もう今のうちに言っておきますが、あれ、松風いないぞとかこうい  
うに  
なつたら、それは忘れてるのではなく、書けないのです  
そして、照れつてどう書けばいいんでしょうね  
そんな感じでまゆひとお友達になりました

## 14話 「必然の変化」（前書き）

まだまだ続くよ、日常編  
ということで、あのタッグマッチから一日ですね  
どうぞです

## 14話 「必然の変化」

よし、状況を整理しようか

大体予想はしていたし、それなりに覚悟もしてきたけどよ…

「ねえ、流川君、眼鏡とつてよー」

「おい、お前川神さんに『氣』があるんじゃねーだろ? な」

「あの手錠って、どこで買ったの? ハンズ?」

「君にはMの素質がある我が殴られ部に来ないか

「てか、ホントに昨日の怪我はだいじょぶなの?」

「はーい、流川の真似しまーす、”努力し続けるのが天才なんだよ

”

「口ロッケ食べる?」

「お前、やっぱ見た田ぞおりするいよなー、あの勝ち方はねえわ」

「なんで新しい眼鏡なんて買つたりやつのー、無い方が絶対いいって

「流川つて、日本語しゃべれたんだなー」

これは流石にねえだろ？が！！

なんだ、こいつら

本当に昨日まで同じクラスに在籍していた奴らか？

だから、嫌だったんだよ、田立つのは  
途端に馴れ馴れしくしゃがる

今まで、厄介者として、邪険に扱つてきやがつたくせに

「お前ら、ううとうしいんだよ、散りやがれ。」口ロッケはもじりつ

サクサクの口ロッケをもらつて、しつしと追い払う  
うむ、話せるようになつたのもでかいな  
口撃が出来るようになった、一応収穫か

クラスメイトは“なんだよ”だの、“やっぱ変わってねえじやん”  
だの、  
果ては舌打ちまでする始末だつた

やはり、昨日の俺を見て、多少話しかけ易いと思ったが、根本での  
評価は

そう簡単には変わつていらないんだな  
結局、俺の立ち位置は無口な陰気ヤローから、話はするがとつつき  
辛い面

倒くさいヤローになつただけだ

これは助かった、俺だって誰彼構わずに仲良くなるのは御免だ

しかも、ここからは好意なんかじゃなくて、単なる好奇心で動いて  
いる

別にこいつらを最低だと責めはしない  
人間誰しもこんなもんだし、ある意味人間らしい

俺にとひちや、一子や由紀江の方がよっぽどイレギュラーだ  
あんな簡単に意志をねじ曲げられちまつんだもんな

「おはよー、海斗」

「ああ、おはよー」

噂をすれば影とは、よく言つたもので、一子が登校してきた

「あれ？ 眼鏡かけてる」

「ああ、昨日壊しちまつたから、新しく買った」

「わうなんだ…」

「ん？ どうかしたか」

「いや、ただ眼鏡かけてない方が海斗らしいなーと思つて」

「……」

なんで、こいつはホントに人の決定を曲げるのだろうか

俺は眼鏡を外して、窓の外に放り投げた  
あばよ、特価1680円の一代目

先代の後を追つてこい

「え、いいの、高かつたんじゃ…」

「いやいい、どうせ勝ち取ったものだし

「勝ち取った?」

「気に入んな

まさか、露天商と賭け勝負して、強奪したとは言つまい

Side 大和

「どう思つ?」

俺は岳人とモロに底かの希望をたくして、状況を問つてみる

「どう思つても何も完全にアレだろ

「ていうか、アレなのは、大和が一番よく分かつてゐるでしょ」

「だよなー」

最早、今となつては、他の可能性を探ることは現実逃避なのかもしない

そう、昨日の秘密基地で恐れていたことはほぼ確定事項となつた

（

「ワン子、優勝おめでとう」

「よくやつたな、ワン子」

「すじかつたよ、おめでとう」

基地には俺、岳人、モロが集まって、ワン子の祝勝会を開いている  
色々驚くことがあつたが、とりあえずはワン子を祝つてやううどい  
うこと  
になつた

何せ、これでワン子と流川のペアも解消なのだから

「みんな、ありがとう。でも、今日の勝利は私の手柄つて言つよつ、  
海斗  
の力だわ、悔しいけどね」

「ブツ」

「うわ、汚つ」

俺は飲み物こそ吐き出さなかつたが、その表情は驚きを隠せていない  
かつた  
と思う

それは素直に飲み物を吐き出すといつ形で表した岳人も、つい反射  
的にツ  
ツ ツミをしたモロにして、同じことだらつ

「ワン子、今“海斗”つて、言わなかつたか」

「言つたわよ、流川海斗だもん、おかしくないわよ」

「いや、やうじやなくてだな」

「なんで夕前で呼んでるのね」

「だつて、海斗がそう呼んでいひつて……」

二へへと表情を崩す

俺たちは顔を見合させた

「でも、そういうのって、親密な関係の間で行われるものだろ」

「親密な関係…」

言葉は尻すぼみになつて、へこやつと紅潮した顔が緩む

「おい…」

「待て岳人、何も言づな」

「完全にそうだね」

……

「それでね“男が女を守るのは当然だ”って言われてね…」

この後も延々とワン子の自慢話が続いたが、ワン子があまりにも嬉しそうに

話しているので、誰も中断できなかった

俺たちは精神的な疲労困憊の中でも同じことを考えていただろう

“真剣で恋している”と

「はあ、どうしようもないよな」

俺に続いて、二人の口からも溜息が漏れる

あいつは真っ直ぐな奴だから  
もう何を言つても無駄だろう

今だつて流川と話しているだけで、花が咲いたような笑顔を浮かべ  
ていた

Side out

「おいそろそろ、教師が来るぞ。席戻つとけ」

「分かったわ、またね」

そう言つて、一子は自分の席に戻つていく

俺の日常は間違ひなく変わった  
それが良いことか悪いこと、どちらに転がるかは分からぬ  
全ては自分しだいだ

これからは衝動のままに…

障害は呂れ演じてやる

節度は手筋、いふ

## 14話 「必然の変化」（後書き）

ありがとうございます

はい、もうなんか完全にワン子があれですね  
それを見るファミリー男性陣..

あの立場には立ちたくないです（笑  
こんな感じでまだまだダラダラいきます

## 15話 「恋と食事と友達と 前編」（前書き）

今回なんと前後編に分かれてしましました  
日常編でじうなるとは..  
なので、若干短いですが、じうぞ

## 15話 「恋と食事と友達と 前編」

朝こそ大変だつたが、今は静かなもんだ  
露骨に俺の机を迂回してくような奴は流石にいなくなつたが、基本  
は昨日  
までと何も変わっていない

休み時間には本を読んでるし、わざわざ机に寄つてきて話しかけ  
てくる  
輩もない

こんな空間もいいかもな

今まで嫌悪がこもった視線なんて、慣れていて、いちいち気にも  
留めて

いなかつたが、ないならぬで案外気持ちの良いものだ  
俺つて、意外に人間的なところがまだあるのかもな…

ははは、俺が人間的なんて悪い冗談だ

んー、本の進みも速い

印象アップ様々だな

おっと、集中してたら、もう昼か

そう思つて、再び本の続きを戻すと、そこに影が落ちた

「か～いとつ」

その正体を確かめるべく、顔を上げる

いや、そつ俺を呼ぶ奴なんて一人しかいないんだが

「なんだ、一子」

「一緒に学食いきましょ」

「あー、悪い、俺、金持つてないんだわ」

「え、じゃあお弁当なの?」

「いや」

「えー?じゃあ、お皿いり飯ビリあるの?」

「どうするも何も、食わないが」

「うう…」

俺がその皿を説明すると、一子は皿を伏せて、うなづ始めた

はあ、またたくことつぱ一人で飯を食つのが、未だに寂しいとか抜  
かしや

がるのか?そつなのか?そのへりい独り立ちするべきだら

「俺は食わないが、学食に着いて行つてやるへりいなら構わんぞ」

「え?」

「そこで読書しても、変わらないからな」

なのに、こんなことを言つてしまふ辺り、俺も大概甘いんだろう  
ホントに一喜一憂を体全体で表すから、犬みたいだ  
こんな小動物系の仕草で懇願されたら、断れる奴はそういうんだろう  
ましてや、動物好きの奴なんかには効果観面だな。ん？それって俺か  
お得なステータス持つてんなー、まったく

「ありがと、海斗」

「いいつてことよ」

「じゃ、行きましょ」

一子に後ろから押されて、食堂へ向かった

S i d e 大和

「大和おー」

「岳人、気持ちは察するが落ち着け」

そうだ、ワン子は昼飯はよく岳人と一緒にとつていた  
それが、今日になつた途端、これだ

それだけなら、まだよかつたのかもしれない  
ワン子が去り際に放つた一言が岳人の心臓に深々と突き刺さつたら  
しい

“今までありがとうね、ガクト”

硬直する岳人に俺とモロは何も声をかけることが出来なかつた  
哀愁漂うBGMが空で聞こえてきそうだ

なんか、嫁いで親元を離れていく娘つてこんな感じなのかな  
見事なハートブレイクを決めていった

恋する娘は恐ろしい

Side out

食堂というのは初めて來たが、案外綺麗なもんだ  
まあ、食事処が不衛生つてのもおかしな話か

「本当に何も食べないの？お金なら貸すわよ」

「いや、返せる保障がないからな」

「なんだつたら、別にじご馳走してあげるわよ」

「いや、いい。借りはできれば、作りたくない

「借りなんて、気にしなくていいの?」

「俺は一子とは対等でいたいんだよ

「え……あ、うん……」

「ん?」

「あ、アタシ、食券買つてくれるわ

そう言い残して、一子は逃げるように去つてこつた  
どうしたっていふんだ

Side 一子

火照る顔を抑えながら、券売機に並ぶ

さつきの海斗の言葉が頭の中で反響する  
それはどんな他の音よりも心地よかつたけど、同じくらいに恥ずか

しさで胸

が締め付けられた

海斗と一緒にいるといつもそうだわ

今日だって、お腹に誘うだけなのにすゞく勇気をふりしぼった  
ガクトを誘つときは一緒に食べたいから誘う、ただそれだけだった

海斗だつて、理由はかわらないはずなのに、ビビビビした  
苦しいんだけど、満たされた感じになる

これが何かは分からない

ううふふ、今まで知らなかつただけ

確証も根拠もそんなもの何もない

経験だつてないから、答え合わせもできない  
でも、自信をもつて断言できる、今のアタシなら  
この気持ちが“恋”つていうんだつて

アタシは真剣で海斗に恋をしているんだつて

認めてしまつと体がすつと軽くなつた気がした  
さつきはコントロールできなくて、強張つていた顔も、自然と笑顔  
になる

顔の火照りもとれると、早く海斗のところに戻りたいと思つた

これもアタシの素直な気持ち…

深く考へるとまた顔が熱くなつちゃいそつだつたから、アタシは頑  
番を待  
ちながら、何を食べるかを決めとくことにした

Side out

一子は食券を買いに行つてしまつた  
仕方ない、本でも読んでるか

「あの……」

「？」

誰かに呼ばれた気がした

そう思い、正面に視線を向ける

15話 「恋と食事と友達と 前編」（後書き）

ありがとうございました  
ワン子が自覚してしまいました、はい  
まずは一人目ですね  
今回は最後がぶつ切りとなっていますが、明日の続きから  
投稿するので、お願いします

16話 「恋と食事と友達と 後編」（前書き）

前回の続きです

というか、昨日ですね

忘れてしました方は前回の最後からどうぞ

いきなり、始まります

## 1-6話 「恋と食事と友達と 後編」

「あ、やはつ海斗さんでした」

「おー、由紀江か」

「はづ

「はづ、つて……」

「オイオイ、察してやれよー、#ゆつは友達すらいなかつたんだ  
ぜ、ま

してや、名前呼ばれる」となんて慣れてないつてこう次元じゃねえ  
よー

「でもまあ、これから嫌でも慣れなきゃな、由紀江

「ひづ、はづ」

「由紀江もひづるひづるヒーとま、学食か」

「はー、たまに#学校の「飯も食べよつと思つてまつて。 “ も” つて  
」とは

海斗さんもひづる飯ですか?」

「こーち

「え、じゃあお弁当なんですか?」

「いや、金がなくてな、皿は抜いてる」

「や、それは…あれ、では何故」「…」

「あー、それはクラスメイトの付き添いだ」

「そ、そつなんですか。あの、『一緒に締してもよいじこですか』

「ああ、いいだ」

由紀江が俺の前の席に腰を下ろす

「予も」のくらこでどひーひーひーひーの奴でもないだらつ

「海斗さん、実はな」報告があつました

「お、なんだ?」

「私、クラスの予とお友達になりました」

「へえ、やつたな

「はい、伊予ちゃんつて言つたんですけど、頑張つて話しかけてみたら、お

友達になつてもうれたんですね、これも海斗さんのおかげです

「いや、そこには俺は関係ないだろ」

「いえ、海斗さんが私とお友達になつてくれたので、勇気が出せた

んです

海斗さんが優しくしてくれたから

「由紀江がそう思ってくれるのは嬉しいけど、本当に俺なんて優しくもないぜ、数歩でも歩けば、俺より優しい人なんてすぐ見つかる」

「私の中では海斗さんが一番です」

まあ、困った

思い込みついの怖い

どつ間違つたら、俺を優しいなんて思つのだらうか

俺は…

「え？ まゆつち？」

「あ、一子さん」

どつやう一子が戻つてきたようだ  
それにしても、これは知り合いか？

「なんで、まゆつちがいるの？」

「あ、私は海斗さんに許可を頂きました…」

「“海斗さん”！？」

「ひー！」

いきなり一子が大きな声を出した  
由紀江もびっくりしちゃつてるし

でも、これは知り合いつてことで、間違になさそうだな

「2人はどういう関係なんだ？」

「あ、私は一子さんたちの風間ファミリーに入れてもうって

風間ファミリー？

え、なに、ファミリーって、マフィアかなんか  
そんな危ないところに所属してんの？  
それとも何、欽ちゃんファミリー的なところの  
フレンドリーって解釈でオーケー？

「風間さんという方がリーダーの遊びグループのやつなものです」

俺が悩みの狹間に陥っているのを、表情で読み取ってくれたのか、

由紀江

が補足説明をしてくれた

うん、ええ子や

とこりか、由紀江は友達いたんじゃねえか  
まあ、でも仲良しグループに入つていいくと、なかなか馴染めなかつ  
たり、  
するからな

一編に多く友達が出来るといえば、聞こえはいいが、実際問題、1

と親密になる難易度は普通より高いだろう

それにある性格じゃただでさえ、入つていけそうにないもんな

「ま、待つて、海斗。それは今どうでもいいわ」

いや、どうでもよくはないだろ

てか、今まで黙つてたと思つたら、いきなり何だ  
ちょっと過呼吸じやないか

「なんで、まゆつちは海斗さんだなんて、親しげに呼んでいるの」

「あー、それは今日の朝、由紀江が

「“由紀江”！？」

も「ええっつーねん

「か、一矢さん、それはですね、海斗さんが今日の朝、お友達になつてくださいまして……」

「え、友達？」

「はい、それで一緒に座るのを、お願いしたんですが、迷惑でしょうか」

「いや、そんなことはないわ、そう、友達ね。…ふう」

なんだか、よく分からぬが解決したらしき

そして、俺の席の隣に座り、食事を始めた

由紀江はそば、ワン子はおそらく定食のようなものを食べていた

「海斗さんは本当に食べないんですか」

「ああ」

「でも、お腹すくんじゃない」

「夜に四一杯食つてるから大丈夫だ」

「え、もしかして海斗さんは毎日そういうなんですか?」

「さうだが?」

「そ、そつなんですか……」

「それでもやつぱり、お皿は食べた方がいいわよ。ほり、アタシの  
おしん  
こあげるわよ」

「いや、これお前、好きだから残しどいたんだ。食えって」

「ア、アタシ、実は漬物苦手なのよね」

なら、そんなに涙目になんなつづーの  
好物を人にあげるなんて、よく分からんやつちやな  
まあ、断つても永遠と言つてしまそうだし  
ありがたくもらつか

「じゃあ、もらつわ。あー」

「えー!」

なんか顔を真つ赤にして、驚いている  
一体どうしたつて、言つんだ  
俺の後ろに面白い奴でもいんのか  
俺もかなり見たい

いい加減、口開けてんのも疲れてきたんだが

「え、海斗さん！？」

「おー、一子くれるなら、早くくれ」

「あ、わわわ、分かったわ」

しかし、一子は漬物を見たまま固まっている  
つたく、くれるって言つたしな

「もへ、もへひで」

「あ…」

一子の手から箸を頂戴して、漬物を口に放り込んだ

うん、美味い。

空腹は最高のスパイ스というが、人からもらったというのも結構な  
スパイ

スだな、とか思つたりしてみる

「むむむ…」

何をそんなに不機嫌な顔をしている

「サンキュー、ほら箸返すわ

「え、お箸……」

また、みるみる顔が赤くなつていぐ

さつきから、よく赤くなつたり、戻つたり……  
もう3分経つてしまつたのか、そりゃ光の国に帰りたくなるわ

「かかか、間接k……」

「海斗さんはお昼は食べない……」

色々騒がしかつたが、楽しい食事だった  
なんか呴いてる2人に一言」とわって、俺は食堂を後にした

・・・・・

「おい、流川海斗だな

……ほーんと、楽しい食事だったなあ

16話 「恋と食事と友達と 後編」（後書き）

ありがとうございました  
いやー、さすがの鈍感ぶり  
物もらうときに口開ける人なんているんでしょうか、いないです。  
そして、何やら不穏な空気が…

## 17話 「人間万事塞翁が馬」（前書き）

今までのなかで、一番長くなつてしましました  
いやー、きりのいいとこまで進んでいたら、大幅オーバーです  
ちなみに一行全部・・・・・みたいなのは場面転換です  
これからもちょいちょい使いつと思ひますので、よろしくお願ひします

## 17話 「人間万事塞翁が馬」

えー、この世には“塞翁が馬”という言葉がある  
馬が逃げたり、足を怪我したり、うんたらかんたらのアレだ  
良いことがあつたら、悪いことがあると

でも、そんなことないと言う人が大半だらう  
悪いことばっかだと。

それは悪いことばっか覚えてるからだ

良いことも人は勿論覚えているが、何故か悪いことの記憶の方が色  
濃いな  
んてことはよくあることで、結果、そんな風に思つてしまつのだ  
人間つていうのはつくづく不便にできている

いや、そんなことはどうでもいいんだ

俺はさつきまで、楽しい時間を過ごしていた  
久しぶりの人との食事だった

まあ、結局俺が何を言いたいかといつと…

「お前が流川海斗だな」

今、俺には不幸の順番がまわってきたらしい

・・・・・・・・・・

目の前に女が立っている

見たところ先輩だとか、それって制服かとかはどいでもいい  
こいつ、かなりデカイ氣を持つてやがる

「俺はあんたのこと、知らないんだが」

「ほう、先輩にその口の利きかたとは、それに私のことを知らない  
と」

「なんだ、自分が有名人だとでも言つつもりか」

「フフフ…」

はあ、よく分からん

何故、俺に話しかけてきたのか  
何故、俺の名前を知っていたのか  
何故、そこで不敵に笑うのか

分からないことだらけだが、それでも分かることがある  
こいつには関わらない方が吉つてことだ

俺はそのまま横を素通りする

次の瞬間、俺は思わず、頭を左にすりす

「ほひ、今のをかわすことが出来るのか

俺の頭があつた位置に拳があつた  
とこうか、とつさのことだったのべ、回避行動をとつてしまつた  
失敗したな

「弱い奴は、守りと避けが出来ないと生きていけねえんだよ」

そつ言い訳をしておく

「なら、あのメイドとの戦いで見せた微動の回避はまどう説明する

ばれてたか

いくり、小さい動きとはいへ、攻撃の威力を受け流す動作だ  
攻撃している相手に悟られないよう工夫することはできるが、流

石に寄

席全方向となると、つわものには見切られてしまうだらつ

「なんだそれ、もしそう見えたんなら、体が勝手に相手から逃げよ  
うとし

てたんだろ、何回殴られたか分かつもんじやないからな

いわゆるオート回避って奴だ  
本当にそんなの実装してたら、ヌルゲーだな

「お前、何故隠している」

「こいつ、人の話きいてんのか…

何故かだつて？そんなの決まつている  
もうあんな退屈は嫌だからだ

「本当に疑り深いな、そんなに俺が強そつに見えるか？」

「いや、見えない。というか、気も感じられないしな。だからこそ、  
その

弱いお前が、強敵を打ち破つたからこそ興味がある」

「あんな勝負は…」

「汚いと言つてしまえばそれまでだ。だが、それでもお前は勝利し  
た。そ  
れに決勝の相手は汚い手を使つたつて、勝てるかどうかの相手だつ  
た」

うむ、困った

もつ田立つことに関しては、ある程度吹っ切れたところがあったが、戦闘が

できると思われるのはなー

「まあ、勘ぐるのはいいが、ガツカリするのが田に見えてるぜ」

なので、もうこれ以上の否定はやめておいた  
適当に一言を残し、その場所から去った

今度は拳は飛んでこなかつた

代わりに後ろからは薄ら寒い笑い声が聞こえていた

・・・・・

ふふふ、この世には“塞翁が馬”という言葉がある  
立派な馬が来たり、戦争に行かなくて済んだり、うんたらかんたら  
のアレだ

悪いことがあつたら、良いことがあると。

でも、そんなことないという人が大半だらつ  
悪いことばつかだと。

それは悪いことのダメージが大きいからだ

良いことがあっても、その後の悪いことというのは結構堪える  
逆に悪いことがあったら、後に良いことがあっても、尾をひいて、  
素直に

喜べないなんてのはよくあることで、結果、そんな風に感じてしまつ  
人間つていうのはさつげー面倒なもんだ

いや、そんなことはどうでもいいんだ

俺はさつき、変な女に捕まって、問い合わせられた  
正直、色々な意味で危険だった

まあ、結局俺が何を言いたいかとこいつと…

「あいがとうございましたー、またどうぞー」

現在、俺は幸せの真っ只中らしく

「僕倖、僕倖」

見慣れない屋台があつたので、ためしに寄つてみた

クレープかなんかだらうと、結論づけていたが、嬉しい誤算だった

その屋台は珍しく、動物ビスケットなるものを売つていた  
なんか沢山の動物の形を模したビスケットが袋詰めになつてゐる  
思わず、2袋も買つてしまつた

その片方は左ポケットに突つ込み、残りの袋のリボンを解く  
そして、羊を口に放り込む

「つむ、美味しい」

動物の種類ごとに一つずつ残しておひつかなどと考ふつゝ、歩いて  
いると

前方にコンビニが見えてきた

ちゅうどい、今日の晩飯でも買つておくか  
そう思い、歩を進めると人の集団が視界に入った

はあ、またか

場所はコンビニの入り口の真正面  
集まっているのは、町の不良たち  
いわゆる、たむろしているといつやつだ

今日は機嫌が良いからな

いつも通り、相手をしてやるつ

ていうか、そんなところに立つてられると通れねえんだよ  
考えりや分かるだろうが  
いつもは空氣読んで、もうちょい隣の方に屈座つてんのによ  
なんで今日は入り口に向かつて立つてんだよ  
どうした？遅れてきた反抗期か

俺はピスケットを片手に不良の一人の肩をちょこちょことつづく

「あ？なんだ、てめえ」

「そこ」にいると、通れないんだよ。邪魔だ、どけ」

「お前、えらいテカイ態度とつてんなあ

「なんで逆に、お前らに下手にでなきやいけないんだ」

「てめえ、戦力差わかつてんのか？」

「5対1つてとこだろ」

田に見える形ではな  
そう心の中で付け足しておく

「ほう、数が数えられねえ馬鹿かと思ったが、戦力差が分かったう  
えで突

つこんでくるような大馬鹿だとは思わなかつ……

ドサッと音を立てて、不良が崩れ落ちる  
首に手刀を当てただけでこれだ  
人間つてのはこんなにも脆い

「野郎、てめえ！」

今度は俺に明確な敵意をもつて、4人が次々と飛び掛ってくる

それを俺は受け流し、確実に1人ずつ手刀を決めていく

そして、わずか数秒後…

周りには意識を刈り取られた不良が5人地面に倒れ伏していた

終わつた終わつた

いい運動になつたとコンビニに足を向けようとすると、動けなくなつた

いや、倒れている不良が足を掴んできたとか、そんな胸熱展開ではない

そこには少女がいた

ああ、だから、こいつらコンビニの入り口になんか向かってたわけだ  
視線の先にいたのはこの少女ってことか

いや、今までも絡まれてている少女や女性を助けることがなかつたわけじゃない

むしろ、そんなケースは多いくらいだ

今、話し合つべき論点はそこではない

問題なのは、少女が川神学園の制服を着ているということだ  
見たところ、一年生だろうか

やばい、口止めしないと

そう思い、声をかけようとしたら、相手が先に口を開いた

「あ…あ…あり…」

声が震えている

それもそうだろう

こんな少女が男5人に囲まれたのだと

怖くないはずがない

そんな子に俺は口止めだなんて…

自分のことしか考えてないのか

大体、そんなもの言うなというほうが怪しいだろう

俺は口止めをやめて、左ポケットに手を突っ込んだ

「ほら、これやるから、食え」

そう言い、動物ビスケットを渡す  
ちょっと相手の顔に笑みが見えた

「じゃあな」

「あ…」

そして、その場を去った  
晩飯を買ひそびれたが仕方ないだろう

野球雑誌を立ち読みしてたら、すっかり日が暮れちゃって、帰ろつと思つたら、柄の悪い人たちに囲まれた

いきなりのことで驚いて、声もあげられなかつた

そんな硬直する私を助けてくれた男の人  
一瞬の出来事だつたけど、不良を全員倒しちやつた

：確かに、名前は流川先輩  
タッグマッチで優勝したちょっとした有名人  
あのときは全然そんな素振りは見せなかつたのに、こんなに強かつたんだ

私はすぐにお礼を言おうとした

だけど、声が震えて、上手く言葉にならなかつた

そんな私を見て、動物のビスケットをくれた  
微笑んでそんな可愛らしいものを出す先輩がさつきの強い先輩と違  
いすぎ

てて、ちょっと面白かった

そしたら、くれるだけくれて、何も言わずに行つちやつた  
本当に何を考えているんだろつ

「優しいな…」

ビスケットを一口かじった  
とてもとても甘い味がした

## 17話 「人間万事塞翁が馬」（後書き）

ありがとうございます

正直、絡まれている子は誰でも良かつたんですがね  
とりあえず、武力を持っていない伊予ちゃんで

学校以外の素の海斗はこんな感じですかね

そして、田舎編はいつまで続くのか…イベントどうしよう

## 1-8話 「ヒーローの夢」（前編）

前回はある意味、新しい一面が見えたと思いますが  
今回はちょっとした変化が…

「ねえ、まゆつち」

「なんですか、伊予ちゃん」

「えりひと、昨日おな...」

「え? なに、何の話してんの?」

• • • • • • • • • • • • • • • •

はあ、遅刻した、完璧に

まあ、なんで平日の朝っぱらから迷子なんているかね  
かといって、放つておくのは無理だつた  
この年で独りなのは、不安だらう

そんなこんなで遅れてしまった  
とはいっても、さつきのチャイムからすると、一時限田がわしき終  
わった  
というところだろうか

そして、2・Fの前に行くと、何人かの生徒が入り口から中を覗き込んでいた、見たことない顔だなまあ、でも通り道にいるわけだし…

「ちょっと通してくれるか」

仕方がないので、そう断る  
すると、その子たちはこちらを振り向き、俺の顔を見るなり、びっくりし  
たような顔をして、一目散に逃げ出してしまった

「あれが、噂の流川先輩じゃない？」

「そうだよ、あのタッグマッチのときの人だもん」

「顔もかつこよくなかつた？」

離れたところで何か話しているようだが、聞こえないし興味もない  
なんか、俺をちらちら見てくるので、気にならないと言つたら、嘘  
になる

「あれ、なんで一年生がこんなところなんだ？」

そんな声が耳に入った  
なるほど、見たことないはずだ

気持ちを切り替えて、教室に入る

ん、若干クラスがざわついたのは氣のせいか?  
別にあれから好かれるような真似っこしていないが、特別嫌われる  
ような  
こともしていなかったのだが…

とこっか、視線を感じる  
誰だと思い、そちらに目を向けると、あんまりとか一子がすうじ形  
相で俺  
のことを睨んでいた  
え?俺まじで何かしたか

疑問に思いつつも自分の席につく  
そして、いつものように机に常備されている本でも取り出そうとしたとき  
違和感を感じた  
明らかに本の感触ではないソレを取り出してみた

…これは手紙?

これはあれか  
都市伝説であると思つていたが、本当にあるんだな  
不幸の手紙…

いや、そりや恨みを買つ覚えは腐るほどあるが、ここつの餌食にな  
らうと

は、思いもしなかったな

これつて、やつぱり「コピー機とか使つたらノーカンなんだろうか  
カーボン紙とかは意外にセーフだつたりすんじやねえか

いや、待て

誰が従来のタイプだと同じだと決め付けた  
もしかしたら、同じ文面ではなく、一語ずつ加えていきなさいとい  
う指令  
が付加されているかもしれない  
そしたら、後になるにつれて、労力は増えていくじゃねえか  
やられたぜ…

うむ、随分と可愛らしい不幸の手紙だ

水色の封筒にハートのシールで止めてある

外見と中身の落差を激しくすることでダメージをより確実にして  
という

魂胆か、今時は進化しているな

封筒を開ける前に机の上に落としてみる

金属的な音はせず、パサツといつ軽い音だけが聞こえた  
紛れもなく普通の紙だ

刃物の類は仕掛けられていないらしい

確認したところで開封し、手紙を読む

“流川先輩をタッグマッチのときに見て、とても惹かれました。  
守りながら戦う姿はとても素敵でした。

また先輩がイベントに出るようなことがあれば、  
絶対見に行きます。

かつこいい先輩の姿を期待しています。

また、お手紙出させてください。”

は？

あれ、これって宛て先間違えてないか  
いや、俺の名前書いてあんだけども。

これって、いわゆるファンレターっていうやつだよな

わけが分かんなくなってきた

俺なんて明らかにファンレターもうう奴じゃないだろ  
しかもいきなり…

ん？もしかして、昨日のがバレたのか

いや、だが、たとえそうとしても、俺が倒したなんてことにはな  
らないか

大方、体を張つて、守つたとか、浮かぶのはそのままジジーンだらつ  
あの子の信用性は分からんが、その話は非現実的すぎる

深く考えるのはよそつ

おー

ふと、手紙の方に手をやると、便箋に動物の猫がプリントされ  
ていた

こんなのがあんのか、いいな

猫を見て、和みつつ、自然と笑顔になつた

今日の朝、登校すると、一年生の女の子が海斗宛に手紙を持ってき  
たよつ

Side 一子

だつた

なんか、気に入らないわ

海斗は結局遅刻してきて、アタシはつい睨みつけてしまった  
そして、海斗が机の中の手紙を見つけて、読み始めた

今は手紙を眺めて、なんか笑っている

そんなに下級生からの手紙が嬉しいのかしら

なんか、海斗の笑顔を見てるのに、いらいらしてきた  
いつもは海斗が笑顔だと嬉しいはずなのに

なんで、アタシばかり振り回されるんだろう  
よし、決めた！

今日はもう相手にしてあげないことにしよう

Side out

Side 大和

「なんで、あんな奴がもてるんだ…」

ガクトの悲痛な叫びが聞こえてくる  
いくら年下には興味がないガクトでも、野郎が女の子にもてている  
のは、

どんな状況であれひとつ、気に食わないようだ

そもそも、ことの始まりは今日の朝  
いきなり見た目は可愛い一年生がやってきた  
その手には手紙を持っており、明らかに飢えた男子たちの目は光つ  
ていた

そして、1人の男が突入していったが、返された言葉は

“すみません、流川海斗先輩の席ってどこですか？”

期待していた男子が一掃された  
その1年生が頬を染めて、聞くものだから、男子たちは戦闘不能となつた  
まさに撃沈である

「あいつがなんで手紙なんてもらえるんだよ

「いや、それがまゆつちに聞いた話だとな、流川は1年生の間じや、  
結構  
人気があるらしいぞ」

「はー?」

まあ、言われてみればおかしくはない  
容姿は普通に良いし、何よりそれまでの流川を知らない1年生にと  
つては

あのタッグマッチでワン子のために戦う姿こそが第一印象なのだ  
条件は十分だらう

そして、今日の朝から一年生の間で急速に広まっている噂

“流川先輩が不良から一年の女子を救つたらしき”

それがきっかけとなつたのだろう

タッグマッチで興味を持っていた女の子たちが、教室を見に来たり、手紙を出したりといふ行動に出たわけだ

ワン子は前途多難だな…

あと、まゆつちは大丈夫なのだろうか

Side out

ふあーあ、なんか驚きもあつたが、ぼーっとしてたら、昼休みだ

一子はなんか今田は終始不機嫌だ  
今ももう教室にはいない

俺、ほんとに何かしたか？

そこへ教室のドアが開く音がした

「か、海斗さん」

そこへ立っていたのはよく知る一年生

由紀江だった

手は前に組んで…ん?  
何か包みを持っている

「わ、私、お弁当を作ってきたので一緒に食べませんか?」

「へ?」

一田はまだ長い

## 18話 「ヒーローの尊」（後書き）

ありがとうございました  
いや～、同級生にはそんなに歓迎されてませんが、  
一年生には人気と。いますよね、年下に人気の人とか  
ワン子はこんな風にすねるキャラでもないかなと思つたりしたので  
すが  
まあ、大目に見てください  
そして、次回はまゆつちー（松風はおやりくお休み）

## 19話 「暖かなひだまり」（前書き）

今日は前回の最後からも分かると思いますが  
まゆっち回です  
少し、短めですが（それはいつもですね  
どうれ

## 19話 「暖かなひだまり」

S·i·d·e 由紀江

昨日は海斗さんに餃子を食べてないということを確認しました

これはチャンスなのではないでしょうか

海斗さんにお友達として、お弁当を作つていきましょ

海斗さん…

お友達になつてくださいとお願いしたら、いきなり名前で呼ばれて、他人

行儀になるなつて、私の緊張を解いてくれました

本当に優しい…

思いやりのある人です

本当に私はお友達として、お弁当を作るのでしょうか

最近、そんな自信もなくなつてきました

海斗さんと一緒にいたいという気持ちは本当です  
でも、それは友達としてこうよりは…

学校に行くと、伊予ちゃんが私に話があるそ�です  
それは海斗さんに悪い人たちから守つてしまつたといつものでした

海斗さんは自分が優しくなこと言い張りますが、やつぱり海斗さんは誰よ

りも優しいです

偽りなんかではなく、心の奥底から滲み出る優しさ

そんな暖かいものを持っています

海斗さんは一年生の間で結構人気があります

そんな素敵な人なのですか、当然のはず…

そこに焦りを感じていた時点で私の中では答えが出でいたのかもしれません

海斗さんのために作ったお弁当を持って、教室の前に立つ

この胸の鼓動が、他の人のときのような緊張とは違うのは、自分が一番わか

つていることです

心臓が刻むリズムが心地よい

いつからなんでしょうか

もしかしたら名前を呼ばれたあの時からかもしれません

私はお友達を望んでおきながら、海斗さん元気をしてしまいました

海斗さんは迷惑をかけたくないかもしれません

ですが、この思いをそんなこと洩すことは到底できたりつてしま

せん

まずはこのお弁当を食べてほしい  
…私の初めて好きになつた人に

S i d e   o u t

俺と由紀江は屋上に来ていた  
天気は良好で絶好の弁当日和だ

教室で食うには、周りからの視線が痛すぎた  
由紀江もあわあわ言つてたしな

「しかし、どうして急に弁当なんて作ってくれたんだ?」

確かに昼は食べてないと言つたし、由紀江の優しい性格ならば、そ  
ういった

気遣いに関しては何も疑問を感じない  
だが、それでも弁当を1人分多く作るなんてな…  
朝の忙しい時間にはどう考へても手間だらう

「それは、海斗さんは私のお友だ……」

何かを言いかけたと思ったら、由紀江は唐突に口をつぐんでしまつた

しばしの沈黙のあと、

赤い顔を左右に振るとこちゅらを真っ直ぐと見て、言った

「海斗さんは私の大切な人ですから」

そんな、最初に友達になつたくらいで大げさな  
まあ、大切に思つてくれてるならいいか

「さんきゅ

「あつあつ~」

由紀江が精一杯の勇気を振り出して、変えた表現に含まれた意味は

海斗に届

ことはなかつた

・・・・・・・・

Side 一子

はあ、変な意地張つて、教室を出てきちやつたけど、気になつて戻  
つてきて  
しまつた

でも、教室の席には海斗の姿はなかつた

あれ？おかしいな

海斗は食堂とかには行かないはずだから、席で読書でもしてると思つたのに。

どこに行つちゃつたんだろう

ていうか、だめ。

今田は海斗のことは相手にしないと決めたのに…  
アタシばかりが気にしてる気がする

はあ…

こんなのアタシの方が不利に決まってるじゃない  
惚れたほうが負けって、こいつこいつことね

Side out

・・・・・・・

由紀江から渡された弁当を開ける  
中には色どり豊かなおかずが入つていた  
どうやら和食中心のようだ

ていうか、マジで美味そだ

人に作つてもらつた料理を食べるなんて、久しぶり…  
いや、初めてか…

はあ、今はそんなのどうでもいいな

せっかく自分のために作ってくれたんだし、もう少しあ  
そつ思い、箸を持とうとしたら…

「あ、あの…。」

うん、なんか凄まじい速度で箸をとられた  
ほんと、ここつ強こじと思つんだよなあ

「あのですね、海斗さん、ぐ、口を開けていただけませんか」

「ああ、別に構わないが」

そうして、俺は口を開ける

そんな俺と弁当箱の間を視線が高速で行き来する  
なんだ、視線で反復横とびでもしてるのか  
思わず、そんなツッコミが出てしまってそのままだった

「すみません、なんでもあります…」

何を泣いているんだ

よく分からぬまま、弁当を自分で食べ始める

「うん、美味しいな」

「あ、ありがと「ひ」やれこまく」

「「」の肉じゃがなんて、味がよく染みてる」

「あ、それは一回冷まして……」

由紀江が熱心に肉じゃがの説明をしてくれる

一子といい、本当に不思議だ  
なんで、俺なんかに自分から近づいてくるのだろう

自分は人とは関わらないものだと思った  
だから、距離をあけるのは当然で、嫌な奴と印象づければ、当然、

すすんで  
近づこうとする奴なんていなかつた

なのに、田の前の由紀江は本当に俺のことを友達だと考えてくれて  
いる  
俺を1人の人間として、見ててくれている

だが、それは結局一セモノ

俺の本当を知つたら、田の前の少女はどうするのだろう?  
友達ではいられないだろうな

ばれないようにするのが最善

そんなことは関わりを断つてしまえば、全てが解決する

ただ、それだけの話。

だが、俺はそんなことを容易に出来なくなっている  
このつながりを失くしたくはない  
本当に変えられているな…

俺は「ひだまり」の中にこつまでこる「」ができるのだろう

田の前の少女を見ると、笑顔で弁当の解説をしてくれている  
その姿を見て、しょうもない考えを頭の隅におしゃった

今は由紀江の美味しい弁当を食おう。  
そう思ったのだった

19話 「暖かなひだまり」（後書き）

ありがとうございました  
まゆっちが一子に続いて、落ちました  
まゆっちのタイプは優しい人じゃないかと  
勝手に思っているので、今までの総合して惚れちゃいました  
そろそろ田舎編終わるんでしょう？

前回はおやつ一回でしたが  
今回は… もう分かりますね  
どうぞ

## 20話 「ドキドキトーーク？」

時は放課後

俺は由紀江の昼飯を食べて、今日に満足して学校を出ようと思つた

だが、田の前からすゞい圧力を感じじる

いや、原因は分かつてゐる

一子が無言でこちらを向いて、立つてゐるからだ

最初はなんか用があるのだと思つて、話し出すのを待つてゐたのが、これ

がいつこいつに口を開かない

かといって、俺が帰ろうとするが、"むー"とか唸りだして、こちらを見な

がら、体をぶるぶると震わせる

一体、どうしたつていうんだ

今日は朝から機嫌がよろしくなかつたが、本当に俺が何か悪いことしたか？

「おい、一子」

しようと、一子は一瞬笑顔になつたかと思つと、すぐさま表情を戻して、俺を

すると、一子は一瞬笑顔になつたかと思つと、すぐさま表情を戻して、俺を

睨みつけてきた。本当になんなんだ…

「な、なに」

「なんか怒つてんのか?」

「別に怒つてないわ、私はいつも通りよ」

いや、そんな怒つた声で言われても…  
はあ、まつたく

「一子、一緒に来い」

「え?」

「菓子買つてやる」

原因は分からぬが、このままはよくないだろ  
うたく、一子には笑顔の方が似合つてるしな

・・・・・

「いや、本当に悪かつた」

「別にいいわよ~」

前に食つた動物ビスケットを買つてやるつと通つたのだが、流石は  
移動販売  
もつ他所に行つてやがつた

何が“菓子買つてやる”なんだか  
数秒前の調子乗つてた俺を一発なぐりたい

今この時間をゆがめて、過去に戻りたい  
でも、今より過去の俺を殴るわけだから、当然今の俺にダメージを  
与えるわ

けで…ん?逆に考えれば、今の俺を殴つても同じことか  
いや、時間軸の前に俺の頭がゆがみそつなので、これ以上考えるの  
をやめて

おへ

だが、何故か一子はそんな不甲斐ない俺に対し、怒つている風で  
はなかつ  
た。

むしろ、さつきのような刺々しさはなくなつていて、機嫌は良いによ  
うだ  
今は汗をかきつつ、困った顔で笑しながら、俺の罪を否定してくれ  
ている

やつぱり、一子はいつもながら

目的は達成できなかつたが、問題は解決したので、良じとじよつ

これからどうするかと思つて、一子の方を見ると、右ポケットから何  
かがはみ

出して いた

それは俺の興味を一気に持つて いた

「おい、一子、それ何だ？」

「え、これ？携帯電話よ」

一子はそれをポケットから取り出して、俺に見せてくれる  
うむ、実にいい

「一子、これ買ひに行くぞ」

「えー、今から？」

「俺は欲しいと決めたら、すぐ行動する」

そう宣言して、ワン子の手を引き、歩いていく  
さつきは格好つかなかつたからな、挽回だ

てきた

一子の手が妙に汗ばんでいる  
少し、強く握りすぎたか？

そう思つて、握る力を弱めると、慌てたよつたあひらから強く握つ  
て きた

何事だと思つて、振り返ると、一子は俯いていて、髪の間から見える  
耳は朱に

染まっていた

そちらを見ても、黙つたままなので、そのまま握つて進むことじた

…あ

「一子。携帯つて、どこで売つてんだ？」

最後まで格好はつかなかつた

・・・・・

「それですね、こちらは…」

「へえ

「む…」

携帯ショッフの中では何故か三つ巴が繰り広げられていた

俺が店に入ると、他の客の対応をしていた女性店員がこちらに向かってきました

こちらが聞く前にどんどん話してくる  
まあ、初心者なのでありがたいのだが、若干近い

一子は一子で、なんかまた不機嫌になってしまった

俺ひじりごりと

「お密せまほどんな携帯をお探しですか?」

「一子と同じ奴がいいな

「えー?」

「ちょっと、こっちに持つてこい

「へ、うる

さつきまでとは打って変わって、照れたような笑顔だ  
感情の起伏が激しいな

「これと同じやつを頼む

「はい、それでしたら、この6色の中から選べますが

「黒でいい

そんな色なんかはひとつでもよかつた  
俺は店員が早く持つてくるのを待つた

「うひうひになります

「ん？」

「よかつたじやない、買ったわね」

「一子のと違わないか？」

「え、そりゃ色は違うけど……」

「じゃなくて、それが付いてない」

そうして、海斗が指差したのは、一子の携帯に付いた犬のストラップだった

一子も一瞬、理解が追いつかなかつた

「え、これ？」

「それ。」

「じゃあ、アタシと同じのが欲しいっていうのも……はあ

「それが俺の携帯にはないんだが」

「これは別売りなのよ、アタシが後から買つて付けたの」

「なんだと」

「じゃあ、俺は何のために、これを買つんだ

くそ、俺もその柴犬みたいな奴、ほしいんだよ

「あの、お客様、ストラップなら購入した方に差し上げていますが」「どういつのなんだ？」

一子は“自分で買った”と言っていた  
といつことは、柴犬が出てくる可能性はないだろ？

「人気なのは、この十字架とハートになりますが、他にも3種くらい用意してあります」

いや、そんな十字架なんて、もうつてもしうがないんだよ  
俺、別に何も信仰してないし、神なんて存在はないと思つて  
占いなんて、絶対に信じないしな

勿論、運勢が良いときは別問題だ、全力で肯定してやる

もはや、何の望みも持たず、並べられたものに目を向けると、その  
内の一つ  
が目に留まつた。  
というよりか、目が合つた

「おい、これは？」

「あ、それはちょっと不人気でして、すみません…」

「俺はこれをもらひうる」

「え、海斗、それにするの？」

「ああ」

俺が選んだのはトカゲをモデルにした銀色のストラップ。  
なんだよ、良いものあるじゃねえか

・・・・・

「あつがどうぞこました」

とても満足して、店を出る  
良いくらい買えた

「海斗って、動物好きなの？」

「まあ、そなのがな、嫌いではないことは確かだ」

「ふーん」

「せんと…」

俺は一子の目の前に携帯を突き出した

「え？」

「最初に教えてやるって約束しただろ」

「あ……うん…」

一子は約束を思い出したようで、満面の笑みで頷いてくれた  
一日の締めくくりにふさわしい良い笑顔だった

・・・・・

同日、夕方  
某廃ビルにて

「じゃあ、様子見つていうこといいんだな」

時刻は一子と海斗が別れた少し後。  
一つの机を9人が囲う

「では、ここに宣言するー！」

「風間ファミリーに“流川海斗”を新メンバーとして迎えるーー！」

男の声が響いた

ありがとうございます

ワン子はなんか嫉妬キャラとして、定着しつつある気がします  
感情を素直に表しそうなので、やりやすいんですね

そして、やつと口論編が終わるかも？

感想で要望を頂いたので書かせて頂きました  
即席なので、いつものに加えて、低クオリティーになつている」とも留めませんが  
よろしければ、読んでください

時は放課後

昼休みは見つからなかつたので、海斗を待ち伏せすることにした

なんか、このまま海斗を無視しても、アタシだけが振るような  
気がする

海斗なんて、氣にもしてくれないかも…

そんなことを考えたら、行動に移すしかなかつた

だけど、その向かい合つた状態で沈黙が続く  
当然、アタシからは声をかけられるわけがない  
だから、海斗から話すのを待つしかないんだけど…

海斗はじばりくその状態が続くと、あるつことか、席を立つて、教室の外に

向かおうとしてしまつた

話すことが出来ないアタシは無言の圧力を飛ばす  
そうしたら、海斗もなんとか止まつてくれた

これは酷いんじゃない?

確かに今日は朝からアタシの海斗に対する態度が冷たかつたけど。  
けどさ、それだって全部、海斗が好きだからなのに…

「おい、一子」

大好きな人の声が自分の名前を呼ぶ

中途半端で煮え切らないアタシに海斗から声をかけてくれた

アタシはつい、笑顔で応えてしまった。そうになるけど、今までのそつ  
けない感

じを咄嗟に思い出し、表情を強張らせる

なんで素直になれないんだろう

「な、なに」

「なんか怒つてんのか？」

「別に怒つてないわ、私はいつも通りよ」

そう、海斗は何も悪くない

ただ、海斗の人の良さが人気につながつただけのこと。

そんなのは分かっている

分かつているのに、どうしても怒つたような気分になっちゃう  
いらないのに、消せないもやもや。  
でも、この怒りを海斗に向けるのは、おかしい  
消せない怒りは素直になれない自分へ。

「一子、一緒に来い」

「え？」

「菓子買つてやる」

「いや、本当に悪かつた」

「別にいいわよ~」

海斗はなんかアタシに買つてくれる予定のものが決まっていたようだっだけ

ど、あたりが外れて、それは手に入らなかつたらしい

そのことをさつきから、ずっと申し訳なさそうにしてる

だけど、アタシひとつではもうなんないとせざりでもよかつた

海斗がアタシを誘つてくれたこと。

面倒くさい態度をとつているのはいつちなのに、気にかけてくれたこと。

それが感じられただけで、アタシの気分が晴れるのには十分すぎた  
もつ、今は海斗の隣で自然に笑みがこぼれる

「おい、一子、それ何だ？」

「え、これ？携帯電話よ」

突然、海斗がアタシのポケットを指差して、言い出した

アタシはそれを取り出し、海斗に見せる

「一ノ、これ買つに行くわ」

「えー、今から?」

「俺は欲しいと決めたら、すぐ行動する

急にそんなことを言つ出して、びっくりした  
いや、そんな驚きはすぐ忘れてしまった

次の瞬間、海斗がアタシの手を握つて、歩き出した  
アタシの手を…、海斗の手が包んで…  
もはや、びっくりを通り越して、形容しがたい衝撃に襲われた

海斗が自分から、アタシの手を握つてくれてるんだ  
そう考えただけで、体全体は熱を帯び、つい引かれている手にも汗  
をかいて  
きてしまう

好きな人と触れ合つだけでアタシの体はこんなにも素直に反応して  
しまう

そんな反射のような現象は止められるはずもなく。  
それを自覚して、ちらこアタシの体は熱くなつた

突然、海斗の手が離れそつになつた

アタシの頭は恥ずかしさでいっぱいだったはずなのに、その変化に  
はいち早く

く反応して、考える間もなく、海斗の手を今度はこちから強く握

つてしま  
つた。

本当に欲望に忠実な自分の行動が恥ずかしい

だけど、海斗はそれについては何も言わずに、また手を握りなおしててくれた

アタシはそんな海斗の優しさに触れて、海斗が前を歩いているのをいいこと

に緩む頬を隠そつともしなかつた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それですね、こちらは……」

「へえ

「むう……」

携帯ショッピングに入った途端、女性店員が海斗に近づいてきた  
それだけなら、まだしも明らかに距離が近い

本当に海斗は無駄なくらい人気がある  
確かに海斗は見た目もかっこいいかもしないけど、アタシは海斗  
の内面の  
優しさだって、知ってるんだから

「お姉さまはどんな携帯をお探しですか?」

「一子と同じ奴がいいな」

「え！？」

海斗がアタシと同じのがいいって……

え、そこので、恋人同士とかにするゼのしやないの？いや、アタシは全然構わないっていうが、大歓迎なんだけど。そんなことを海斗から望んでくれたってこと？

「ちょっと、ここに持つてこい

「ル、ル、ル」

「これと同じやつを頼む」

「はい、それでしたら、この6色の中から選べますが」

「黒でいい」

「アガルになつまゆ

「ん？」

「よかつたじゃない、買ったわね」

「一升のと違わないか?」

「え、そりや色は違うけど…」

「じゃなくて、それが付いてない

そうして、海斗が指差したのは、アタシの携帯に付いた犬のストラップだった

一瞬、理解が遅れるが…

「え、これ?」

なんとか、そう聞き返す

「それ。」

返ってきたのは肯定。

要するに、海斗がいきなり携帯を欲しいなんて言つたのは、このス

トラップ

が欲しいと思つたからなんだ

結局、田淵が携帯じゃなくて、これつことは…

「じゃあ、アタシと同じのが欲しいっていつのも…はあ

「それが俺の携帯にはないんだが

「これは別売りなのよ、アタシが後から買つて付けたの」

「なんだと」

「あの、お客様、ストラップなら購入した方に差し上げていますが」

「どうこうのなんだ?..」

その後も海斗と店員が何かやり取りをしてたんだけど、正直アタシは喜びの

丘から、絶望の谷に突き落とされたようで、あまり内容が頭に入らなかつた

その落差はしつかりとショックに比例していた

結局、海斗は銀色のトカゲのストラップをもらひついにしたみたいで、早速

それを携帯につけると、その場をあとにした

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「海斗って、動物好きなの?」

「まあ、そつなのかな、嫌いではないことは確かだ」

「ふーん」

でも、なんか海斗って、優しいイメージがあるから、動物好きそつ  
好きな人の好みは覚えておきたいものだし。  
今日のことはしっかりと記憶しておこう

「 もう…」

「 え？」

海斗がいきなりアタシに向けて、携帯を突き出してきた  
最初、意味が分からなかつたんだけど。  
次の言葉で全てを理解する

「 最初に教えてやるつて約束しただろ」

「あ……うん！」

海斗は覚えてくれていた

あの日の約束を。

アタシが海斗のパートナーになれた日の約束を。

些細なことなのかもしれない

だけど、アタシはそれだけで嬉しそぎて、笑顔になってしまつ  
それがとても幸せ。

これからも好きな人の隣で笑つていいな

（後書き）

ありがとうございます

こんな感じじゃないでしょうかね

こうして見ると、もうワン子は海斗にべた惚れですね

だが、それがいい

次は20話の続きからです、よろしくお願ひします

## 21話 「風の男、動く」（前書き）

投稿おくれまして、申し訳ございません  
頭痛といつも血圧管理不足に襲われておりました

地の文は一人称、三人称を混ぜた形がこれから主になるとと思うので  
読みにくいかもしれません、慣れていただきたいです  
では、遅れましたがどうぞ

## 21話 「風の男、動く」

Side 翔一

タッグマッチの決勝戦

あいつはワン子を馬鹿にした相手に対して、声を荒げた

いつも喋らないで大人しい奴だと思っていたのに、こんなに熱い男  
だとは、

思いもよらなかつたぜ

あれ以来、ワン子とも仲がいいみたいだし、まゆっちもお友達にな  
つたと秘

密基地で嬉々として語つていた

それならば、新メンバーとしていいんじゃないだろうか  
ファミリーの2人とも仲がいいわけだ  
何より、ああいう真っ直ぐな奴は好きだぜ

だが、俺一人の意見では決められない  
俺たちは“ファミリー”だからな

（

「今日ね、海斗と携帯電話、買いに行つたの」

「ああ、また始まった」

「今日のお昼にですね、海斗さんとお弁当を食べたんです」

「へえ、 そうなのか…」

ファミリーが集まる秘密基地

そこでは大和と岳人が恋する乙女たちの犠牲になっていた

本人たちは仲間として、現状報告しているつもりなのだろうが、彼女のいな

い男たちにとっては、ただの惚氣以外の何者でもない  
そして、悪氣がない分、無視もできないということだ

2人の少女はライバルが偉大な戦果を成し遂げているのも知らずに、  
別々のところで、各自自分の嬉しさを語つていた

そんなこんなで時間が過ぎていくと、基地には続々とメンバーが集まり始める

そして、最後にキャップこと風間翔一が来た

「あー、今日は皆に話がある」

「なになに、また旅行でも行くの？」

「ハハハ、それはいいなあ」

モロと百代が反応してくるが、翔一は続ける

「実はまた新メンバーを入れたいと思つ」

「えー？」

れつをまで読書をしていて、我関せずだつた京が一番に反応する

「またか、まあいい。それで誰なんだ？」

「ああ、“流川海斗”だ」

ワン子とまゆっちの肩がビクリと震える  
京や大和からしてみれば、なんと分かりやすいといつ感じでしかない  
もはや、誰が見ても明らかにバレバレの状態だつた  
クリスなどの例外もいたが…

「流川海斗とは、あの犬と共に優勝した奴か」

「フフ、あいつか。面白いじゃないか」

「俺はあいつをファミリーに入れたい。だから、多数決をとる」

「私は反対」

京が間髪入れずに即答した

「もう新しいメンバーはいらないよ」

「今回は俺も反対だ」

大和がそう言つと、岳人とモロが続いた

「わ、私は…」

「ア、アタシは…」

ワン子とまゆっちが慌てて、自分の意見を述べようとするが、二人の答えが  
火を見るより明らかなのは言つまでもない

「で、まゆっちとワン子は仲いいから、賛成でいいよな」

恋愛感情に気づけないリーダーもいるが…

「私も賛成だな、アイツは何かと面白い臭いがする」

そつとつて、田を輝かせる百代  
それはまるで戦いに飢えた獸を彷彿させるよつた

「俺はもぢりん提案者だから賛成だ」

「てことは、今んとこきつちり4：4で分かれてるわけか」

「クリはどうなんだ」

そう、残るはクリスの意見だけだ  
すなわち、この決定がファミリーの決定となる

「自分は正直、少し前までなら迷わず反対だった。  
教室では無関心で、教師への態度も悪い。  
だが、犬と共に戦っている奴の姿からは義を感じた。  
自分はどちらが本当のあいつなのか、判断できない。  
だから…」

「どちらともいえなってことだな

「結局、決まらなかつたつてこと?」

「まあ、また入れてみて様子見つていうのが妥当だらつた

反対派の皆も仕方ないと頷く

「よし、じゃあそれで決定だー。」

（

てな感じのことが昨日あって、晴れて今日からお試し期間だ  
乐しくなりそうだぜ

Side out

「嫌だ」

男の計画は破綻した

「なんだとー！」

「いや、こきなりファミリーに入れなんて、断るに決まつてんだろ」「

「楽しそじゃん、即そくじゃん」

なんだ、こいつは駄々っ子か

なんで、登校直後にこんなこと言われてんだ、俺は

「大体、一子と由紀江がいるからって、俺が入る理由にはなんねえよ。」

あいつらとは、別にファミリーじゃなくても関われるだろ。」

「いいじゃねえか、一緒に方が楽しいって」

「こいつ、本当に人の話をいてんのか

ちょっと顔がいいからって、何でも許されると思つてるんじゃないかな  
そんのが通じるのは単純な女だけだぞ  
悪いが俺にはそんな趣味は皆無だ

「とにかく、その話は断る」

「どうしてもか？」

「ああ、そうだ。分かつたら、席に戻れ」

「よし、分かつた。なら、俺と勝負しろ」  
「嫌だ」

「即答かよー！」

いや、そんなものするわけないだろ  
目立たないよつこじよつといふ考えは一子や由紀江によつて、結構  
変えられ

てしまつたが、そんな意味のない勝負をする必要性は全くない

「勝負くらこしたつていいだろー」

「じゃあ、今日の駄飯をおいれ

「なに、やしたら…」

「俺が嬉しい」

「勝負してくれるんじゃなこのかよー」

「あ、ほんと子どもみたいでこじつやすこ  
ひがりの心がくすぐられる

「んじや、俺の指定した時間までに菓子買つてくれたら、いいぞ」

「そんなことならお安い御用だぜ」

「じや、柿ペーでこいか、タイムコマーシャル…昨日だ

「思いつきつ、過去世んじやん…」

「キャップ、もとから入る氣なんてないんだつて

あらり、遊んでたのこ、もつ終つか  
まあ、そういうことだ

頭脳担当君の言つとおり、諦めてくれや

「だから、俺に任せてくれ

「大和、なんか作戦があるのか

「ああ、あいつのことはワソ子からリサー・チ済みだ」

ほう、随分と自信があるようで  
確かに一子や由紀江とは他の奴らよりも多く接している  
だが、俺が人の前で弱みを見せるなんて有り得ない  
そんなへまは俺に限つて…

「これを勝負に勝てば、やるつていつたひづだ?  
モロにネットで置つてもらつた

そう言つて、俺の机の上に置かれたのは、あの一子の携帯に付いて  
たものと  
非常に似た柴犬のストラップだった

いや、確かに弱みではないな、これは  
といふか、物ごときで俺の揺るぎない心を動かせるとでも思ったか

「直接戦闘以外なら受けよつ

簡単に揺らいだ

「おお、大和でかした」

「いや、俺もまさか、これで成功するとは…」

「なんだ、これは。田のつくりが職人入ってんじゃねーか」

「完全に聞いてないし」

「子のとは、若干毛の色や耳の形などが違つていて、まあ、一つ言えること  
は愛嬌が半端ないといつ」とだ

色々な角度から見ていると、取り上げられた

「これは勝者への景品だ。お前の物になるのは、キャップとの勝負  
に勝つて

からだ。負けたら、当然ファミリー入りだな」

「分かつてゐつての、で、何の勝負をするんだ?」

「それは…川神戦役だ!!」

またもや、大変なことが始まりそうな予感である

## 21話 「風の男、動く」（後書き）

ありがとうございました  
前回の終わりに対するコメントがまさに皆様一致していました  
そうですよね、予想がつきますよね  
海斗がそう簡単に受け入れるわけないと、おやじくその通りです  
そして、次回からイベント開始ですかね、  
まあ日常編同様、ダラダラに変わりはないでしょう

最後に、今回自分の体調不良で迷惑をかけてしまった方がいたら、  
すみませんでした

## 22話 「前哨戦」（前書き）

書くペースがだんだん遅くなり  
書く時間も日に日に減っていく始末。  
毎日更新、いつまで続けられるんでしょうか

## 22話 「前哨戦」

### 川神戦役

それは本来、クラスでの決闘法に用いられる。  
くじ箱の中から出た様々な競技で戦い、それに応じた様々な力が問  
われるの  
である。

団体戦ではないので、自分一人の幅の広さが試される。  
そして、先に5本先取した方が勝ちという、シンプルかつ分かり易  
いルール。

要するに今で言うバラエティ番組みたいなものである！

よし、説明もバツチリ決まつた

結局、勝負はその日の放課後に行われることとなつた  
わざわざ、引き伸ばす必要性も感じなかつたし、何より早いところ、  
あのス  
トラップをゲットしたい  
トカゲの“シロガネ”に友達ができるのだ

場所はグラウンド  
多くのギャラリーが集まつていた  
これから、勝負が始まつ

まさか、ストラップで釣れるとは思いもしなかつた

ワン子が昨日、話しているのを聞いていて、  
“いや、そりゃ多少は好きなんじゃないの”と相槌を打っていたが  
勝負を受けるほど、好きだったとは。

これは覚えておいたほうが良さそうだな

そして、今まさに勝負が始まろうとしている

ギャラリーも多く、活躍するキャップ見たさに同級生の女子などが  
多く集ま  
つている

そして、他にも大量の1年生が見に来ていた

これはあれなんだろうな

流川の人気が1年生の間で凄いというのは、どうやら本当らしい  
あの噂もあつたしな…

やはり、頼れる年上というのは下級生に人気があるのか  
こいつの守つてもらえるイメージはもはや定着しているからな

そして…

まあ、まゆつちは1年生だしな、分かるよ  
何故、君もそつち側にいるんだい？ワン子よ…

大和の口からは溜息しかもれなかつた

はあ、ようにもよつてこんなイベントみたいになつてしまつとは。  
おまけに…

「えー、同会は小さい娘の味方 井上準と…」

「みんなのアイドル 川神百代だ！」

なんか司会まで付いてきやがつた

「えー、今回は放課後といづれににより、時間もないでの、3本先  
取で決着  
をつけまーす」

「大人の事情といづヤツだな」

すげえ、大がかりになつてしまつた

まあ、合計で3回勝てばいいのだ  
嫌な勝負はギブアップすればいいだろう  
格闘なんて来たら、速攻ギブアップだ

周りを見渡してみると、こちらに向かつて、大きく手を振る一子が  
見えた

その隣で由紀江も控えめに手を振っていた

俺は自然に顔が緩み、そちらに手を振り返した途端、近くにいた1年生がドッと沸いた

なんだ、どうしたってんだ

俺が手を振るのがそんなにおかしいか

「では、もうそろそろ1回戦の競技を決めてしまおう」

「じゃあ、先攻・後攻を決めてくれ」

正直、先攻・後攻なんてどうでもいいのだが、もうかるものはもうくつておく

とするか

ジャンケンなんて負ける可能性がないからな

「よーし、それじゃ順番を決めようぜ!」

「あ、俺はチョキを出すから」

「なに!?」

会場がざわめく

まあ、これで俺の負ける可能性は“限りなく0に近い”からになつた

同じだ

これは俺がクリスと勝負したときに使った手と全く同じ  
突飛な行動をとり、相手の裏をかく戦法だ

初見の相手には意表をつくし、ベースを乱す常套手段といえる  
しかし、キャップはそのときの一連のやりとりを見ていたから、こ  
の手には  
引っかかるないだろう

だが、何故だ

本来、このような作戦は相手の思考レベルをよく知っていて、こい  
つはどこ  
まで裏をかいてくるところを予測できるついで、初めて有効な手  
段といえ  
るものだ  
ましてや、あいつは俺とクリスの勝負なんて、これっぽっちも知ら  
ない

こいつはキャップとは今日話したのが初めてだし、会話の内容だつ  
て、決して  
てお互いのことを知るとか、親交を深めるものではなかった  
それどころか、こいつはキャップ以外にも全く興味を示してはいな  
かった

それなのに、この作戦を使ってくるところとは相当な自信がある  
とこう」

と。

あの短い時間でキャップのレベルを計れたのか

分からぬ。

この俺のような混乱が狙いだとしたら、それは意味がない  
キャップはここまで深く考えるような奴ではないからだ

なら、何故だ

何故、その作戦を使う、流川

気まぐれか、確信があるのか  
それは勝負の結果を見なければ、知りようがなかつた

Side out

「は、その手には乗らないぜ」

「ふーん」

(大和がやつていた作戦だ、これは。  
こいつはチョキを出すといった。

俺にグーを出させるために、だから、相手はパーを出す。  
それを読んだ俺がチョキを出すことを誘導しているのだから、  
相手はグーを出す。

なら、パーを出せば、俺の勝ちだ!)

「おつ

「いくぜー」

「「ジャンケン、ほい」」

風間翔一はパー

そして、海斗は…チヨキを出した

「ま、俺の勝ちだ。運がよかつた」

「へえ、なんでだ」

意外にこいつ、ひねった出し方してきやがった  
単純にグーでも出してくるかと思ったが、ひっかけられたことでも  
あんのか

まあ、いくら考えたところで俺には勝てない  
別に俺は思考の裏をかいたわけでも何でもないからな

ジャンケンなんて、大抵の奴は出すものなんて、決めないで、その  
場の勢い  
で出すのが普通だし、所詮“運”。  
そんなことで勝敗が左右されるわけじゃないし、気にするひとでは  
ない  
だが…

“俺は　を出す”

「んな」と言つたらいどうづ

普段、考えないのに、何を出すかを思考してしまつ  
そして、脳内討論の結果、これを出すと決定してしまつのだ

すると、どうだらう

普段は不可思議な動きを経て、形になる手が、一つの形に向けて、  
一直線の

単純な動きとなつてしまつ

そんな動きなら、何を出すかくらい、俺の目なら捉えることが可能だ  
別に不可思議な動きでも出来ないことはないが、確実に越したこと  
はない

さらには、自分が出すものを宣言しといて、勝利を収めた  
これは相手に“自分の思考を読まれているのではないか”という不  
安を植え  
つけるという便利な付加効果つきだ

まあ、相手はお気楽で、どう考へても、そんなことを気にしそうな  
奴ではな  
いので、もとから後者は期待していない

だが、予想に反して、色々考へて出す手を決めてきたようなので、  
腑に落ち  
ないモヤモヤ感くらい感じているだらう  
それだけでも、十分な収穫だ

負けたときの言い訳にでも上手く使つてくれたまえ

「まあ、先攻を奪われただけだ。勝負はこれからだぜー」

「では、流川、くじを引いてくれ

「ど、どうぞ、そこから引いてください」

「ああ、これでいい

「ありがとうございます……わやーーーーーーーー

なんかくじ箱を持ってきたと思ったたら、一旦散に離れてしまった  
そのスタッフみたいな一年生の娘がくじを開く  
なんで、スタッフいるんだよ…

勿論、一年生の有志の集まりであることは言つまでもない  
そんなことを海斗は知る由もなく、競技が伝えられる

「第一回戦は適応力対決だ」

## 22話 「前哨戦」（後書き）

ありがとうございました  
やつと川神戦役スタートです  
日常じゃないですが、変わらずダラダラなので  
そこはご了承ください（笑）  
いきなり無駄に心理戦があつたり、なかつたりですね  
次回より試合がスタートということで、お願いします

23話 「退路は断たれた 前編」（前書き）

か「じく」の言葉があるのです  
読みにくさはないつも以上かもしませんが、  
よろしくお願いします

## 23話 「退路は断たれた 前編」

うん、“適応”ね、“適応”。  
知ってるよ、うん知ってる

“その状況によくかなう」と。ふわわしこど。あてはまるいよ。

だよな、新村 出も言つてたぞ  
それに“力”がついて、“適応力”  
俺、何も間違つてないよな

その一回戦の適応力勝負が何故ゲームなんだ…

「やーて、一回戦目は」のゲームで勝負してもらひつけ

「何故、これが適応力勝負なんでしょうか」

「ああ、これはとてもマイナーなゲームでな…、そこの辺の詳しい  
説明は特  
別ゲストを呼んである」

「おお、こきなり台本にないこと…」

「モロ口とそのクラスメイトだ…」

「モモ先輩、大串スグルだつてば…さつきも言つたじゅん

「ん~、さうだっけか」

「名前も覚えられんとは、これだから三次元は……」

「まあ、といふことで2人には解説についてもひつ

「俺の出番、ただでさえ少ねえのに」

「早速、このゲームについて説明をせてもらつよ

「聞いてないしね……」

「さつや、モモ先輩が言つたとおり、これはマイナーなゲームなんだけど、マニアの間じや、とっても有名なゲームなんだ。といふのも、色々な要素、つまりはシューーティングや格闘、アクションといったもので全体が構成されていて、まさに適応力が試されるんだよ」

「ただ、このゲームの製作は素人が個人で作ったもので、そのクオリティーこそ尊敬はできるが、その変態じみた難易度、作者の偏った趣味が

ゲームの中に盛り込まれていていう点から、クソゲーとも烙印を押されている、まさしく、やつてみたくはあるが、買いたくはないゲームなのだよ

「はあ、説明されても、さっぱりわからぬえ。結局、小さい娘は出でてくるのか、どうなんだ！？」

「いや、今そんな話してなかつたよね」

「まあ、聞くより見たほうが早いだろ？、始めてくれ

俺と風間翔一が電源をつける

すると、変なムービーが流れ始めた

その奇妙なセンスはピカソを彷彿とさせた  
というか、見様見真似のゲルニカって、リアルにこんな感じじゃないだろうか

「なんかカオスなムービーが流れ出したぞ」

「ああ、人によってはあれでリタイアするそうだ。しかも、嫌がらせなのか

スキップは出来ない仕様だ」

「鬼か！？」

「さつき、スグルが変態じみた難易度なんて、言ってたけど、それはノーマルからの話で、イージーなら普通のゲームより少し難しいくらいなんだ」

「まあ、日が暮れても困るしな」

「キャップは大和とかと、よくゲームしてるけど、流川君はなんか、

やつた

ことすら無むそつだよね」

「ああ、間違いなくアイツはギャルゲーの最初の選択肢で、上の“早く起きて学校へ行く”を選ぶタイプだ。そこは間違いなく、下の“まだ眠い、一度寝でもするか”だろうが。何故、遅刻しそうな転校生と巡り合つ可能な性を考えることができないのだ、素人が！…」

「俺は何も押さずに、口リツ娘の妹が起こしこくるのを待つぜ！…そして、階段を降りていくと、“お兄ちゃん、田玉焼き失敗しちやつたの。”ごめんね”と言ひのを優しく撫でてあげるんだ」

「おい、美少女の私がここに居ていいいのか、心配になつてきたぞ」

「あ、そんな変な熱弁をしている間にムービーが終わつたみたい…つて！」

「おーっと、なんとこい」とだ一キヤップは当然のじとぐ、イメージを選択

したが、なんと流川海斗は最高難易度ハードを選択だー！」

「えーーー！ハードは本当に理不尽なほど難しいんだ」

「これは勝負する前に結果が見えたようなものだな」

いや、なんかよく分からんが、そりゃ一番難しいのを選ぶだらつ  
何故、俺が逃げなきゃならんのだ

そりやあ、確かにゲームなんて、生まれてこの方やったことはない  
しかし、ただボタンを然るべきタイミングで押せばいいだけのこと。  
何も難しいことはない……よな

（何!? あいつ、ハードでやりやがった。大和と協力して、このゲ  
ームやつ

たことがあるが、イージーで精一杯だぞ）

「さて、予想外の事態が起きたが、1ステージ目は……これは格  
闘か？」

「そり、最初は相手の体力をなくせばいい格闘ステージ

「だが、このステージには相手キャラをイケメンにして、操作キャラ  
を女性にして、ボロボロにさせるとこ、もてない男である作者のしう  
もない憎  
悪が早速こもつてこる」

「ああ、このゲームがクソゲーなのが、何となく分かつてしまつた

…  
「まあ、そういうゲームだから……って……」

「残念ながら、私もだ」

「まあ、そういうゲームだから……って……」

司会・解説の4人、いや会場全体が目を疑つた

翔一が単調な動きの相手に慣れを生かして、コンボ技を入力している  
だが、その横で海斗は敵を圧倒していた

というのも、翔一のようにコンボ技を決めているわけではない  
それ以前に、今日初めてやっている奴が知っているはずもないだろう

海斗は敵の攻撃に対し、ぴったりとタイミングを合わせて、ガードをする

“ジャストガード”という高等技術を連発していく、自身のキャラの体力は

微塵も減つていなかつた

そして、攻撃の隙を狙い、相手のゲージを削つていく

決して派手なアクションではないが、その凄さは理不尽な攻撃を繰り出す相手を完璧に捌いていた

「おい、ハードの敵は遠距離攻撃、近距離攻撃、なんでもありのチートキヤ

ラなんだぞ！倒すという目標でさえ、何人もゲームたちが挫折したとい

うのに、あの男は…無傷だと…？」

「なんか分からんが、凄いのは分かるぞ」

「なんだなんだ、あいつは天才ゲーマーだったってことが

「いや、いくら上手い人でも無傷つていつのは、ありえないよ。未  
来が見え

るとかでもないと、とても対処しきれない攻撃数だもん」

「おい、“ジャストカウンター”まで使い出したぞ…！“ジャスト  
ガード”

よりもさらによりタイミングがシビアになるところのこ

いや、専門用語は分からんが、要は相手の攻撃に合わせて、ボタン  
を押せば

いいだけのこと。

これで終了だ

俺は敵キャラを撃破した

隣もちよづき敵に勝つたところだった

「体力だって、イージーとハードじゃ段違いなのに、まさか一緒に  
終わっち  
やうなんて…」

会場は一回戦目の序盤から騒然としていた

23話 「退路は断たれた 前編」（後書き）

ありがとうございました  
変なところで切れていますが、後編に続きます  
というか、毎日更新が風前の灯火に…いえ、なんでもありません  
次回もお願いします

24話 「退路は断たれた 後編」（前書き）

中途半端に終わった前回の続きからです  
いきなり始まります

## 24話 「退路は断たれた 後編」

「なんか、よく分からんが、勝負はまだ分からない…モロ口、次のステージはなんだ?」

「あ、次のステージはいわゆるシユーティングだね」

「これは典型的な縦スクロールシユーティングだ」

「今度は変なところないだろ?」

「それが、敵キャラが全て作者の嫌いな食べ物というシユールな感じになつてて…。しかも、特に牡蠣には相当恨みがあるらしくて、他と比べて、異常に出てくる量が多いんだ」

「画面いっぱいに牡蠣が広がってるのを想像してしまつた…」

「本当にカオスだな…」

「ていうか、なんか会場が騒がしくないか?」

「僕はもう嫌な予感しかしないんだけど…」

勿論、ざわつく会場の理由など一つしかなく、モロの予想は当たっていた

海斗はその圧倒的な量の敵、というか食べ物の数々を、弾をかわしつつ、確

実に仕留めていった

この程度なら、ざわづくこともないなんて言える難しさでもないのだが、海

斗は最小限の攻撃しか撃たず、また敵を倒すことで得られるパワー

アップア

イテムを何ひとつ取る事がなかつた

「やつぱり…」

「おいおい、パワーアップアイテムを取らないっていうのも、確かにすごいが、あいつ無駄撃ちを一切やらないうぞ。長押ししてれば、連射する仕様になつているというのに」

「そもそも、初期の弾の威力なんて相当低いんだよ」

「どうか、そんなわざわざ自分に不利なプレイをするつてことは、相手を挑発でもしてんのか？」

「パフォーマンスとしては、非常に面白いがな」

そんな高評価をされていたが、当の本人は…

何だ、これは  
ちょっと多すぎないか  
とにかく、相手から出たものに当たらなければいいんだよな  
ていうか、倒しても弾が出てこないか、これ

アイテムも本気でよけていたのだった

Side 一子

海斗がいきなり、ハードを選択をしちゃったときばどひじょうかと思つだけ  
ど、なんか凄い動きでどんどんクリアしてしちゃう  
やつぱり、海斗はすごいんだなー

ていうか、夢中になつて、海斗の応援をしてたわけだけど、よく考  
えてみる  
と、キャップが勝たないと海斗がファミリーに入ってくれないんだ  
よね

でも、気づいたら海斗を応援しちゃってる自分がいる  
結果のことなんか忘れて、今日の前で勝負してる海斗に“頑張れ”  
つて、言  
いたくなっちゃう  
そう、いつの間にか、田なんて離せなくなつてる

この前、大和に“大丈夫か”とか、“重症じゃないか”とか言われ  
て、思い

きつ否定してたけど、アタシ全然だいじょぶじゃないかも  
それにしても、隣のまゆっちもずっと海斗を見てる気がする  
まあ、友達だつて言ってたし、まゆっちも賛成だったもんね  
仲良しだつたら、つい応援してしまつのも分かる気がする

だから、『の変な胸騒ぎは気のせいだよね、うん

Side out

その後も海斗はイージーとハードの差を感じさせることもなく、逆に少しひーどしてこるくらいで、次々とステージをクリアしていくた

「次が最終ステージだよ」

「もう、なんかこのゲーム見てるだけで疲れるんだが……」

「で、最後のステージはなんなんだ？」

「最後はガンアクションだよ」

「また、ろくなものじゃないんだうつな……」

「ああ、『の面は作者が極度の猫アレルギーだつたことから、猫が敵だ。しかも、最終面で作るのも疲れたのか、絵ではなく写真だ」

250

「よりによつて、ガンアクションにそれを持つてくるか

「もうソシコニも疲れたのだが、一応言つておく。何故、操作キャラが犬なんだ」

「作者が犬派らしい」

「ホント、どうでもいいな」

「まあ、すぐに決着がつくだろう

「例によつて、会場が騒がしいよ……」

「え、おい！ 大変なことになつてるぞー！」

そこには相手の攻撃をひたすら避ける海斗のキャラの姿があった  
やはり、その回避センスは見事だったのだが……

「その面は倒さないと、先に進めないと……」

そう、このステージは避けるだけでは先に進まない  
それを聞いた海斗は……

「そんなの分かつてんだよ」

くそ、そうだ。そんなことは分かつている  
だが、なんで、猫を撃たなきゃいけねえんだ  
しかも、何ゆえ写真なんか使ってんだ  
こいつらが一体何をしたっていうんだよ

「攻撃はできねえ」

そりゃ、相手の攻撃を避け続けることしか出来なかつた

「もしかして、海斗、猫だから、手を出せないんじや……」

「え、そりゃなんですか！？」

そして、硬直状態が続いたまま…

「よしークリアー！」

隣の画面に“ゲームクリアー”の文字が

「第一回戦は風間翔一の勝利！！」

同級生連中が揃つて、歓声をあげた

「まさかの大逆転、といつか最後はなんで、手を出さなかつたんだ  
?」

「謎だけど、ハンデつてことかな?」

「まあ、時間もないし、第一回戦にいくぞ」

今度は風間翔一がくじを引いた

「第一回戦は画力対決だ!」

「まあ、これはそのままで絵の対決だな。判定は美術の先生に任せ  
ている。  
そして、モデルは2人にあまり差が出ないような人といふことで、  
まゆまゆ  
に決定だ!」

「わわ、私ですか!?」

「というか、この勝負、キヤップの絵を見たことがある奴なら、も  
う勝負は  
見えているようなものなんだよな~」

「とことど？」

「キャラップの描く絵はまるで写真のようだからな

由紀江が出てきて、椅子に腰掛ける  
すると、風間翔一はすぐに描き始めた

俺も描こうか

どうせなら、正面から描いてやりたいよな  
それにちょっと緊張しちゃじゃないか

「由紀江、じつに向いてくれ

そう笑つて話しかける

「あ、はー！」

そうそう、やっぱり笑顔の方が女の子は絵になる

由紀江の無理している感じの顔もそれはそれで面白いがな

深く考へても、絵なんて習つた記憶はないので、さりげなく適当に

見たまま

筆を走らせていく

「よし、出来たと」

「俺も出来たぜ」

このときは、ファミリーの皆は誰もがキャップの勝利を確信していた  
だが…

「じゃあ、一斉にオープン!」

2人の絵が観衆の前に並べられる

それらは、両者ともハイレベルな出来だった

「なー? 流川も上手いじゃないか」

「本当にどちらも『真みたいですね…ははは』

本当にその通りでほとんど同レベルだった

違いといえば、風間の描いた物は少しひきつったような顔

海斗が描いた物は満面の笑みであった

「では、判定をしてもらおう」

「ふむ、どちらも非常に良く出来ていて、甲乙つけがたいが、この

娘はこん

なに笑顔ではない。よつて、より忠実に再現されている風間の勝ち  
とする」

おい、そんなことないだろ

由紀江は俺に向けて、こんぐらいの顔してくれたぞ  
よく見ろや、おい

勿論、そんな柔らかな表情は海斗の前でしか、見られなかつた  
自身が意識していなかつたが、その違いは顕著にあらわれていたのだ  
そんなん乙女の恋心が美術教師の判定に反映されるわけもなく…

「第一回戦も風間翔一の勝利！！」

またもや、同級生軍が声を上げる

一年生たちはジャッジにケチつけてくるようだ

おい、待て

3本先取で俺が2回負けたつてことは

「早くも風間翔一、勝利にリーチだ」

やばい

出たくない競技はギブアップとか、そんな悠長なことをやの口が言つていた

まさに後に退けないじゃねえか

じょうがねえ

くじで出た競技に全力で取り組むとするか

残された道はその進路のみ

24話 「退路は断たれた 後編」（後書き）

ありがとうございました  
いきなり後がなくなつてしましました  
ここからどうなつていくのか  
次回もよろしくお願ひします

25話 「前進あるのみ」（前編）

前回早速、ピンチに追い込まれました  
では、三回戦からです  
どうぞ

## 25話 「前進あるのみ」

くそ、まさか追い込まれるとは思つていなかつたせめて、取つて取られてのシーソーゲームを繰り広げたかつたぜ

「べじゅぢうぢ…」

「ああ」

なんで、そんなに心配した顔をしている一年生スタッフこのボロボロの状況に同情されてるのか

だとしたら、最悪だ

同情されるくらいなら、軽蔑された方が百倍ましだ

いや、言える立場じゃねえって話だよな…

「あ、じゃあこれで」

「はい……あの、頑張つてください」

“あの”の先は聞こえるか聞こえないかくらいの声だったが、どうやらあの子は純粋に応援していくれたらしい  
いやー、良い人もいたもんだ

「では、第三回戦は自立力だ」

自立力？

そんなもの、俺には溢れてるぞ  
なにせ、今までほとんど人と関わることなく、生きてきたんだからな  
負ける気がせんわ

「といつことで、料理対決だー」

は？料理

無理無理、生まれてこの方、料理なんてやつたことないわ  
負ける気がせんとか、言ったの誰だ。

おい、俺これで負けたら、本当にやばいんだが

「作る料理は自由だ、用意された食材から一品を作ってくれ」

「これはどちらが有利なんでしょうね」

「うーん、キャップは何でもそつなくこなすが、特別料理が得意と  
いうわけ  
でもないしな。かといって、流川もどいつも料理したことないっ  
て感じだ  
し、案外わからんな」

「とにかく、風間はこれでコーヒー！次で決まりてしまつのか

よし、包丁なんかは短刀と同じだと思えば良い

道具は初めて見るものもあつたが、大体使えることが分かった

だが、問題はそこではないのだ

料理をやつたことがない奴がいきなりやれと言われても、そもそも作るもの

がないのだ、そういうパートナーが。

これは出来がどういう以前の問題だ

せめて、レシピでも読みながら、する「」ことが出来れば、それなりのものを作ることが出来ると思うのだが…

何故、俺はそういう物を読んでこなかつたのだろう  
一度でも読んだことがあれば、記憶の中から引き出したのに

そり、レシピさえあれば…

「俺は本場で漁師さんに教わってきた海鮮丼を作るぜ」

：ん？

そうか！別にレシピがなくたって、作れるじゃねえか

早速、俺は調理にとりかかる

まずは材料だ、そういう材料はシンプルにだ。

にんじん、じゃがいも、玉ねぎ、肉。  
こんなものでいいだろ？

それらを適当な大きさにカットして、さっと軽く炒める

砂糖、醤油、みりんの量は正確に。

この量でOKだったはずだ

「ん、流川も何か迷いなく作っているな」

「あれは…」

そして、よく煮込む

最後に一度冷まして、また熱するのがポイントだったな  
味が染み込むんだとぞ

これで、完成だ

俺の人生、初めての料理

“肉じゃが”だ

「さて、両者完成！」

「審査員は料理部の生徒20人だ」

風間翔一の料理は既に完成していたし、さすが本職に習つただ

けのこと

はあって、要となる盛り付けはほぼ完璧だった

「見た目的には完全にキャップの方が華があるな」

「では、いただきます」

料理部が両方の料理を食べ終える

公平な判定を行うため、私語は禁止されているらしい

「美味しかった方の札をあげてくれ」

結果は…

海斗 20 VS 翔一 0

「おーっと、これは圧勝だ!! 理由を聞かせてくれ」

「はい、こちらの方の料理は確かに盛り付けも素晴らしいし、味も美味しいかつ

たです。しかし、どちらの方の肉じゃがからは、何か優しい味を感じること

が出来ました。純粋に美味しいと思いました」

「すごい高評価だ、これで勝負は2対1! まだまだ終わらない」

良かった、なんとか勝てた

まあ、これは自分の力でもなんでもないな

今回勝てたのはあいつのおかげだ

だから、俺はそちらに向かつて、笑つて、親指を突き出した

ありがとな、由紀江

Side 由紀江

海斗さんが作り始めたのは、肉じゃがでした  
しかも、その作り方は私と全く同じでした

あのとき、屋上で恥ずかしさを「まかそうとして、何を話していく  
のか分から

らなくて、ずっと言つていた肉じゃがの作り方。

無駄に細かに話してしまった調味料の分量。

海斗さんは全部、聞いてくれていました

本当に長いだけの面白くもない話。  
海斗さんは覚えてくれていました

そして、勝負に勝つた海斗さんはこちに向かつて、笑顔でグーサ  
インをし  
てくれました

それだけで嬉しくなつてしまつ

海斗さんの言葉一つ、行動一つですぐに笑みがこぼれてしまします

それは隠すことなんて、不可能で。

私は自覚してしまいます

海斗さんのことが真剣に好きなのだと…

Side out

「よーし、では四回戦の発表だ。四回戦曰は集中力!」

「えー、これは大音量の騒音の中で集中力を乱さずにつ、的の真ん中に矢を射  
てもらうという戦いです」

「勿論、先に達成したほうが勝ちだ」

ふむ、なんか今までで一番まともじゃないか

だが、弓矢は扱つたことないな

こういふのは初見でやるのは、せつこぞ  
俺には後がないつてのに…

「そんな状況で本当にできんのか?」

「ん? ジリした、流川」

「いや、ただでさえ、中央に当たるつて難しいのを、そんな状況下  
で本当に

できんのかと思つても。不可能なことを延々とやらせられたくはないんでね。

出来るつていつとの証明が欲しいんだが

「やる前から、何を言つてゐるんだ。はあ、まあいい。京、頼めるか？」

「しょーもない」

司会が誰かを呼んだかと思うと、紫髪の女が出てきた

その女は大音量の中で「」を構えた

目を閉じ、的に全神経を集中しているようだ

そして、ぶれのない動きで矢を放つた

その矢は一直線に的の中央に突き刺さった

「これでいいか、不可能じゃないってことが分かつたら」

「ああ、十分だ」

先に達成したほうが勝ちならば、先攻をとらない道理はない  
だが、どうやら、くじを選んだ相手が先攻らしい

「いぐぜー」

これで決められたら、お終いだが、そんな心配は杞憂に終わった

矢は的にすら当たらなかつた

まあ、初心者ならこれが当たり前だろ？

ともあれ、俺の番だ

俺は大音量が流れるその場に立つと、目を閉じて、頭をクリアにした  
先ほど、見たばかりの映像を脳内で再生する

そして、同じ呼吸で動作をなぞつていく  
波長を合わせて、一拳一動を流れに預ける

ヒュンという風切り音が耳に入った

目を開けると、矢はしっかりと中央をとらえていた

俺がふうと息を吐き出すと、会場がわいた

「おおっと、なんといふことだーーーーーー！」

「なんなんだ、アイツ。ゴタゴタ言つてたくせに決めやがった」

客席の一年生や有志のスタッフからは黄色い声があがつていた  
逆に翔一のファンは驚いて声も出ないという感じだった

「やつぱり、流川先輩つてスポーツも出来るんだね」

「でも、部活入っていないんでしょ、何でなんだろ？」

「ていうか、ホント、かつこいいなあ～」

相変わらず一年生には大人気であった

「海斗、すごい…」

「やはり、海斗さん、見事です」

この2人もファミリー入りのことなど忘れて、海斗に目が釘付けになつてい  
た、恐るべき恋のパワー。

そして、違う意味で声を出せない少女もいた

Side 京

今の動き、完全に私の模倣だつた…

さつきの見本の一回で盗まれたつてこと?

弓使いは田がいいなんて、思つてたけど、あいつは一体?

ていうか、私の動きを見るためにあんなことを言った…  
つまり、私はまんまと誘導されたんだ

本当に謎ばかりで実態がつかめない

そんな男にワソトとまゆりあせ恋しかつてゐるんだよね…  
しょーもない

Side out

「こやー、小やこ頃にやつてたからかな」

まあ、嘘だけだ。

流石に初心者が一発つていつのままずこからな  
切羽つまつていたとはいへ、少々やりすぎた感が否めない

だが、これで勝負は五分五分  
どうあっても、次で決着だ

25話 「前進あるのみ」（後編）

ありがとうございます  
海斗のいいところ、少しあつたんじゃないでしょうか  
なんとか、最終戦までもつれこみました  
次回、やっと決着です（たぶん）

26話 「男の意地」（前書き）

ついに川神戦役決着です  
果たして、どちらが勝つのでしょうか

## 26話 「男の意地」

「さて、こんな大接戦になるなんて、誰が予想したでしょう。一回戦を立て

続けにとられた流川海斗選手でしたが、その後の一回戦を圧倒的な結果で勝

利し、ついに勝敗は第五回戦にまでもつれこんだ——！」

「ハゲの無駄に氣合が入った実況も許さう。これは本当に面白くなつてきた  
な、フフフ」

そう、これに勝てば、最初の失敗はどうでもよくなる  
俺は最後のぐじをひいた

「では、発表する。最後の戦いは脚力対決だ——！」

え、なんだって  
ここにきて、キックの対決とかはやめてくれよ  
もうギブアップできねえんだからさ

「競技内容はこのトラックを先に5周したほうが勝ち。ただそれだけだ」

ほう、よかつた

まじで蹴りあいなんて洒落にならんからな

「これは流川は相當なばずれくじをひいたな」

「ああ、なんとなく分かります」

「キャップは本当に風のよくな男だからな」

Side 一子

とうとう最後の試合まできちゃつた

本当に海斗は意外なところで凄いときがある  
弓矢だって、長期戦になると戻ってたのに、京みたいに一発で決め  
ちゃうし。

最初はあんなに心配だったのに、もう勝つちやうかもしない  
そう思つた直後だった

第五回戦田は競走の勝負。

キャップの一番の得意分野だった

最後の最後でこれが来るなんて、本当に…

キャップは運もいいからな

流石にこれでは圧倒的にキャップが有利だ  
このままではキャップが勝つてしまう

それはアタシにとっては、海斗のファミリー入りを意味しているん

だから、

本来喜ぶべきだったのかもしれないけど。

それでも最後まで海斗を応援しちゃうのは、好きなんだからじょう

がないと

思つ

でもこの勝負ばかりは正直不安だつた  
キャップの速さはみんな認めている  
海斗はどうするんだろ？

アタシは色々考えたけど、結局これから試合を見届けることしか  
出来なか  
つた

“頑張つて、海斗”

Side out

俺たちは既にスタートラインに着いた  
あとは合図を待つだけの状況だ

しかし、さっきの会話の言つことや会場の様子から見るに、対戦相  
手は随分

と足には自信があるらしい

それがどの程度のものなのかまでは、流石に会場の様子などからは  
想像する

ことは難しいが、用心に越したことはないだろう

最初は相手と並走しながら、様子を見るというのが、最善だろう

「風間一、頑張つて」

「一周差くらい、つけちゃえー」

いや、一周差は流石につけられたくないんだが…  
まあ、慣れたもんだよな、アウェーなんて

「流川先輩、頑張つてくださいー」

「応援してまーす」

え、俺を応援してくれてる子なんて、いるのか  
しかも、むさしい男などではなく、女の子が。

そりや、若干機嫌が良くなるのは、男として仕方ないだろつ  
いやー、単純単純。

「では、位置について」

いよいよ、来るらしい

まあ、負けない程度に頑張るか

「よーい、……スタート……」

## ヒコン

いや、洒落じやなく、そんな音が俺のすぐ隣から聞こえた  
そして、風間翔一がありえないスピードで走り出しているのを認識  
した

…いや、まあいいだろ！

俺もすぐに後を追う

速いといつのは、予想していたし、警戒していたが、ここまでとは  
思ってい  
なかつた

こいつ、本当に足が速いじゃねえか。  
いや、随分と早い言つてたつづーの。

くそ、俺としたことが…！

警戒はしていたとはい、これは油断としか言ひようがない  
相手の実力を見誤っていたんだからな  
油断にはあれだけ、危機感をもつていたにも関わらず…

作戦変更だ

並走なんて悠長なことは言ひられない

俺は相手のすぐ後ろ、背中に張り付くよにして走る

「なんか、流川は変なところを走りますね、走りこへんですか  
ど」

「いや、あれはたぶん…」

スリップストリミング。

カーレースなどでは、協力して使われるような有名な作戦だ  
相手の車の後ろに付くことで、自分は空気抵抗を受けずに走ること  
ができる

それをただ単に人間同士でやっているだけだ

ていうか、本当にこいつ速いな

もう、三週もしやがった

俺は肩で息をして、加えて息を切らせて走っている

足の動かし方も不規則にする

いや、流石に疲れてないのはおかしいからね

「流川の奴は相当疲れているみたいですね。それでも、付いていつ  
てるのは  
凄いですが。」

「フフ、本当に凄いよなあ

見るからにへトへトな俺は、一定の距離を保ち、追い続ける  
今は片手でわき腹辺りを押さえて、限界つて感じだ

「流川先輩、頑張ってください」

「諦めないでー。」

「あと少しですよ、倒れないでください」

客席の一年生も心配してくれている  
どうやら、完全に俺は今にも倒れそうといつ風に映つてこむらこ  
いい感じだ

そんな状態でとうとう最終ラップに入ったたらしく  
そこで少し、前方のスピードが上がる

おいおい、勘弁してくれ

俺も距離を離されなによつたタリとその後につく

耳を澄ませてみる

前からは、スタート直後に比べて、多少乱れた息遣い。  
やはり、若干の疲労の色が見てとれる  
流石にこの距離をそのスピードで走つて、疲れないなんてのは困る  
しな

これなら、いけそうだな

「いけー、風間ー」

「いのまほ、ヒールだー！」

もう負けられないんだって

そして、本当に最後の直線に入る  
ここだな…

俺は今まで絶対に位置を守っていた背中から横に出る  
そして、不安定な姿勢はそのままに、急激にスピードをあげた  
そう、あたかも最後の力を無理矢理振り絞ったかのようだ。

実際はスリップストリーミングで温存していた体力を使っているので、別段

疲労を感じるようなことはなかった  
ま、地道な節約の勝利つてここだ  
悪いな、この勝負は俺がもらつた

そう思った直後、何かに抜かれた  
いや、何かではない

“風間翔一”

俺の競走相手しかいない

そいつは風のような速さで走っていた  
どこにそんな力を残していたんだ

最後まで楽しませてくれる奴だ

本当に面白い

こちらの予想を悉く裏切ってくれる

こんな奴が率いるファミリーか…

それで、はぢやめはぢやで騒がしこのだらう  
だが、それだけに面白そうだ  
そんな中に混ざるなら、少しさは楽しめるかもな  
入ってみてもいいんじゃないだろうか

“風間フアミニー”

…応援してくれてる子たちの前で敗北は御免だな

さう走るスピードをあげて、追い抜く

そんなことなくとも、俺は自分で楽しみを見つけていく  
ファミリーに入らなくとも、面白い奴らとは関われるしな  
それに…

残念ながら、そんなことは思わない

俺はあくまで自己中野郎だからな

団体なんかに所属して活動したら、そこを滅ぼしかねない

一子や由紀江は別として、よく思わない奴も絶対いるだろ?しな

「1着、流川海斗！よつて、川神戦役、勝者は流川海斗！！」

会場から割れんばかりの歓声が上がる

決着はついた

## 26話 「男の意地」（後書き）

ありがとうございました  
走りで勝つてしまいましたね海斗が。  
ファミリー入りはしないという方向でまあ決まつてました  
うだうだ引っ張つてきましたがね  
では、次回もお願いします

27 話 「正義の使者」（前書き）

さて、戦いも終わり、  
その後の話ですね  
では、どうぞ

## 27話 「正義の使者」

会場からの歓声はまだ鳴り止まない

「さすが、流川先輩！」

「はあ、かつ！」よすぎます～

「あんなに疲れながらも勝つちゃうなんて」

「でも、最後のほう、凄く速かったよね」

うむ、なかなか手こずってしまった

スリップストリーミング作戦をとつてなかつたら、やばかったかも  
な。なー<sup>ル</sup>  
んつって。

ていうか、不自然な動きで長距離を走ってしまったから、なんか足

が重い。

自分で作った策に溺れるとは…

まだまだ、修行が足りんな

いや、ほんとにあんな格好で一番最後のスピードを出したのは、確

実に失敗

だつたな、うん。足が訴えるもの。

だが、俺にはやらなければならぬことがある  
足が痛くとも、そんなことは気にしてられない

男には果たすべき瞬間がある。それが今だ！

・・・・・・・・・・・・・・

「おこ、ストラップよけ！」

「あ、ああ、はい」

「ひむ、よひしー」

「本当にキャップに勝つやうななんてな、しかも走りで。俺も含めて、フア

ミコーの監視信じられない光景だったと思いつか

「いや、俺、体ボロボロだし。火事場の馬鹿力つて奴よ、いや真剣で冥界見えたね、ありや」

「えー？ 海斗、だいじょぶなのー？」

「海斗さん、どうか怪我なさつてるんですかー？」

「おい、いつの間にやつてきたんだ、君たち…  
そんな大げさことらないでくれよ、なんか嫌な予感しかしないから、  
本当に」

怖いんだよ

「アタシが保健室まで連れてってあげるわ、ほら肩貸してあげる」

「私もお供します、海斗さん。肩をどうぞ」

「え、いや大丈夫。そこまでじゃないから。帰つて寝れば、俺つて大抵のこ

とは自己再生しちゃうし」

なんだ、どうした

2人とも、なんかキャラ変わってないか?  
こんなにグイグイ来る感じだつたつけか。

Side 大和

今現在、目の前で2人の恋する少女による物理的な男の取り合いが  
絶賛開催  
中である。

キヤップに勝つたこの男。

やはり、キヤップと同じように、何かしらの人を惹きつける力がある  
のかも  
しれないな

しかし、キヤップとは、全く違った性質の魅力なのだろうな  
だが、あるのは間違いない

実際に引っかかった事例が2件も目の前に並べられてるなら、もは

や否定し

ようがないだらう

それにして、今の2人の様子…

大方、キャップに勝つた流川が一年生にもうと人気が出ると思つて、危機感

でも持ち始めたつてところだらうな

あの声援や歓声の量は流石に無視できない事態だもんな

“かつこじい”なんて言われてたら、そりゃ焦るだらうな、自分たちは思つ

ていても、絶対に言えないようなことだらうからな

いや、それだけじゃないか

なんか、互いに視線を数回交わしているような気がする

これはあれか

やつと、すぐ近くに恋敵がいるつてのに、薄々気づいてきたか？

今更すぎるのが、恋は盲田つて奴なのか

まあでも、そんなに危険が散らばつていたら、そりゃこんだけ、積極的にもなるよな

なるよな

といふか、こんな空気の場所は非常に居心地が悪い

俺はあきれ半分に一人の健闘を祈りつつ、その場をあとにした

「いや、だから保健室はいって」

「まだ、少女たちとの攻防は続いていた  
どうする、元気を証明するためにタップダンスでもするか  
ステップを刻んでしまおつか

「止まれ、流川海斗！」

誰かの声が前から聞こえた

非常に真っ直ぐと通った声。

そして、呼んでいるのは俺の名前。

俺を呼ぶ奴なんて、限られている

だが、その筆頭であるお一方は俺の隣に陣取っている

といつことは、誰だ？

そして、前にはその答えがあつた

前に金髪の嬢ちゃんが立っていた

まあ、明らかにハーフだろうな、そんなオーラが出ている  
そんな子がブロンドを風になびかせ、俺の眼前で仁王立ちといつ、  
なんとも

おかしな状況に陥っている

てか、こいつクラスメイトだけ  
なんか見覚えあるんだよな…

あー思い出した

こいつ馬に乗つてた奴だ

そうだ、そうだ。

俺って、結構人の名前とか覚えられるタイプなのかもな  
こういうのって、人に好感もたれるだろ

世渡り上手つてやつか、俺そんな称号もらえちゃうか

「それで浜千鳥が何の用だ？」

「それは自分の馬の名前だーー！」

ありや、みすつたみたい。

浜千鳥が馬の名前なら、こいつの名前はなんだよ

馬の子だろ……馬子？

え、まさかの蘇我氏だつたりしちゃうわけ。  
あれ、でもあいつって男じゃなかつたっけ

「クリスティアーネ・フリードリヒだーー！一応、クラスメイトだろ  
！」

俺が思案顔で長い間沈黙していたのに、しびれを切らしたらじい  
凄まじい勢いでそんなことを言われる

しかし、言われても全くピンとこないんだが…  
うん、俺には永遠に社交的と呼ばれる日は来ないのかも知れない

「で、その蘇我スティアーネなんぢやうが、何の用だ」

「クリスティアーネだ…お前は馬鹿にしているのか」

思つてこむじどが口に出してしまった

いや、でも案外良い名前なんぢやない、蘇我スティアーネ。  
ほら、なんか和洋折衷な感じが滲み出しててさ。  
これなら、戦争とか起こらないんぢやないかな、うん

「本当にふざけた奴だ、流川海斗」

「だから、用件を言えっての。俺も暇じやねえんだ」

「お前、なぜ先程の試合で疲れている演技などした」

な！？

おいおい、なんでばれてんだ  
自分で言うのもなんだが、完成度は高かつたと思うんだが  
実際、みんな心配してくれたしな

「クリ、どうしたの急に？」

「何のことだ？」

「とほけても無駄だ。自分は父様の軍の訓練を幼い頃より、見てきた。本当

に疲れた者の動きは日に焼きついている」

おい、可憐な女の子がそんな汗臭いものを幼い頃より見てるんじゃ  
ないよ

こんなことではばれるなんて、計画破綻もいいところだ

「いや、疲れてないわけないだろ。今だって、足が悲鳴あげてんだ  
よ」

「大方、慣れない走り方をしたから、痛めたのだろう。演技だとし  
か思えん  
が、それでもあの走り方でのスピードを出せることはない、今でも信  
じられないからな

「あいつ、エスパーか  
なんで、そんなに見抜けるんだよ  
これは嘘をつけ続けても無駄なようだ

「ああ、確かに少しあおおげさになっていたところはあるかもしけな

い。だが

疲れていたのは本当だし、何より、それでお前に文句を言われる筋合いはな

い。勝負に負けて、言い訳に使つてるわけでもないしな。」

「お前は真剣に勝負しているキャップに対し、ふざけた態度で臨み、あたかも苦戦しているように演技した。これは相手への侮辱だ。自分はそれが気に入らないと言つてこらのだ!!」

「だから、俺は…」

「本氣でなど走つていない! キャップには悪いが、あれはまぐれでも何でもない。お前の走るスピードの方が遙かに速かつた。実際には接戦なんかじやなかつた。ただ、お前が手を抜いていただけだ! そんな実力を持つていながら、お前は…!」

なんか、怒りかたが尋常ではない  
手を抜いたことがそんなに気にくわないのか

「だが、それはお前の主觀的な意見でしかない。それを証明するものはないし、もう過ぎたことだ」

「ああ、やつだな。だから……」

一呼吸をつき、言い放った

「流川海斗、お前に決闘を申し込むー。」

27 話 「正義の使者」（後書き）

ありがとうございました  
やっと終わったと思ったらこうつ感じですね  
どうないことやら  
次もよろしくお願いします

28話 「義の心」（前書き）

いやー、話数を重ねる」と毎日更新の辛さが分かりました  
いつまで続くんでしょうね  
さて、海斗とクリスはどうなったのか  
どうぞ

翌日、俺はデジヤヴに陥っていた

「だから、嫌だつての」

「駄目だ、自分と決闘しろ」

昨日も全く同じことがあつたよつたな気がする

あれ？ 一日経つたよな。

今日は昨日の明日で間違いないよな  
意味が分からなくなつてきた

そうだ、結局あの後…

)

「流川海斗、お前に決闘を申し込む」

「はー? なんで、そうなる」

「自分がお前と戦えば、実力が分かるだらう。自分との戦いで、そ  
の速さを

出せば、手を抜いていたことの証明になるし、たとえ出せなかつたとしても  
キャップの仇をとれる。自分は中途半端で勝てるほど、弱くはない  
からな」

「断る」

「なにー?」

「そんなもの俺にメリットがねえじゃねえか」

「だが、そうするのが最善だわ」

「だから、それはお前にとつてだらうが!」

「むー、とにかく、自分と決闘をしろー」

「絶対に嫌だつての」

埒が明かないと思つた俺は、もう田が沈みかけ、すっかり暗くなり  
かけてき  
た校庭を足早に走り去つた  
正直、足の痛みなんて気にならなかつた

まあ、そんな一時的な逃避なんて、じつして翌日に登校してしまえ

ば、全く

意味をなさないわけだが…

そして、朝からこの昼休みまで、ずっとこんな感じが続いている

「自分と勝負するんだ」

「断るって、言つてんだろう」

「一回だけでいいか？」

なんだそりや。

悪いお薬の販売でもお前はしてんのか  
その一回で人生は駄目になるんだぞ。

そうかと思うと、突然なにかを閃いたように、ニヤニヤと俺に話しあげてき  
た。

何か、いい作戦でも浮かんだのか？

「ふ、お前は勝負から逃げるといつのだな。この自分に恐れをなし  
て、戦う

前から、敵前逃亡といつわけだ。」

「別にそれで結構だが…」

「なに！？」

本当にどんな作戦かと思えば…

確かに逃げるなんて言われ方は癪だが、ここで勝負に乗つてしまつたら、この目の前の知能指数が低そうな少女に、まんまと乗せられたということになつてしまつ。

なんか、そっちの方が不名誉じゃないか

俺の一瞬の間の脳内会議ではそういうような結論に至つた

「ちよつと、クリーなんでもまた、海斗に絡んでるのよ

そんな硬直状態にあつた俺たちの間に一子が入つてきた

「なんだ、犬。自分は決闘を申し込んでるだけだ、あのふざけた試合は犬も

見ただろう。何故、犬こそ、昨日からそちらの肩を持つ?」

「え!別に肩なんて持つてないわよ。た、ただ一生懸命走つたかもしれない

相手に少し言いすぎじゃないかしらつてだけで、別にクリと海斗が2人で話

してゐるのを邪魔しようとか、そういうんじゃなくて…」

なんか最後の方はもう「もー」と言っていたが、どうやら一子は俺の味方でいてくれるらしい。

俺なんかのために、あんなに顔を真っ赤にして、勢いよく怒つてくれるなんてな。

本当に良い奴だよなあ

「自分はこの学校のルールに則つて、決闘を申し込んでいるだけだ。どうあっても、受けでもらひ」

「でも、海斗は迷惑してるし……」

だが、相手の意志も相当固いようだ  
一子が仲介に入ってくれたまでは良かったが、またすぐに元の硬直  
状態に戻  
つてしまつた  
ふむ……どうしたもんか

永遠にこのときが続くのではないかと思つたそのとき、教室の前方  
のドアが  
ひとりでに開いた  
いや、外側から誰かが開けただけだな

「流川先輩、お弁当作ってきたので、私たちと一緒に食べててくれま  
せんか！」

そこには緊張した面持ちの少女が三人くらい居た  
どうも一年生らしいが、俺と面識はない  
そつ。知らない子なのだが…

「悪い、俺この子たちと一緒に飯食べる約束してたんだわ」

「えー!?」

「じゃ、行くか。屋上でいいよな」

「あ…。は、はい！」

「え、ちょっと海斗ー！」

「おい待て、逃げるのかー！」

使わせてもらわない手はないよな

一子には悪いと思ったが、こんな居た堪れない空氣の中こじこじのまま、  
疲れる

んだ

あとで、ビーフジャーキーでもやるから、許せ

そして、海斗が居なくなつた教室。

そこには取り残された2人がただ佇んでいた

いや、正確には…

「うへ、海斗さんにお弁当を作つてきたのに、中の険悪な様子が変わるので

待つていたら、先を越されてしましました～」

「おー、大丈夫だ、まゆっち。次があるぜ～」

廊下にももう1人いたのだった

・・・・・・・・・・・・・・

今日は色々と大変だつたな

結局、あの後はポテトサラダやら、アスパラのベーコン巻きやらを  
ご馳走に

なつて、去り際に礼を言つたら、なんか騒がれた  
いや、終始なんか変なテンションではあつたんだが。

一子にも、理由を話して、今度菓子でも買つてやると言つたら、安心したよ  
うに“なら、しちうがないから許してあげるわ”なんてことを言わ  
れた

何はともあれ火種は解決だ

「流川海斗、自分と決闘をしろ!」

いや、しつかり燃え盛つてんじゃねえか  
校門前にもう小火くらいまでいつてしまつたのではないかと思われる、ご存

知、元火種の蘇我ちゃんがいた

「お前も大概、しつこいな…」

「当然だ、たとえお前がつれない態度をとつたところで諦めることはない。

自分の意志は曲げないからな」

「はあ、随分と殊勝な心がけだな。何がお前をそいつさせる?」

「自分が信じるのは義の心だ。だから、その義は何があつても、貫き通すと決めている。お前の曲がった行為はキヤップへの侮辱であり、自分の義の道に反する。だから、決闘をすることで道を正してやるのだ。それこそが自分が信じる義であり、今の自分の動く理由だ」

まつたく…

「この学校はこんな奴等ばっかなのかよ

お節介と正義感、直情的性格にこの頑固や、全部が欠けることなく  
集まつて

こいつを構成しているらしい

あ、あと、少しアホなところもか。

### 愚直

なんか人を小馬鹿にするときなどに使われる、融通のきかないばか

正直。

だが、これはとんでもない美点じやないだらうか  
たとえ、その姿が愚かでも、真つ直ぐに。

自分が信じるもの“芯”を一本通して、ぶれることなく、前を向いて、立つ  
てやがる

### おまけにこの瞳だ

なんか、こんな真つ直ぐな瞳、つい最近も見た気がする  
そう、タッグマッチで俺を見事に変えてくれたあの瞳。  
ほんと、迷惑なもんだ

「分かった分かった」

「ふん、お前などに義の心が理解できたとは思えんがな」

「ちげえよ

「む？」

さながら、人の意志を変える魔眼つてどこか?  
えらく危険なものだな

ていうか、こいつの意志が本物なのは、今確認した  
断り続けたところで、ループするだけだろうな

ほんと、俺も変わっちゃったよな

かばんを地面に放り投げる

そして、俺はクリスに向き直る

「決闘したいんだろ? やつしてやるよ」

じゃ、お望み通り、その意志に付き合つてやりますか

ありがとうございました

文中でも言つてますが、海斗結構変わりましたね

本質的なところは最初から不動なのですが、

なんというか考え方の方向といいますか、しつかり影響されています

んじや、次回も戦闘？ですかね

## 29話 「真剣勝負」（前書き）

なんだか、小説って難しいですね  
おそらく、「回を重ねる」といふのが「貧乏が露見する」のでは  
今回、戦闘ですね  
どうぞ

## 29話 「真剣勝負」

クリスティアーネ・フリードリヒ  
ほんと、迷惑なほど真っ直ぐな奴だ  
一子といい、由紀江といい、田の前の二つといい、穢れのない奴  
が多すぎ  
るな、俺の周りは。

迷惑なんだが、願わくばここいらにまじまじのままの瞳でいてほしい  
思つていてほしい、世界は綺麗なものなのだと…

「今すぐ始めよ！」わざわざ観客の前でやる必要はない

「だが、教師の立派いのもとでなければ…」

「だとよ、学園長」

「何を言つている？」

わざわざから氣配が感じられていた  
いや、違うな。氣配はなかった  
そう、不自然なほどにその空間には自然の氣配すらなかった  
どんなに隠れるのが一流な奴でも、それは一部、つまり自分だけだ  
広い視野で全体を見渡せば、違和感がどうじても露見する

「まつまつまつまつ、ばれておったか。やる氣に満ち溢れた鬪氣を感じた

のでな。

気になつて、見にきてしまつたわい」

「確かに学園長には特権があるんだよな」

「ああ、ワシがこの勝負、責任をもつて見届けよ。決闘を許可する」

「だそつだ。武器のレプリカは持つてきたか?」

「相変わらず、生意氣な小僧じや。当然、持つてきとおる」

「自分は勿論レイピアを使わせてもらひ」

「俺は……」

俺の本来の武器は「」の拳。

だから、いつもならば、ここで何も選ぶことなく、戦闘突入なのだ

が……

それでは、あまりにも早く終わってしまう

こいつは正々堂々勝負することを望んでいる  
眩しいくらい、自分の道を貫き通しているのだ  
だから、俺はこいつに本気で応えてやると決めた  
一切、手を抜かず、遊びは無しで、正面からぶつかってやる

「俺もレイピアでいく」

「なにー?」

ならば、使ったことのない得物で。

相手の得意とするフイールドで。

存分に戦つて、勝利をもぎとつてやる「じやねえか

だつて、俺の本氣を見たいんだもんなあ。クリス。

「レイピアのレプリカは一本しかないんじゃが……」

「クリス、お前、実物持つてるだろ?」

「ああ、確かに所持しているが」

「お前はそれを使え、俺がレプリカを使う」

「な、お前自分が何を言つているのか分かつてているのか!当たり所  
によつて  
は、大怪我どころじゃないかもしないんだぞ。最悪、死に至る可  
能性もあ  
る。そんなのは危険すぎるだろ!」

「馬鹿じやねえのか、お前」

「なんだと?」

「慢心も大概にしどけよ。あとで恥をかくのはお前だぜ?」

「だから、なんだと言つてこむー。」

「はあ、いいか？お前は俺のした勝負が侮辱だと言つた。だから、俺はこの勝負、真剣でいく。手加減なんてしてやらない」

「当然だ、それで？」

「だから、お前の攻撃なんて、一撃も当たらなければ安心しきつて、言つて

んだよ、考えりや分かるだろ！」

「何を言つてこむー。漫心ばぢうらの方だ。それじゃ、お前が自分の攻撃を全て避けられる保証がどじこにあるとこつのだ。そんなものを信じて、易々と引き受けた結果、殺人者にでもなつたらどうするんだー。」

「おー、学園長。そのやり方でいいな？」

「ふむ……」

「学園長？」

「俺は本気だぜ！」

「…分かつた、その勝負を許可しよ！」

「本気ですかー？学園長」

「ま、許可も下りたんだ。せつと始めよ。それとも何が、いざ勝負が始まるとなつたら、お前が逃げ出したくなつてきたか？」

「死んでも後悔するなよ。今から上がるのはリングだ。責任は取れない」

「絶対に取ることのない責任より、負けたときの格好良い言い訳でも考えておいたうだ？」

「く…、つべづべ馬鹿にしている奴だ」

クリスと俺が数歩の間隔を空けて、対面する

クリスはレイピアを前に突き出すように構えていた

あれが、正しい構え方なのだろう

対して、俺は普通の長刀を扱うように体の横に構えた

レイピアは初めて扱うが、別段特殊というわけでもないだろう  
結局は刺突に特化した剣だというだけだ

刀剣の類には変わりないだろう

得物の間合いは把握した

剣の長さは一メートルよりも少し長い程度

現在の立ち位置から、いきなり攻撃を仕掛けるのは少し難しい

ていうか、放課後の校門前なんて目立つところだから、若干のギャラリーが

集まるのは覚悟のうえだつたんだが、人影は見当たらない  
これは学園長がなんかやつてくれたっぽいな  
ありがたいかぎりだ

「それでは、これよりクリスティアーネ・フリードリヒ対流川海斗の決闘を開始する。始めえ！！」

その合図の瞬間、クリスが物凄い勢いで間合いを詰めてきた  
それはスピードだけで相手が強いということが分かるほどだつた

そして、俺が武器の射程に入ると、連續突きを繰り出してきた  
その数もキレも、曰くろの訓練が垣間見えるような、質の高いものであつた

俺はそれを、体全体を大げさに使ってかわしていく  
ここでカウンターなどを狙うよつなことはしない  
まずは相手の力量をしつかりと見定め、その推測の強さにいくらか  
上乗せし

た力を持っているとして扱う  
慎重に辛抱強く。

臆病者だろうが、結局これが最善の策である

「かわしているだけでは、自分には勝てないぞ」

「お前にそ喋つてる余裕があるのか？一発も当たつてないぜ」

安い挑発には乗らない

そして、また避け続ける

攻撃の速さ、攻撃の間合い、次の攻撃までの間隔、攻撃の向き、相手の癖、

技の数、時折見られる例外の動き。

あらゆる事象を見極め、分析する

準備は完了した

相手の連続突きが一旦止む

相手は次の攻撃に備えて、少し後退するが…

俺はその間を一気に詰める

カウンターの素振りも一度も見せなかつた  
そんな突飛な行動には対処ができないだろう

だが、クリスはそれに動じることもなく、真っ直ぐと俺にレイピア  
を突き出

してきていた

俺はかなりの速さでクリスに向かっている

当然、そんなカウンターに急には、人間では反応出来ない

しかし、予想していれば、無理なんてことはない

用心深いとでも言おうか

クリスは攻めの最中も、欠かさず俺の手の動きに目線をやって、気  
を配り、

カウンターを警戒していた

そんな防御重視のクリスならば、この攻撃に反応するのは明らか。  
そのカウンターは予想済みだ

俺は今までのようなモーションの大きい回避ではなく、首を少しだけ傾け、

その突きを受け流した

首筋にレイピアのひんやりとした感触がある  
レイピアの側面が斬れないからこそ、出来るギリギリ。

両刃付きのレイピアもあるつていう話だから、それは流石に試合前にしつかりと確認済みだ

「なに！？」

いくら、クリスでもあの速さのカウンターを避けられるとは思わないだろう  
驚いた声をあげている

俺は相手の懷に入ったところで、レイピアの柄でクリスの得物を掴む手の甲を強打した

そして、握力が抜けたところで相手の武器に思い切り、横薙ぎの一閃を放つ

無論、それはクリスの手を離れ、遠くの地面に弾き飛ばされる

呆然とするクリスに俺は武器を振り上げ…

それを人の居ない方に放り投げた

「俺の勝ちだ」

完全な勝利のあとに言って捨て、去り立つとする

「待て、何故突きの一撃も放たない？それをしなければ、どうめとはならぬ  
いぞ」

「別に必要があれば、何でもやるが、好き好んで、女に手をあげよ  
うとは思  
わねえよ」

「それは戦士としての自分への愚弄だ。本氣で来ると言つただろう」

「お前は“本氣でぶつかつてくる奴には本氣で応える”、それをし  
なかつた

俺がお前の言ひ義に反するといつて、俺に立ち向かってきたな」

「ああ……」

「一本通つた芯のようすで、それが気持ちが良かつたから俺は勝負を  
受けた。

俺にしてみれば、無闇に人を傷つけないっていうのが、通したい筋  
なんだよ。

だから、クリスが侮辱だ、愚弄だの言つたところで、俺がそれを曲

げる」と

は絶対にありえない。それが俺にとっての“義”だからだ

「……お、お前は

目をパチパチと瞬かせて、信じられないような顔をしている  
疲れも出てきたのか、汗や顔の紅潮が凄い  
といふか、なんだか嬉しそうに見えるんだが…

「流川…海斗…」

「ま、要するに弱いものいじめはしたくなってことだ

「な、なんだと…？」

「ん？俺に完膚なきまでにやられた分際で言い返す言葉でもあんの  
か？」

「む、むむむむむーっ！腹立つー、海斗腹立つー！」

「は、悔しかつたら精進しやがれ」

嬉しそうにしてやがると、からかいたくなる  
なんかクリスはリアクションが逐一面白  
故になんかいじりたくなってしまっキャラであった

からかわれたクリスは顔を真っ赤にして、怒りを表していた

しかし、最初の刺々しさや敵対心はないようで。

言葉の端々からは幸せそうな感じが滲み出していく、ついにちらも

笑顔にな

つてしまっていた

「…勝者 流川海斗」

その言葉は決闘に対するものだったのだろうか

学園長の呴きは2人の空間を邪魔することなく、虚空に消えた

## 29話 「真剣勝負」（後書き）

ありがとうございました  
きりのいいとここまで書いてたら、結構長くなりました  
そして、クリスのフラグはどうなんでしょう  
次回こそまた日常に戻れるようなそんな気がします

### 30話 「人気と嫉妬は表裏一体」（前書き）

なんだかんだで30話です。  
結構書きましたね。

もうここまで積み重ねると、矛盾や重複が心配になります。

絶対ありますね、はい。

そんな感じですが、どうぞ

### 30話 「人気と嫉妬は表裏一体」

翔一、クリスとの連戦を終えた俺には、やつと安息が戻っていた

「海斗、今日一緒に一人でお昼食べましょ」

「ん? 一子か。別にいいが、食堂か?」

「え、えつとね、今日はなんていうか、作ってきたっていうか…」

と、それく…

「海斗、おはようー」

クリスがやつてきた

「ああ、おはよーさん」

「ちよっと、クリーなんで、クリが海斗って呼んでるのよ」

「別に犬が呼んで良くて、自分が駄目だなんて」とはないだらけ。  
なあ、そ  
うだらけ? 海斗」

「俺は全然構わないが。むしろ奴がいつ前で呼ばれるほうが俺は好きなんだ、前にも言つただろ」

「むー、確かにそうだけど……」

なんか、一子は何かに納得がいかないらしいなんだつていうんだ

### Side クリス

昨日の勝負。

海斗は宣言どおり、手を抜くようなことはせず、本来の戦い方をしてくれた  
ように感じた。

自分の攻撃をかわしつつも、余裕があるように見えた

しかし、最後の最後で自分にとどめをさされなかつた  
決闘は誇りをかけた勝負。

女、男と言う前にそれは戦士同士の戦いであり、当然自分も覚悟をしたうえ

で、戦いに臨んでいた

だが、海斗はそれは海斗自身の“義”であると。  
絶対に曲げたくない自分の確固たる信念であると言つていた  
まあ、その後に弱い者扱いをされたが…  
完璧に負けた自分としては、言い返せる立場ではなかつたのは事実だ

そして、海斗は言ってくれた  
自分の生き方が気持ち良いと。  
芯が通った生き方だと。

自分が信じる道だつた

だから、誰になんと言われようが変えるつもりはなかつたし、人の  
言うこと  
なんて氣にもとめなかつた

でも、海斗はそんな自分の生き方を認めてくれた  
人の評価なんてどうでもよかつたはずなのに、とても嬉しかつた  
それは海斗が自分よりも強い者だったからなのだろうか。  
それとも…

だが、まだまだ海斗は人をなめていて、自分の望む“義”には程遠い  
これからも、傍で道を正してやらねばな

Side out

Side 大和

「大和——つ」

「分かつたから、岳人何も言つな

「ていうか、その顔を見れば、誰でも分かりそうな気もするけど

そう、岳人はもはや涙目もいいところだった

その原因は言わずもがな、前で笑っている金髪お嬢様なんだが…

「なんで、あいつばっかり、モテやがるんだ」

「世の中なんて不条理だらけだ」

「来世に期待しようよ」

「お前らはフォローといつもの知らんのか」

まあ、岳人のダメージが大きいのも無理はない

今まででは確かに、ワン子やまゆっちやその他の一年生、モテているのは男と

して、腹が立つていただろうが、岳人にしてみれば、彼女らは恋愛対象では

なかつたのだ。

だから、まだ抑えられていた部分があつた。

しかし、クリスは違う。

同級生で外人さんで、おまけに美人ときた。

岳人も勿論、恋愛対象というか、あわよくばなんて、狙つてもいた

だろう。

だが、今のクリスの目は完全に流川しか捉えていない

昨日までは敵意しか込められていなかったのに、1日で恐ろしい変

わりょうだ

今の流川を見る田ままるで…

「はあ、なんていうかさ、大和」

「ああ、せりに基地に居づらくなつそつだな」

ワン子やまゆつちと回じ、恋する乙女のよつだつた

Side out

よく分からぬが、前の2人は何故か火花を散らし始めた

「いいわ、なら決闘よ、クリ」

「受けて立とう、犬」

「なんでもかんでも、すぐに決闘にもつてくんじゃねえ」

「で、でも…」

「ならば、また海斗が相手になるか？」

“また”？

「おい、クリス」

変なことを言う前にクリスを引き寄せる  
そして、小声で言った

「昨日の決闘のことはあまり口にするな」

「別にいいだろ?」

「わざわざお前は自分の負けを言つぶらしたいのか」

「な、なんだと…」

「いいから無闇に話すな。あれは俺とお前だけの秘密だ」

学園長も見ていたとか、そんなツッコミはスルーだ

「二人だけの秘密…」

「いいな?」

「あ、ああ、承知した」

何故か顔は赤いが、なんとか了解してくれたようだ  
これで無事争いはなくなつたわけだ

「かーいーヒー」

うん、全然なくなつてないな。  
一子はお怒りの様子だった

「なに、一人だけで楽しそうに話してゐのかしら?」

「いや、別になんでもないよな、クリス」

「・・・・・・・・」

おー、黙るなや。

完全になんかあつたと思われるだらうが。

「おー、クリス。おーー」

「・・・・・・・・」

返事がない、ただの屍のよ…じゃなくて。

駄目だ、なんか明後日の方角を見て、心うるさくあひうかのよひだ。

「秘密…」

え、なに？俺の話きこえてないの。

ちょっとお嬢さん、そのスタンス貫いちやう感じ？

「かーいとつ

いや、とかじゃないからね。

めちゃめちゃ不機嫌オーラが出てるから、なんか黒いから。

その後、一子をなだめるのに苦労したのはいつまでもない

Side 一子

アタシの初恋、その相手が海斗なのは分かりきったことだ。  
そり、恋を知ったのはついこないだの話。

それまでは恋なんて考えたこともなかった

興味がないとか、そういうのじゃなくて、本当に考える機会がなか  
つたつて

だけで、それでアタシの生活は普通に過ぎていった

でも、海斗に会つてから、守られてから、名前で呼んでくれてから、

アタ

シのことを“パートナー”って言つてくれてから。

アタシの世界はそれまでとはガラリと変わった

恋がなかつたアタシの世界は、海斗への恋する気持ちで溢れてしま  
つた

今じゅ、まぶたを閉じれば、海斗の顔が浮かんでくるし、田を開けても、海

斗の姿を探しあります

本当に今じゅアタシの一田は始まりから終わりまで、海斗で埋め尽くされて

ちゃつてる

修行のときでさえ、海斗のことを想えてこる自分がいる  
まあ、それでおひやかになるよつことはなくて、逆に海斗のこと  
を考えて  
元気をもらつてゐへりになんだけビ……

い、いや、そんなことまだつでもよべー！

恋をすると、今まで見えてなかつたことが見えてくる  
自分の行動や思考が変わつていつのは当たり前だけビ…  
そつ、周りの変化にも気づくよつになつてしまつ  
つまづ、分かつちやう

“クリスも海斗を好きになつたんだ”つて

まゆつちのとかも、そうだつた

最初は自分のことでつぱいといつぱいで周りを見る余裕なんてなかつたんだ

けど、今見れば、はつきりと断言できる

まゆつちも海斗を見る田が恋をしている田なんだ  
たぶん、アタシもおんなじ田をしてるんだろうな

そして、海斗は一年生にも人氣があつて、次はクリスだ  
なんで、アタシはこんな大変な人を好きになつちゃつたんだろう  
でも、その道からアタシは外れない、どんなに険しくても…

心から、好きだから

海斗が一筋縄でいかないのなんて、分かりきっていたことだ  
なんかクリスと一人で話していく、何かを隠してゐみたいで、つい  
つい言葉

にいろいろが表れちゃうけど。

今日のお昼で挽回してやるもんね、だから今は許してあげる。

Side out

### 30話 「人気と嫉妬は表裏一体」（後書き）

ありがとうございました  
クリスはまだはつきりとは自覚してはいないです  
というか、恋と認めてはいない？みたいな。  
自分で書いてて、わけわからんですね、どうぞスルーしてください  
(笑)  
そして、次回はまたお弁当ネタ。  
このワンパターン思考回路をどうにかしてください

### 3-1話 「愛の形」（前書き）

先に言つと恐いが、今回最後です  
また衝動で書いてたら、止まりませんでした  
では、どうぞ

### 3-1話 「愛の形」

数時間前の一子の決意。

“今日のお昼で挽回してやるもんね”

それは目の前のカオスな状況によつて、かき消されていた。

「…………」

「海斗さん、ビーフを食べてください」

「海斗、自分のいなり寿司をやろう」

そう、約束の昼休み。

屋上には何故か当初の予定より多い、少女3人と彼女たちに囲まれる男子学

生の姿があつた。

そもそも、じうなつたのも……

（

チャイムが四時限目の終わりを告げる。

「じゃ、早速こまめしょ、海斗」

「おへ、屋上でいいな

「うそ

そう、朝の約束通り、一子と海斗は一緒に食事をするのだ。  
場所にいつもあまり混んでいない屋上を選び、ござ教室を出ようと  
したことだった。

「む、どこへ行くのだ、海斗」

教室から一緒に出ようとした二人を呼び止めたのはクリスだった。

「屋上で飯食べてくれる

「なら、自分も行こう

「なー? 駄目よ、クリ。今日は海斗と……ふたりで」

「なあ、海斗はいいだろ?」

「まあ、何人で食つたって、味は変わらんしな

「よし、ならば決定だ。早速、行こう

「ちよ、ちよっとー

若干一名、納得していない者がいるのだが、海斗がそれに気づくはずもなく、三人が教室の外へ向かおうとする。

そして、ドアを開けると…

「あ、海斗さん」

「おひ、由紀江か」

「あの、海斗さん、今日もお弁当作ってきたので、一緒に…」

「えー…まゆつちまで」

「今日は一升とクリスモ一緒だが、いいか?」

「あ…、はい」

「じゃあ、屋上に行くぞ」

(

そして、現在の状況が出来上がっているわけである

「海斗、どうだ、いなり寿司は。美味しいか?」

「ああ、普通に美味しいが」

「それなら良かつた」

「海斗さん、今田は魚の煮付けを作つてきました」

(うわ、まゆつかのお弁当レベル高し)

「うむ、由紀江は料理上手いな」

「あ、あつがヒヒヒヒヒヒ」

(やつぱつ、味も美味しいんだ…)

「一升は何も食べないのか?」

「えー?あ、アタシは……今田は食欲ないから……」

「ん? そつなのか。眞面目でも悪いのか」

「いや、朝(はん)一杯、食べちゃつただけだから。本當に心配せいらぬじわ」

「なり、いいけど」

(まゆつかのお弁当に勝てるわけないよ…)

一子が持ってきたお弁当は昼休みが終わるまで、出されることはなかつた。

そのことは一子しか知らない。

昼休み前の決意は空しく、一子の初めての頑張りは伝わることがなかつた。

そのことも一子しか知らない。

( なに、やつてんだり…アタシ )

涙すら流せなかつた。

「まつり」

Side  
—  
子

田が覚める。

どうやら、四時間田の授業中に寝てしまつたっぽい。

今日、いつもより早く起きたからかな？

それにしても…

本当にひどい悪夢だつたわ。

なんか、妙にリアルだつたし…

海斗の鈍感さから言えば、正直ありえないと想う。

ていうか、アタシ持つて来ちゃつて、誘つたけど、海斗にお弁当渡せるのかな？

そりや、早起きして、なんとかちゃんとした物になつたはずだけど…まあ、そのおかげで、今寝ちゃつて、あんな悪夢を見たんだけどね。

いや、でも今の夢のおかげでいい危機感を持てた。

もし、どんなことが起こつても、絶対に海斗にお弁当を食べてもらおう。

たとえ、海斗の口に合わないかもしけなくとも、誰かのものに呑みているか

もしかなくとも、このお弁当はアタシが海斗のことだけを考えて作つたもの。

初めての好きな人に受け取つてほしい。

詰め込んだ思い、伝えたいから。

かといつて、出来れば邪魔はされたくない。

アタシだって、その……海斗を好きなわけだし。

一人つきりでご飯とか、食べたら嬉しいなんて思うわけで。

## キーンゴーんカーンゴーん

四時限目終了のチャイムが鳴る。

アタシは目的のために、すぐに海斗のもとへ行く。

「海斗、屋上にこきましょ」

「お、一子、早いな。んじゃ、行くか」

よし、成功！

やれば出来るじゃない、アタシ。

これも事前に知らせてくれた夢のおかげかも。

「海斗さん」

「海斗」

…全然、成功じゃないじゃない。  
教室を出た途端、まゆつちとクリスに声を掛けられた。

待って、こんなにベタなことって、あるものなの?  
これが大和が言つてた、“まさゆめ”とかいうやつか  
でも、絶対海斗にお弁当は食べてもらつんだから。  
そんなどこまで、夢の通りにするわけにはいかないわ。

「お皿一緒にどうですか？」

「自分と食べに行こ」

「悪いな、今日はあんま食欲ねえんだ」

「えー？」

驚いて、声をあげてしまったのはアタシだった。

「そうですか、分かりました…」

「なら、仕方ないな」

そう言って、クリスとまゆっちが去っていく。  
これは予想外のラッキー

…じゃなくて…

え？どうして…? となの?

「え、海斗、食欲ないの? 大丈夫?」

「は？なに、言つてんだ。普通にあるで」

「だつて今…」

「今日は“一人”で食いたいんじゃなかつたのか？」

「あ… // /

こんなのは反則だ、ずるこずるこずるー。  
ただでさえ、嬉しい言葉なのに。  
夢があんなだつただけに、不意打つけことじだ。  
顔だつて、真っ赤だと思つ。

「じゃ、今度こそ行くか」

「う、うん」

そして、アタシたちは“一人”で屋上に向かつた。

Side out

俺たちは屋上にあがつてきた。

「で、俺は何も持つてきていなんだが。」

「あ、アタシがお弁当作つてきたから。」

「あ、そうか。サンキュー」

なんか、俺の周りは弁当作つてくれる子が多いな。  
皆、優しいねえ。

「う、うん。じゃあ、これ……」

そんな卒業証書じゃないんだから、両手でかしげまつて渡さなくて  
も。

俺は一子から、弁当を受け取る。

「開けていいんだよな」

「は、はい！」

おかしな一子を放つておき、弁当を開ける。

何故、敬語？

中には色とりどり沢山のおかずが入っていた。  
ミートボールに動物の串が一個一個刺さっていたり、ナポリタンが  
小さい入  
れ物に小分けにされてたり、人参がハート型に切つてあつたりと。  
この前の由紀江の弁当は、料理が出来る奴の弁当つて感じだったが。

一子の弁当は、なんか全体的に可愛い感じで溢れている。

しかも、なかなかに美味そうだ。

俺が食べようと、ミートボールに手を伸ばすと…

その前に他の手が伸びてきた。

何かと思って、そちらを見るとい一子が「いらっしゃー」とミートボールを差し出してきていた。

手震えてるし、顔が明らかに真っ赤なんだが、大丈夫なのか。

「ほ、ほら、海斗！ 口開けて、あーん」

「あ、ああ…」

“あーん”つて…

恥ずかしいんだつたら、無理してやるなよ。  
つたく、よく分からん奴だな。

「あー」

「は、はい」

大人しく従つて、口を開けると中にミートボールが入ってきた。

「ど、どひかなかな？」

「つむ、美味しいぞ」

「ん、そう。なら良かつた」

そう言つて、満面の笑みを見せる一子。  
その可愛らしき笑顔を見て、一子つてもてるんだろつた、とか思  
つてみた  
りする。

性格もよくて、誰にでも分け隔てなく接するもんな。  
そんな一子になれる奴は幸せだろうが、大変そうだな。  
ていうか、弁当なんてもらつてる俺もあぶねえんじやねえのか？

「海斗、もつと食べない？」

「あ、ああ。もうひつか」

「わかった、……ふふつ」

まあ、何故かこんな上機嫌だから、いいんだけどな。  
ただ、冷静にこの食べさせられる状況を考えると…  
なーんか調子狂うんだよなあ  
うーむ…よし

なんか、アタシ、夢の反動ですごい大胆なことしちゃった。  
自分から、海斗に…海斗に…、あ、“あーん”とか、しちゃつたり！  
もひ自分がどうにかなっちゃうそつ。

海斗も美味しいって言つてくれたし。  
頑張つて、研究したかいがあつたわ。

もつと、この幸せの時間を味わつていてたい。  
そう思つて、また海斗に食べてもらおうとする…

「一千、お前も食え。ほれ、口開けろ」

「へ？」

目の前の状況が飲み込めない

目の前に差し出されるミートボール。

うん、これはアタシが今朝、作ったものだ。間違いない  
そのミートボールに刺さったウサギの串。

うん、海斗が動物好きだってことを考えて、アタシが用意したもの  
だ。これ

も間違いない

で、その串を持っている手が海斗ので……って！

え！？海斗がアタシミートボールを差し出して、食べさせようと  
してくれ  
てるつてことじゃない！

「ほひほひ… えへこひやー…

いや、答えたんで出てるんだけど、頭がパンクしてて…

「ほひ、一子の作った奴美味いだろ?」

「ん……」

だけど、体は正直らしくて、無意識で口を開けてたらしく確かにとつても美味しい。

だけど、これはアタシの腕つていうよりは… ね。

Side out

その後も、海斗と一子は時間ぎりぎりまで平和な時間を過ごしていた

もつとも、一子からすれば、平和というよりは戦いだつたのだが。無事、勝利を収め、褒美まで献上された少女は終始、笑顔だった。

だが、平和とは長く続かないものだ。

平和を乱す影は動く。

「流川海斗か…」

### 3-1話 「愛の形」（後書き）

ありがとうございました  
この小説の主成分は妄想ですね  
今回それが爆発します  
正直、手が止まりませんでしたから  
そして、なにやら不穏な空気…

32話 「圖かわる織」（前書き）

毎回、感想をくれる方、本当にありがとうございます。自分が毎日更新を続けられているのは、そのおかげです。この場を借りて、お礼を申し上げたいいたします。では、どうぞ。

平和な昼休みはもう終わり、一人帰路についていた。  
今日は美味しい昼飯も食つたことだし、晩飯代節約しようかな  
そんなことを考えながら、橋を渡つていると。

む？

前から、何か気配を感じる

少数の不良だつたら、軽くひねりつぶしてやるのだが。

前から感じる気配は数も多ければ、いつもの雑魚というわけでもない。

ちょっとばかし、強い不良でもいんのか？

面倒だが、仕方ない。

今歩いてきた道を引き返そうとする…

後ろからも同じような気配を感じる。

囲まれたか？

なんだなんだ？今までの奴らの復讐にでも来たつてか。

だが、報復なんて面倒を回避するために一瞬で仕留めてきたはずなんだが。

流石に適當な相手へのかつあげには数がかかる。

明らかに狙つての行動だつてことは分かりきつている。

まあ、ポジティブに食後の運動だとでも思うか。

そう腹をくくる。

そして、だんだんと俺を囲む輪は小さくなつていき、敵の姿が視認できるよ

うになつてきた。

だが、その日に飛び込んできたのは、釘バットなんかを持ったひどいセインスの服をまとつた田つきの悪い不良などではなかつた。

持つてゐるのは、銃のよつなもの。

アクセサリーなどの類はなく、その身は整つた軍服？のよつなものに包まれ

ており、服装の乱れなんてものは見当たらなかつた。  
いや、まあ田つきはそんなによろしくないが…

これはもう大変なことになつてきたんぢやないか?  
だつてねえ、皆さん眼光がきらついてるもんなー。  
しかも、そそがれている先はこの俺一点といつね。  
もつ完全に俺がターゲットなのね、はいはい

そんな野郎どもの中から一人の女が出てきた。

左目には眼帯。紅い瞳に紅い髪、それは弱い者など軽がる飲み込む  
よつな印

象を与える深い紅蓮だつた。

服装も他の奴らとは違ひ、大量にいる同じ軍服の男どもの中で一人  
だけ突出

してゐるといふか、そんな印象を受けた。

まさに紅一点だな

…はいはい、面白くない面白くない

「貴様が流川海斗だな」

「悪いが、人違いだ

「嘘をつくるものではない。こちらで調べはついている

「じゃあ、聞くなよ

「形だけの確認だと、分かりなさい」

随分と偉そうな態度だな（自覚なし）  
とりあえず、話も通じない奴ではないか。

「見たところ、軍人か何かか？」

「いかにも。私は軍の少尉である、マルギッテ・エーベルバッハだ。  
ここに  
いるのは、誇り高きドイツ軍の我が部隊だ」

「その誇り高い軍人が一般人に大量の銃を向けてんのは、一体どう  
いう了見  
だつての」

「安心しなさい。それは強力な麻酔銃だ。殺傷能力はない」

「いや、安心する要素なんて無かつたんだが。そうじゃなくて、俺  
が聞いて  
んのは、何の用だつてことだよ」

「貴様、お嬢様に何をした？」

「は？」

「何をとぼけている、貴様の卑劣な行為は今更、隠せるものでもないだろ！」

「いや、待て。色々、なんか誤解もあるようだが、まず、まずはだ。そのお

嬢様つていうのは誰だ？」

「当然、クリスお嬢様のことに決まっている」

「あん、クリス？あいつって、軍の関係者なのか？」

「クリスお嬢様はドイツ軍中将フランク殿の娘だ」

「へえ……で？なんで俺が軍に狙われてるんだよ」

「お嬢様に手を出しておいて、何故だと？おかしなことを言ひ

「は、もしかして俺がクリスと友達だってだけで、狙われてんのか？」

「どんだけ、溺愛してやがんだ、その親父は。

「友達だと？とぼけるのも大概にしる。あのお嬢様の様子は……チ  
ツ。一体、

どんな手を使つたんだ、催眠術の類か？それとも、弱みでも握つて

脅迫でも  
したか？」

「言つてゐる意味が理解できん」

もしかして、あの決闘がばれてんのか？

そうだとしたら、娘を敗北させられて、お怒りなのが。  
それでこの軍を呼んじゃつわけか。

めつむや田やかされて、育つてきたんだらうな。  
薄々感じていた、空氣の読めなさにも今点がいった。

「お嬢様から手を引きなさい。そつすれば、酷い田にはあわせない」

「だから、あつちから話しがけてくるんだつづーの」

「どひしても拒絶するところじらじこな」

全然、俺の言い分、聞いてくれねえよ。

「つや、言つただけ無駄か。

「ならば、体で分かつてもらひしかない」

「おいおい……軍事力を何に割いてやがんだ」

「構え！」

一斉に無数の銃口が俺に向けられる。

その方向はまさに四方八方、死角なしの全面攻撃だ。

まあ、酔銃らしいけどな。

なんにも嬉しくないが。

「IJの状況でも気持ちは変わらんか」

「…………」

「だんまりか。よひしい、ならば、その身をもつて味わいなさい。  
……撃てー！」

俺は引き金が引かれようとこうその瞬間、立っていたその場から跳躍した。

連續した射撃音が耳に響く。

無事に一発も当たらなかつたようだ。

全方位攻撃と zwar ても、いや全方位攻撃だからこそ、その弾道は予想できる。

IJ まれていると zwar とは流れ弾が確実に誰かに当たつてしまつのだ。

すると、相手の足の方を狙うのが、ベストと zwar となる。

跳弾しないようにする弾なんて、作らうと思えば作れるだろ？

それに殺傷性はない酔銃だつて言つたしな、そもそも跳弾の心配なんて

ないか。

着地すると同時に一番近い軍人に走って向かつ。当然、相手はこちらに撃つてくるが…

今度は弾をしつかりと見ることが出来る。

弾だろうが、パンチだろうが、見えれば大差は無い。避けるスピードを少し上げれば、いいだけのこと。

俺は最小限の上半身の動きだけで弾をかわすと、その軍人の腹部に当て身を

見舞う。

悪いな、手刀とかスマートなことをしてる余裕はねえんだそいつから、銃を強奪した。

俺は手にした銃で、一発一発確実に軍人を氣絶させていく。勿論、相手の銃撃には絶対当たらない。あくまで、避けることの方が優先だ。

てか、強力な麻酔使つてやがんな。軍人がバタバタ倒れていきやがる。

即効性ありすぎだろ。

さぞ、充実した軍なのだろう。

指揮している奴に問題がありそうだがな。

撃つては避け、避けでは撃つ。

あとはその作業の繰り返しだ。

弾数がなくなつたら、また他の奴から銃を奪い、また弾数だけの相手を殲滅。

地道だが、確実に。

数分後、俺の周りには遺体のように軍人たちが転がっていた。

いや、俺は何も悪いことしてないからな。

絵面だけ見たら、そりや誤解されてもおかしくないけども。

そりや、銃を持って、倒れている大量の軍服の中に、立っているんだからな。

想像したら、かつこいいとか思うだろうが、大間違いだぞ。完璧に大量殺人犯にしか見えないからな。

悪人でしかないわ。

まあ、無傷だし。文句はないか

後半は作業だつたな、なんか前やつたゲームのようだつた。

「とりあえず、ステージクリアってことで」

そう呟いて、肩の力を抜く。

「……フフ」

だが、ゲームは終わらない。

海斗は第二ステージに行かなければならぬのだった。

ありがとうございました  
なんていうか、海斗が普通じゃなことには  
もう明らかって感じですね。  
武器ありとましいえ軍を一人でやつひまこましたからね  
次回はどうなつてしまふのかと。

余談ですが、暇な方は活動報告も見てくださいるとありがとうございます  
たまになんかほざいてるので（笑）

33話 「狩る者と…」（前書き）

今更すぎますが、R-15ってどこからなんですかね。  
血が出たら？身体的に破壊されたら？  
なんか、基準が分からんんですよね。  
これからもつけなくて大丈夫かなあ…

Side マルギッテ

ふつ、流川海斗、面白い  
フランク中将の命令であり、クリスお嬢様を守るために思つて、あまり気が乗らない、ひ弱な野うさぎを狩りにきたんだが…

思わぬところで獣は発見できるものだ

麻酔銃という強力な武器があるとはいえ、あの大勢の精銳部隊に、この短時

間で勝利してしまうとは。

しかも、銃弾をかわすときのあの動き…  
まるで見切つているかのような無駄のない回避だった

受ける印象は完全に弱者のそれだと思つていたのだが…

“人は見かけによらない”なんて、一度たりとも信じたことはなかつたが、

こいつに関しては信じざるをえないな

こいつなら、あるいは少しばらは楽しめるだらうか

Side out

「IJの銃つて、結構軽いんだな」

流石、良い武器は違うといったところか

一つくらい持つて帰つても、罰はあたらないだらうか

「じゃ、帰ろつかね

帰るのを邪魔してた軍人さんもお休みのようだしね  
そして、橋を進もうとするのだが。

目の前に立ち塞がつた、あの女少尉が。

「なんだ？まだ、何か用なのか？倒したんだから、帰つていいだろ」

「まだ私が残つている」

「お前もやつこいつタイプなのね…。悪いけど、俺は別に自ら女の子  
に手を出

そつなんことはしねえんだよ。銃なんて向けるかつーの」

「お、女の子！？貴様、馬鹿にするのもほどほどにしなさい。私は  
軍人であ

り、戦いのプロだ。言葉に気をつけなさい」

「いや、職業がどうだらうと、関係ないだろ。まあ、誇りがどひこ  
うつての  
は分からんでもないが…つつてもなあ

「私と勝負して勝利する。それしか、貴様が家に帰れる方法はない」

「おいおい、勘弁してくれ。俺はわざの戦いでヘトヘトなんだよ。  
限界な  
わけ、分かる？何を勘違いしてるかは知らんが、今の俺と戦つたと  
ころで面  
白くないぞ」

「ふ、何を言つたと思えば…。貴様の状態がどうであるかと、現時  
点での全  
力をもつて、戦いに臨めば、私はそれで満足だ。貴様がどれだけ疲  
れていよ  
うが関係のないこと」

（微塵も疲れていな）ようだがな…）

こいつ、俺が疲れてないってこと、見抜いてやがるな  
だが、何を言ったところで無駄と判断し、この対応。

はあ、まったく疲れる相手だ  
クリスといい、こいつといい、なんで軍の関係者はことじいとく俺の  
演技を見  
抜いてくんだか…。  
やりにくいくこと、この上ないな

「鬼だな。流石軍人ってどこか？強引過ぎやしないか

「強引だろうがそんなのは私の知るところではない。私は貴様と戦  
うことで

戦闘欲を満たす。ただそれだけだ。貴様からはただの野うさぎとは

違うにお  
いがする

(私と同じ狩る側のにおいがな)

「おいおい、軍人がバトルジャンキーなんて、色々と問題があるん  
じゃない  
のか？よくクビになつてないな」

「それだけ実力を買われて『』理解しなさい」

「ん～、しょうがねえな。俺だつて自分の命の方が大事だからな、  
相手が女  
の子だらうと、必要とあれば、銃を使うのもやむなしだ。どうして  
も、俺の  
邪魔をするつていうなら、『』一帯に転がつてゐるお前の部下同様、  
眠つて  
もうううが、どうする？」

そう言つて、麻酔銃の銃口を相手に向ける  
勿論、引き金を引くつうという気持ちなんて、これっぽつけもないが  
な。  
ただの脅しだ

俺が素人とは言つても、さつきの戦いを目の前の女軍人は見てゐる  
そう、俺が一発も銃弾を外していないこともだ  
脅しは十分な効果を持っているだらう

「もしかしなくとも、私は脅されているのか?」

「そんな滅相もない。俺は今日は体調が優れないから、帰らせてくれって、  
言つてゐるだけだぜ」

「随分と態度のでかいお願ひだな」

「ま、やつこいつだ。今日のことは大人しく…」

次の瞬間、拳がとんできた

その動きを見る限り、銃の脅しなんて全く効果がないようだった

「なつ、あぶね!」

「やはり、回避能力だけは本物のようだな」

「そりや、どうも。痛いのは嫌だから、いつちは必死なんだよ」

「それにしては無駄のない動きだがな」

「気のせいだつづーの、偶然だ偶然」

「こいつ、本当に見透かしてきやがる  
もつほとんど、何言つても無駄な気がするが、一応返しておく

「ならば、これは避けられるかな？」

そう言つと、相手はどこからかトンファーを取り出した  
なるほど、それがお前の愛用の武器つてところか  
警戒レベルを上げといった方がよさそうだな……って！

ヒュン

トンファーが鼻先をかすめる  
こいつ、段違いにスピードが上がりやがった  
武器でリー・チも長くなっているのは分かるが、拳のときと同じまで  
違うもん  
なのかな。

おそらく、トンファーの扱いは幾度もの戦場での経験によって、仕  
上げられ  
たものなんだろうな  
少しも気は抜けないな

「よく今のをかわすことが出来たな」

「いや、身の危険を感じて咄嗟にね…。っていうか、お前は一般人  
の命を奪  
うつもりなのかよ」

「この期に及んで、一般人などとはよく言つ。心配せずとも、氣絶  
くらいで  
済むから、命の心配はない」

そつと、次々と縦横無尽なトンファーの攻撃が繰り出される  
縦、横、横、ななめ、横、縦、ななめ、ななめ、縦  
規則性なんて、全くない連撃が襲ってくるが、焦ることはない  
一つ一つをしつかりと皿で捉えて、対処していく

避け続けていれば、相手も疲れてくると思つたのだが、どうやら違  
うらしい

時間が経つ度に、攻撃の密度や激しさは増していった  
普通の奴なら、何事かと、心を乱されるだろうが…  
攻撃のパターンに慣れてきた俺には今更速くなろうが、強くならつ  
が関係の  
ないことだった

落ち着いて、相手の隙を探す

どんなに速く攻撃を行つたとしても、その攻撃間の隙といつのは絶  
対になく  
すことは出来ない  
…ここだな  
俺はその隙にカウンターを入れる

「なつ！？」

相手が驚いて、後退する  
まあ、そうだよな、戦闘中に「アヘン」されれば、誰でもそうなるだ  
ら  
ひ  
る  
極めて正常な反応である

「じゅやい、馬鹿にしていいよ!」だな…」

あれ? もしかして、怒りでも買つかけたか

「ならば、こいつも本気を出せ!」

そう言つと、おもむろに眼帯を外す  
てつきり、戦場で目に傷でも負つたのかと思つていたが、中身は綺  
麗なもん  
だつた

「Hasen Jaeger...」

「なー?」

馬鹿だつた。迂闊だつた。油断していた。

相手はきちんと“本気を出す”と言つてくれていたのに。

次の瞬間の攻撃は、明らかにさつきのが別人と思わせるよつた変容  
ぶりであ  
つた。

威力もあがつていていたりするのだろうが、何より迅い  
しつかりと、もつと大げさに警戒していれば、反応できただろうが、  
そんな

いきなりの攻撃に俺は回避行動をとる暇がなかつた  
そして、俺は咄嗟に…

バキッ

体に凄まじい衝撃がはしる

おー、これはやばい威力だつたんじやないか。

「なん…だと…」

田の前には呆然とするマルギッテ。

その手には無残に折られたトンファーが握られていた

「危なかつたぜ、銃を持つてなかつたら、やばかつたな」

「馬鹿な…、このトンファーはドイツの高価な木材で作られている  
特別製の  
ものなんだぞ」

「所詮、木は木だったってことだら。鉄の方が硬度があつたつてだけだ」

「ありえない…」

いや、なんかそんなに落ち込まれると罪悪感が…。  
え、もしかしておばあちゃんの形見とかじやないよね。

やめてよ、やつこいつ取り返しのつかないのは。

「まあ、そのなんだ。お前みたいに強い奴が俺みたいな逃げ腰の奴を相手に

してたら、自分の品位を下げるだけだぜ」

「慰めてでもこるつもじか…」

「いや、俺が女の子を泣かしている最低野郎だと思われないための、せめて  
もの自己防衛だ」

「へ…また、女の子などと。それに泣いてなどいなーだろー。」

「こや、言葉のあやつて奴だよ」

「…………」

そんな田で睨まないでくれ、頼むから  
本当に俺が泣かせたみたいになるだろう

「まあ、怪我はないよな。トンファーは悪かったが、経費がなんか  
で落としつくれ

「逃げる気か」

「お前はまだ言つか…。そんのはまた今度な。あー、それとそのホットド

ッグだかなんだかに言つておけ。俺は誰に向と言われようが、クリスと友達でいることをやめるつもりはないってな。俺を縛れるなんて、思わないことだな

「ふん……。フランク中将だ、馬鹿者…」

「じゃあな

銃を放り投げて、俺はせつと家へと向かつ

今日はなんか凄い濃い一日だった

### Side マルギッテ

はあ、完敗だ

眼帯をとつた状態で、手も足も出なかつた

そして、勝負に負けた拳句、女の子扱いされて、優しくされるなど…。

トンファーも粉々に碎かれた  
だが、おかしい

演習のときもあんな銃くらい軽々と壊せたはずだ

それなのに…

そこへ流川海斗の放った銃が目に入る  
これに私は負けたのか…

む？

何か違和感を感じる

そう、その銃は弾が減つてること以外、新品のように綺麗だった  
傷一つついていないのだ  
仮にトンファーがこれに壊されたとしても、ぶつかり合って、傷一  
つないの  
は、どう考えてもおかしい

「どうこう」となんだ？」

考へても考へても、なかなか疑問は解決しなかつた

Side out

「くつくしゅん、ああー、手いてえ」

33話 「狩る者たち」（後書き）

ありがとうございました  
海斗の強さ、一瞬だけ片鱗が見えましたね  
本当にあくまで一瞬ですが…  
さて、「これがひじょうなる」とやら

PS

活動報告にコメントくださった方はありがとうございました  
キャラ紹介についてはもう少し考えます。  
作るとしても、?ばかりになりそうですが（笑）

### 34話 「ハツヨウたり」（前書き）

今回からまた日常編ですかね  
こことの戦い続きでしたから。  
ダラダラに付き合つていただけると嬉しいです

### 34話 「八つ鼎たり

Side マルギッテ

「中将殿、申し訳ありません」

「少尉、まさか君でも敵わなかつたとは…。見たところ、他の墮落した日本人と何も変わらぬ、脆弱な人種だと思っていたのだが。私もそこまで能天氣ではない。少尉の実力はこれまでの功績からも認めている。そして、どんなに簡単な任務でも手を抜かず、必ず成功させる。ましてや、クリスの姉代わりでもあつた君が力を出し惜しみしたとも思えない。それでも、負けたといふことは、本当にその流川海斗という男にはそれ相応の実力があると見ていいのだろう」

「はい、負けた自分の意見など言い訳にしか過ぎませんが、あの流川海斗の

実力は本物です」

「少尉にそこまで言わせるとなると、こちらも胡坐をかいている場合ではなきやうだな、もっと本腰を入れなくては」

「中将殿、もう一つ」報告したい」とが…

「む、なんだね？」

「私の所持しているトンファーを破壊することは可能ですか？」

「そうだな、実力を持つている少尉には頑丈なものをと思つて、あ  
れが最適  
だつたと考えたのだが、流石に重火器での攻撃までは耐えられんだけ  
うな。

まあ、めつたには壊れないだろう。どうかしたのか

「やはりですか…、実は流川海斗にそのトンファーを砕かれました」

「何!? 確かに人間の手で作られた物だ。絶対に壊れないということ  
とはあり  
えないが、あれを碎かれただと…、どうやってだ。相手は何か強力  
な武器を  
持つていたのか」

「それが、相手の所持していたのは我が軍が使つていた強力麻酔銃  
のみ。壊  
されたのも一瞬すぎて、手段は判別できなかつたしだいです。本人  
は銃で攻  
撃を防いだように振舞つていましたが

「当然、眼帯を外していったのだろう?」

「はい、その後でした」

「ふむ…、その状態の少尉でも見抜けない速さ。しかも、あの麻酔銃は麻酔こそ強力だが、その本体は軽量化を目指して作られ、耐久性などないはずなのが」「

「そのことなのですが、私が確認したところ、その銃には傷一つ付いていませんが、本当に傷一つ…」

「ならば、銃で防いだという線はなくなる。嘘と思った方がいいだろつな。

先程も言ったように、耐久性がないのに無傷だということのは、使つていないと考えるのが妥当だらう。しかし、それなりにやつて…？」

「中将殿、これは臆測なのですが、流川海斗はこれを素手で破壊したのです

ないかと思われます。にわかには信じがたいですが…」

「まあ、それはそうだらう。だが、その結論に至つた根拠を聞きたい」「

「はい、最初に申しましたが、トンファーは碎かれていたのです。焼け跡や

薬品の痕跡は勿論、刃物類での切り口も見当たりませんでした。乱雑に不規則に外から強い衝撃を浴びられて大破した典型的のようでした。武器でこんな

ことが出来るとしたなら、ハンマーといったところでしょうか。た  
だ、言ひつ  
までもなく、そんな武器を隠せるはずもあつませんので、血ずどや  
の手段は  
拳での打撃といつて」

「ふむ、何も知らない者が聞けば、納得してしまつよつた理にかな  
つた推測  
だつた。しかし、あの武器の強度を知つてゐる私からすれば、やは  
りすぐに  
は信じられない話ではあるな。しかし、その説を否定すれば、また  
真相は手  
がかりなしの状態に逆戻りか。非常に難儀なことだ…」

「すみません、私が見極められなかつたばかりに」

「いや、少尉が全力で取り組んでそれならば、少々甘く見すぎてい  
たこぢら  
のミスだ。とにかく、次はもっと人員を割かなくては。全ての銃撃  
をかわし、

五十いる軍隊をたつた一人で潰してしまつだけで只者ではないしな。  
なめて

かかるのはもうよんづ。これも我が愛しき娘、クリスを守るためにだ」

「中将殿、そのことなのですが、流川海斗はお嬢様への危害にはな  
らないか  
と…。本人もただの友達だと黙つておりましたし…」

「それを信じられるといつのかね」

「い、いえ、そういうわけでは…」

「少尉に限つて、心配はしていないが、これは一応任務だ。あの男に情けな  
どかけて、全力を出せないなんてことはないよつこ

「はい。出すきた真似をしました。私が口を挟むといりではあります  
せんでし  
た。申し訳ありません」

「いや、いいのだ。少尉には期待をせてもうらつている

「は、光栄です」

「報告はこのくらいでいいだらう。一応、戦闘任務のあとだ。しつ  
かりと体  
を休めたまえ」

「では、失礼します」

そつと、部屋を出る。

やはり、中将殿も驚かれていた。

それはそうだ。

無数の銃撃をかわしたときは、出来る奴だとは感じたが、まさか眼  
帯を外し

た状態で、一瞬で勝負をつけられるとは思つていなかつた。  
また、それだけの強さを持ちながら、全く他人に気取らせることが  
ない。

あと、中将殿には言わなかつたことがある。

流川海斗はまだ本気を隠しているような印象を受けた。

これは戦つた感触というか、所謂第六感のよつなものなので、確証も何もな

いから伝える必要はないと考えた。

まさに未知の強さ。

本当に世界は広い。

それにしても、何故自分は流川海斗を底うりみたいな物言いをしてしまつたのだ  
るべ。

あいつはただの友達だと言つていたが、確かにそれを信じるに値する要素な

んで、何も持ち合わせてはいなかつた。

それなのに、私は何を考えて、あんなことを言つてしまつたのか。

ただでさえ、分からぬことだらけだといふのに、自分自身のこと

まで、理

解できなくなりそうだ。

まあいい。

今、そんなことを考えても、仕方がない。

もうアイツの強さは十分に身に染みた。

次のときは、最初から全力で潰してやるべ。

Side out

溜息をつきつつ、通学路を歩く。  
はあ。

昨日はみすつたなー。

咄嗟にトンファーを破壊してしまつとは…

銃で壊したなんて、いつばれてもおかしくない嘘だよな。  
めつさ軽かつたしな、あの銃。

昼飯の分の軽い運動だつたはずが、運動量オーバーもいいところだろ。  
でも、結局晩飯は食つてないし。

ああ、でも昨日のは久しぶりに楽しか……じゃなくて、退屈しなかつたな。

たまになら、ちょっとした刺激もいいのかもな。  
毎日じやねーぞ、あんなのは身がもたん。

「あー、腹減つた」

「いなり寿司でも食べるか?」

いつの間にか、クリスが横に並んで歩いていた。

「じゃあ、もううわ」

「ふふ、自分に感謝するのだな」

隣で満足そうに微笑む少女。

そういうや、こいつのせいで俺は昨日大変な目にあつたんだよな。  
そんなに恨むほどではないが…

「なんだクリス、その食べ方は」

「ん？おかしいか？」

「おかしいも何も、食べる前に稻荷の神に感謝の礼を述べなきゃ駄目だろ」

「海斗、そんな話は聞いたことないぞ。自分を騙そうとしても無駄だ」

「何を言ひつ。“稻荷”とは諸説あるが、その語源は“担い”から来てるといれていて、それは稻荷の神が幸福を担がせてくれることに由来しているんだぞ。だから、その幸福を逃がさないように、油揚げで全体を包んでいるといふ今の形状になつたんだ。また、稻荷の神は豊作をもたらしてくれるともされていって、“稻を荷つ”というのが、そのまま名前になつたという説もあるがな。日本ではこんなのが常識だぞ」

まあ、こんなもの今思いついた根も葉もないでつちあげなのは、言うまでもないが…

「そ、そうだったのか。知らなかつた

純粹なクリスは見事にひつかかってくれた。  
いやー、からかい甲斐があるな。

「ああ。分かつたら、この方角を向いて、お礼を述べてから、食べるんだ」

「了解した。えー、美味しいなり寿司を食べさせて頂いて、本当に感謝しております。今まで知識がなかつたため、お礼を言えなかつたことをお許しください」

俺が指した何もない方向に向かつて、なんか喋り出した。  
これ、知らない人が見たら、完全に変な人だろ。

「クリス」

「なんだ、海斗。海斗も一緒にやるか?」

「ちなみに言つとくと、やつきのは嘘だ」

「…………」

おーおー、顔が真っ赤になつていいく。

自分がどれだけ恥ずかしいことをしていたか自覚したらしい。

「かーいーヒー！！」

そのあと、怒ったクリスをなだめるのは大変だったが、昨日のハッ  
当たりは  
無事に完了した。  
ご馳走様。

34話 「ハツコたつ」（後書き）

ありがとうございました  
会話が異常に多い回でしたね  
たまにはこんなのも新鮮かも?  
次回からもこんな感じでゆっくりんで、よろしくお願ひします

### 35話 「水上体育祭」（前書き）

活動報告にも書いた気がするんですが、前書きでネタコーナーでもやろうつかと思う今日。本編で出番のない松風とか使おつかなーとそこいら辺まで考えました、そこまでです（笑）。

### 35話 「水上体育祭」

クリスを存分にからかって、登校した後のこと。  
教室ではHRが開かれていた。

「そりいえば、2-Sに転校生が来たらしくて

「たぶんマルさんのことだな」

クリスがそんなことを言つ。

“マル”さん？

なんか、クリス関係でそんな名前の奴をつい最近、具体的には昨日あたりに

聞いた気がするんだが…

マルギット・バッフェルベルカノンみたいな名前だったっけか。  
あれ?なんか名曲っぽくなってしまった。  
いや、これでも前半は結構自信があるんだが。

「それはそれとして、今年の体育祭は水上体育祭に決まったぞ

教師がそんなことを言つ。

水上?何、水の上でも走っちゃうの

伊賀なの?甲賀なの?

そんな超人同士の競技はお断りなんだが。

「……………」

突如、教室に大爆音が響き渡った。

主に発生源は男子どもの口からなのだが……

「女子の水着だあああああ」

「学園長のジーさん、グッジョブ」

はー、なんとなく理解したぞ。

水上体育祭とは水辺で行われる体育祭というだけらしい。  
まあ、おそらくはプールや海つてところか。

それにより、女子の水着が見れると思った男子のテンションが急上昇と。

なんとこいつ単純思考回路…

んで、女子どもの反応はこいつと…

「まあ、暑いしちょうづこいんじゃない」

「そうだねー」

「ちらりも好評らしい。

まあ、男子の不純な動機と一緒にするのもどうかと思うが。

そして、何気なく一子のほうを見てみると…

んなつ！

なんか物凄く負のオーラを放っている。  
誰に聞いても、今の一子を見て、氣分が浮かれているなんて言わないだろ？

むしろ、逆も逆、落ち込むところまで落ちていいようだ。  
うーむ、じついう運動系の行事は好きだと思ったんだがな。

### S i d e 一子

運動会、体育祭、他にも色々言い方があるのかもしれない。  
ともあれ、アタシはそんな運動のイベントが大好きだ。  
その競技の種類による区別なんてない。

陸上競技、球技、水泳、どんな種目も等しく好きだ。

いや、今となつては好き“だつた”。

決して嫌いになつたわけではないんだけど。

今年から、気が乗らない種目が増えてしまった。  
いや正確には、“海斗に恋をしてから”。

それまでは体を動かせれば、満足だった。  
だけど、前にも思った。

恋をすると、見える世界が変わる。

それは当然、自分の意識が変わつてることで。

今まで人に見られる姿なんて、気にしていなかつた。

水着だつて、泳ぐためのユニフォームであり、それ以上でもそれ以下でもな  
かつた。

でも、今は違う。

自分が見られると意識してしまつ人がいる。

見て欲しい人がいる。

運動しやすくて、不自由に思ったことなんてなかつたけど、今はこの身体が恨めしい。

学校指定の水着なんて絶対に身体のラインがでちゃうわよね。京とかは胸大きいし、うらやましい。はあ～、憂鬱だわ。

…今日から豆乳でも飲もうかしら。

Side out

「場所は勿論、海で行うぞ」

それにしても、スポーツ大会ねえ。

海でやる競技つて言つたら、やっぱ水泳とか。

あとは、ビーチバレーにビーチフラッグ、…スイカ割りとか？

いや、とりあえず水につかるうか、海に入るうか。  
つたく、海なんて行つたことない奴の想像なんてこんなもんだぜ。

一応、聞いとくか。

何も知らないで行くより、遙かに良いだろ？  
かといって、クリスも転校してきたばかりだしな。  
やつぱり、あのいかにも精神不安定な一子に聞くしかないか。

「おーい、大丈夫か。一子」

「胸……」

むね？

よく分からんが、なんか旅に出ちゃつてるよ？  
帰つて来てもらわんと。

「一子、もうひとつーー」

そう言つて、ノーガードの類を人差し指でつつぐ。  
む、なかなかの柔らかさである。

「わっ！」

どうやら返づいてくれたらしい。

だが、この柔らかさはなんといつか、癖になる。  
やめられない、止まらない。

「海斗、海斗ーも、もつまづこいつるかう。ねえ」

「つむ、分かつてゐる

ふにふにとこじくつてみる。

その度にこちこち“ひあつ”とか反応するのド、ますます面白い。表情も隨時更新される、なんか可愛いな。

「わ、分かつてゐなら、そのまつペの指を…」

（あ、でも、これって海斗に触れてもらつてゐんだよね。それなら、このままの方が幸せかも…。）

あれ、なんか顔が赤くなりだした。

あ、そういうや、俺、体育祭のこと聞きに来たんだつた。夢中になつて、すっかり忘れてたぜ。本来の目的に戻るため、指を離す。

「あ……」

「あ？」

「い、いや、何でもない。何でもないの」

「ならいいが、ちょっと一子に体育祭の種目を聞きたくてな」

「えーっと、それはちょっと分かんないわ」

「ん? どうしてだ」

「それがこの学園って何やるかな? 『めとんべっく』の年によつて、  
違うから  
参考になるようなものがなこのよ」

「まあ、確かにあの学園長はそんな感じだよな」

「一応、水中玉 ireとか、そんなのがあつたみたいだけ? 今年も  
あるかは  
分からぬいわ」

「結局は、あいつの『氣分次第』ことだな。はあ」

まあ、いいか。

ぶつつけ本番でも、自由にやらせてしまひたいところですか。

「か、海斗!」

「ん、どうした?」

「あ、あのね……、海斗は大きいのと小さいのどっちが好き?」

いきなり意味不明な質問をされた。

大きい？小さい？

え、動物の話か？

俺は基本チワワから、セントバーナードまで何でも愛せるが…  
どうひつて言われてもなあ。

「俺は特に大きさとかは気にしないな。サイズとかよりも、もつと  
そいつ自

身の魅力とかの方が重要だと思つぞ」

「そつか…、そなんだ」

そう言つた一子の表情は下を向いていて見ることが出来なかつた。  
ただ、何故かその言葉からは嬉しさが表れていた。  
なんか、俺、そんな喜ばすようなこと言つたつけか。

見事に噛み合つていないので会話が成立している一人だつた。  
よもや、自分の胸のことチワワとされているなんて、一子は思つ  
てもいな  
いことだらう。

ともあれ、これで一子が元気になつたことは言つまでもない。

## 水上体育祭

2・Fだけじゃなく、全校にその開催を伝えられた。  
海でのこのイベントがまた何を引き起しそのだろうか。  
まさに“波乱”の予感である。

35話 「水上体育祭」（後書き）

ありがとうございました  
結構悩んだんですが、体育祭は水上にしました。  
ルート的には京でしたつね。  
別に水着最高とか、そんなんじゃないですかうね！

36話 「海斗FC」（前書き）

松風「よお、みんな、特に前書きに書くこともないらしいから、オラ参上したぜー。なんか」「一ナーラーをオラ一人で担当するんだー

え？一人じゃないって？いや、何言つてるんだYO！

オラの意志で喋つてんだぞ、後ろには誰もいないぜえ

松風「・・・・・」

海斗「由紀江、やうそろ本編始まるや」

### 36話 「海斗FC」

「こ」は一年教室。

一年の教師陣はなにか大切な会議とかで席を外している。  
所謂、自習という状態だ。

今ここで一大イベントが開かれていた。

それは…

「皆さん良いですね。 反対はないですか？」

その場にいる女子生徒が頷く。

「では、『こ』に“流川海斗先輩ファンクラブ”を設立します！」

わーわー

パチパチパチパチ

その一帯は拍手や歓声で異様な盛り上がりを見せていた。  
所詮、自習などこんなものだ。

真面目に勉強をしている方が少数派である。

そして、『こ』にもその話に興味津々な少女が一人。  
黛由紀江と大和田伊予である。

「まゆつちは行かなくていいの？」

「い、いえ、私はその…」

「おいおい。それは愚問だぜえ、まゆつちは海斗公認の友だちなんだから  
なー、焦る必要はないのさ」

「あー、そつか。いいなあ、まゆつち」

「いや、違うんですーこり、松風何を言つているんですか。私はで  
すね、そ  
のあんな楽しそうなグループに私なんかが参加してもいいのかなと  
…」

本当に変なところで遠慮がちな少女である。

とらえ方によつては謙虚という日本人の美德もあるが：  
この少女はそのせいで友だちが出来ないのに気づいていない。

「なら、私と一緒に行こうよ。まゆつち

「え？」

「別にまゆつちに気を遣つてるわけじゃないよ。私も流川先輩に助  
けてもら  
つて感謝してるひつていうか、入りたいなーって思つたから、まゆつ  
ちも入ら

ない？って誘つてるだけ

「伊予ちゃん…」

そう、かつて伊予も海斗に不良から助けられた。

自分のピンチに颶爽と現れて、助けてくれた男の人には好意を抱いてしまうのは、これはもう女の子としては仕方がないことだろう。勿論、伊予も例外ではなかつた。だが、それを感謝の気持ちだと友だちの前でごまかしてしまつのも、やはり女の子ゆえだらうか。

「いや、やつぱり興味あつたら、形から入らないとね。野球だつて、まずは試合を見に行かないと始まらないし！」

「そうですね、行つてみましようか」

そうして一人の恋する少女もまた、その集まりに加わつたのだった。

「えー、流川海斗先輩ファンクラブとは、ご存知川神学園2・Fに在籍して

いる流川海斗先輩に対して、憧れ、好意、思慕、どんな感情からでも構いま

せん、先輩に興味がある、先輩を見ていたい、先輩のことを応援したい、ひいては先輩に恋をしている人でも歓迎の、自由度が高い団体です。」

「お互いにそういう個人の目的に突っ込んだり、咎めたりなどということはせずに流川先輩のことについて共通の目的を持った仲間として、情報をどを共有していくといったり、先輩のことを話し合える人との交流の場というのが、このファンクラブの主な存在意義となるでしょう。」

「ちなみに、やつを自由度が高いと言いましたが、普通のファンクラブとは異なり、会員番号などといった序列は全くありません。新しく入った人と作られた当初からいる人の間にも、差はないです。」

「勿論、本人に迷惑をかけたりする行為は禁止となります。盗撮やストーカーなどに準ずる行為は言語道断です。イベント上とでもないときは写真を撮るときは許可をとるのが望ましいです。」

「今言った、最低限の決まりを守っていれば、流川先輩を食事に誘つたり、手紙を送るのは自由です。抜け駆け禁止なんてことは一切ないので。」

委員長のよつと人がすらすらと読み上げていく。

昨日今日で計画されたことではないことが明らかである。

「なんか、思ったよりもすつしにこしつかりした感じだね」

「はい……、それにも関わらず、とても柔軟で不満も出でてること思いました」

由紀江の言つとおり、周りの女子たちも黙つて、頷いており、反対意見などは一つとして、出ぬ」とはなかった。

「では、皆さんよろしくお願ひします」

そつと聞いて、説明は締めくくられた。

すると、集まっていた女子生徒が早速話し始めていた。

「あ～、流川先輩つてほんとかっこいいなあ

「ていうか、なんか年上オーラが出てるつて感じ。頼りがいあります」

「それにタッグマッチとか川神戦役でも見たけど、あの強さでしょ

「前に不良から女生徒を守ったなんてのも流れてたもんね」

「私も守つてもらいたいなあ」

「あと、あの川神戦役のときの料理！」

「あんな感じなのに、家庭的な一面もあるとか、ギャップで反則だよね～」

「料理部の人の話だと本当に美味しかったらしいよ」

「一回でいいから、食べてみたいよね」

「それにもうすぐ体育祭だし」

「また流川先輩の活躍する姿が見られるのかな？」

「先輩泳ぎも得意なんだろうなー、もうスポーツ万能つて感じ」

「それに水着姿つてことだよね」

「これは新聞部とかに期待しないと、しつかり良い写真を撮つて欲しいね」

「こうようになに次々と海斗についての会話が行われていたのだが…

一人の少女はなかなか輪の中に入つていけなかつた。

守つてもらった少女と料理を教えた少女の一人は。

こんな感じで一年生での海斗の人気は凄まじかつた。だが、それも全員というわけではない。良く思っていない者も当然いたのだ。そんな少女の代表がここに一人…

### Side 小杉

今、一年生の話題は一人の男に持っていた。どこを歩いていても、“流川海斗”“流川海斗”と同じ単語ばかりが耳に入ってくる。

聞けば、エリートクラスでもないというあの男。そいつがプレミアムな私よりも目立つなんて我慢ならない。せっかく、一年生を制圧したつていうのに、話題にもあがらないなんて、これほどまでに腹立たしいことはない。

確かに川神戦役を見ていて、ある程度出来るのは認めよう。弓矢も一発で命中させてしまうし、正直あれは見事だった。だけど、所詮は凡人が集まるクラスの中で頭ひとつ出ているというだけの話。

プレミアムな私が劣る存在ではない。

しかし、この人気。

人を惹きつける能力があることも認めざるをえないだろう。だけど、それはもう逆に好都合だ。

プラスに考えれば、それだけの人気者より上だということが証明できれば、

これほど大々的な宣伝方法はない。

相手の地位を落とすだけではなく、自分に人気が流れ込む可能性だってあるし。

まさにプレミアムな作戦ね。

だけど、正面から当たるには少し危険だわ。  
作戦を立てないと…

Side out

色々な意味で一年の話題を独占の海斗だった。

## 36話 「海斗FC」（後書き）

ありがとうございました  
これ書こうとは思つてたんですが、  
ほんの小話程度に入れようだつたのが、なんと一話の長さになりました。  
いやはや、一年生に大人気の海斗でした

PS

前書きたまにああります、気が向いたらです。  
意外といつもより時間がかかるという(笑)

### 37話 「金欠とはこれいかに」（前書き）

なんかすゞく眠いです。

週末の疲れってあなどれんです。

皆さんにはしっかりと身体を休めてください。

37話 「金欠とはこれいかに」

「はあ、金がない。とにかく、金がない」

もつ細かいねだなにがりがり、さういふと云ふのがいた。

誰に絶賛されてんねん。

“お金がなくても、僕の君を思う気持ちは誰にも負けないよ”

とか言つてゐる奴らに一言物申したい。

ପାତ୍ରବିଦ୍ୟା

”とか、

「ターカーが何を買えるものか、その後に『買えるもの』と並んで『買っている』よりも、『買っている』方が印象的だな」と、アーティストの一人が語る。

あわてて叫んでゐるが空れあれ

否定の後の肯定だよ 後半の文を強調するといふ文法表現だよ  
意見を述べるときに説得力が出ちゃうやつじやん。

結局のところ、世の中、マスター力……じやなかつた。

いや、悪人みたいなこと言つてるけど、マジマジ、真剣な話。

だつてな、有料なんだよ。

愛なんかじゃ、いくらあっても、買えないわけ、お分かり？

その他、自分の将来の夢を叶えるための勉強、大切な命を救うための治療、

エトセトラエトセトラ。

要するに金がなくては、物事まわらんのだよ。

夢がない話だなーって思つけども、その夢もお金で買つてるわけだからね。

もうわけわからんね。

いや、そんな大切な金が足りなくなつてているのは大問題なわけだよ。それもこれも全てはこいつのせいなんだがな…

“勤労にやんこ”

噂の勤労 シリーズの2ndティーションだ。

第一弾の“勤労わんこ”の大好評につき、さらに新コスチュームも追加で、

種類を増やして帰つて来た今回のこれ。

第一弾は存在すら知らなかつたのだが、試しにひとつと買つてしまつたのだ

が、それが失敗だつた。悲劇の始まりだつたのだ。

食品玩具、いわゆる食玩の一種なのだが、もはや立場が逆転して、

（

メインで

ある小さいラムネの方が付属品と化している典型的な現代のお菓子。なんか、グッズだけ取つて、お菓子を捨てる子どもまでいるらしく、勿論、

俺はそんなことはしないがな。

まあ、そんなことは言いつも、俺も中に入っているマスクアト田當で買つているのだが…

そして、箱を開けると、中から敬礼をしているにゃんこが出てきた  
よく見たことある制服をまとつて、これは“警察官”か？

ていうか、待て。

落ち着け、冷静になれ、皆の衆、殿中でござる（お前が落ち着け  
このつぶらな瞳。

ちよつじよこデフォルメ具合。

チャーミングなひげ。

帽子におさまりきらず、はみだした耳。

なんだ、この可憐さは。犯罪か、警察官が罪を犯していいのか。

まあ、俺がもう捕まえてしまつたがな！はつはつはー（誰か止め  
ろ）

あまりの愛嬌に悶えてしまつて、周りから冷ややかな視線をあびせ  
られたの  
は、言つまでもない。

（

いや、まあその1個を買ったがために、ものの見事にはまってしまい、金の浪費につながったというわけだ。

とこうか、ボリュームアップだかなんだか知らないが、種類が多くなるんつ

だつづーの。

集めても集めてもきりがないっての。

「はあ～」

そりや溜息も出るや。

まあ、過ぎたことを気にしたところでどうにもならん。

現在の問題は俺のこの寂しい財布だ。

だけど、短期のバイトなんて、そんな簡単に見つからんしなー。  
さて、どうしたもんかね。

「おー、今日も行くか？」

「また、儲けようつてか？いいね」

あん？ 儲けるだと？

二人の男子生徒が前を歩いていく。

どうやら、金が手に入るところに向かう感じ。

一応、見るだけ見てみるか。

そう思い、俺はその一人の後をつけていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

トンネルを抜けるとそこは雪国だった。

間違った。

後をついていくとそこは一つの教室だった。

全然違うじゃんとか、言つた。自覚あるから。俺も思ったから。

その教室では数人が集まって、何やらやつていいようだった。  
その固まりの1つに雀卓を囲んでいる集まりがあった。

ああ、理解したぞ。

さつきの儲けられるといつ話、そして今のこの教室の様子を照合するに、こ

こはいわゆる賭場、もしくはギャンブル場つてことか。

納得、納得。

よし、そうと分かれば、俺もここで一発大儲けするか。  
特に得意とかではないが、最初に田に入つたし、麻雀でもやることにじみつ。

「おー、俺も参加するだ

「げ、流川……！」

「む、いやせつか……」

雀卓には着物を着た少女“不死川心”と、2・Fの軍師“直江大和”が既に座っていた。

今から、大和は心を負かしてやろうと思っていたのだが、そんなことを海斗が知るはずもなく…といったが、知つても、気にしないだろうが。何の遠慮もなしに海斗も位置についた。

「注目をあげて、調子に乗つておる2・Fの山猿か。よい、ならば、こなたが一回あとめて、潰してやる」

「こや、俺はやめておくへ」

唐突にそつ言つて、大和は席を立つ。試合自体を放棄するようだ。

「なんじや、戦つ前から逃げるのか。んほほほ、高貴な此方に恐れをなした

か。山猿は猿らしく尻尾を巻いて、逃げるのがお似合になのじや」「どうとでも言つておけ。お前にそ偉そつとしてこそ、そのやつてきた山猿に負けたつするなよ?」

「此方に限つて、ありえない話じゃ」

(正直、流川とだけは戦つのは避けたい。こいつの思考だけは読めないから  
な。京がこいつの皿には注意しきつて言つてたし、いかさまを見抜かれる可  
能性がないってわけでもないからな。不死川に色々と言わせておくのは、多  
少むかつぐが、ここれは様子見に徹しよう。)

「まあ、俺は結果を見させてもらひつけ」

(こつなら、勝ちそうな気がするしな)

「ふーん、ほほお」

俺は麻雀牌を手にとりて、眺める。

なんか、今時つて良く出来てんだなー。

昔は紙とかで出来てたつてこいつし、今は凄いよな。  
よし、特に問題なしつと。

「おい、流川。お前は麻雀上手いんだよな?」

「まあ、役くらうこは一通り知つてゐつもりだが、やるのは初めてだ  
な。ドキ  
ドキワクワクだぜ。」

「はー? 待て待て、お前やつたことないのか?」

「いや、だからルールは知ってるって」

「お前、なんでよりこもよって、麻雀やんひとつ思つたんだよ…」

「田に入つたからとしか、言つみうがな」

「はあ～～

なんか凄い溜息つかれた。  
俺そんな悪いことしたか?

(流川海斗、ここつは本当に意味が分からん)

大和のそんな気持ちなど全く氣づきもしない海斗であつた。

37話 「金欠とはこれいかに」（後書き）

ありがとうございました。  
まあ、大切ですよね、お金。  
果たして海斗は稼げるのか。  
次回はそんな感じです。

38話 「駆け引き?」（前書き）

松風「ついにオラもアニメになるんだなー。」れじゃあ、オラのファンがまた増えちゃうぜー。楽しみだあ

海斗「てか、どうして静止画じゃね?」

松風「・・・」

### 38話 「駆け引き?」

「ここよほほほ、またか初心者が此方に挑んでくるとは。流石に猿の考える」

とは理解できんわ。大人しく今から負けを認めて、謝罪しておくれとをお薦めするがの。どうじゃ?此方は別に構わんぞ」

「んあー、いいからいいから。早くやろうぜ。ま、それだけ言っておいて、

初心者の俺に負けたら、面目丸つぶれだな。頑張れよ」

「ぐ、なんじやその態度はーならよい、徹底的に敗北を味あわせてやるのじ

や。今から後悔したところでもう遅いわ」

「おつけ。じゃ、早速やりたいんだけど、1人抜けちゃつたから、人数が足りてないんだよな。どうするか」

そうなのだ、あのストラップくれた奴が急遽、戦線離脱をしやがったために

雀卓を囲んでいるのは3人となつている。

これでは勝負できないことくらいはルールブックで予習済みだ。

「心配するな。俺が入る」

そう言つて出てきたのは丸坊主のハゲ。いや、意味が重複してゐるな。

ともかく、そのハゲ坊主がどうも代わりにするらしい。

「久しぶりだな、流川」

「え、俺？」

やばい、なんだ、相手は俺のこと知つてんのか？いや、言われてみれば、初対面ではない気がする。だが、こんな特徴的な頭だつたら、はつきりと覚えていゝよつた気がするんだけどな。

「おい、なんだその反応は。まさか、俺のこと覚えてないとかいうんじやないよな、流石にそれはないよね。一応、知り合いの範囲には入つてると言つていいレベルだと思つてたんだけど…？」

「いや、覚えてるつて。あれだろ、あのほら、この前コンビニに夜食買ひに行つたとき弁当コーナーの前にいた…」

「それもはや、他人だよね。知り合いつていうカテゴリには間違つてもはいら

ないよね、それは。」

「いや、落ち着け。冗談だつて。あれか、この前、テレビ番組かな  
んかで、

“Runner”歌つてたよな、うん」

「もつ、それ頭だけで判断してるだろ。だつて、上を向いてるもの。  
視線が  
全てを物語つているからね。もつ少しだけ、視野を下に広げてみよ  
うか。新  
しい世界が見えるから。サングラスなんてかけてないつてことを確  
認できる  
から！」

「はあああ

「何その大きな溜息。え? もしかして、そういうスタンスなの、俺  
が悪いこ  
としてる感じになつてるの? “溜息つきたいのは、こつちだよー”  
的な発言  
すら許されないのか?」

「…………チツ。

あー、もつあれだろ、教科書で見たことがあるわ、お前

「おいいいい。舌打ちとか、しつかり聞こえてるからね。何もつ、  
考えた  
くないなら、無理に言わなくていいからー。もつ真面目に考ふる気な  
いんだろ、

なんだ、教科書で見たことあるって。遂に断定されたよ。シッ！」

の余地す

らなくされたよ。ちなみに書くと、教科書載つてないからね。  
たぶん、

お前が見たのは鑑真とか、正岡子規だから。俺、関係ない！」

いや、俺だって、頑張ったんだ。

だけど、それでも思い出せなかつた。

そのうえ、ひねり出した案を否定されるんだぜ。

な？ ムカつくだろ？

「ハゲー、かつこわるー」

「あ？」

そうして、坊主の後ろに現れた少女。  
この白髪少女は確か…

「あー、タッグマッチのとき、戦つた女か」

「いえーい、だいせいかーい」

「おい、そこまで思い出したら、分かるだろ。頼むからー。」

「あー、そういう隣にこんなハゲいたな」

「やつとか。つたぐ、なんで俺のときは時間がかったのに、コキを見たら、一発で思い出すんだよ」

「え？ 言つていいの、それ」

「お願ひします。言わないでください」

だよな。

良かつた、早まらないで。  
結構、厳しい言葉を連ねる自信があつたからな。  
印象が薄いとか、影が薄いとか、髪が薄いとか、記憶に残らないとか……

流石に俺でもそんなことを真正面から言つのには罪悪感がある。  
少し楽しそうだなんて、全然これっぽっちも微塵も考えてないから、  
そこ、誤解のないよつこ。

「此方を放つて、何を馬鹿な見世物をしているのじや。ハゲもわざわざと席に着け。」

「だそりだ、ハゲ。わざわざと着席しろ」

「ハゲ〜」

「俺、立ち位置的には絶対被害者だと思つんだが……」

「ひしてメンバーは揃つた。

あの1人は最初からいた名前も知らない3年生だ。

「じゃ、始めますか

ジャラジャラジャラジャラ

麻雀の牌を面を立てて、混ぜる

「いやー、俺これ一回やつてみたかったんだよな」

「本当にやったことないのか…」

今はなんか全自动で混ぜて、並べてくれる自動卓なんてのもあるらしいが、

やはり、麻雀といえば、これだろ。こっちの方がなんか良いよな。

皆で勝負してるって、感じだしな。

これは勝負へのモチベーションも変わってくるってなものだ。ていうか、自動卓だつたら、勝負なんてやらんぞ、俺は。

「こんなもんでいいだろ。ほら、お前も並べてけ。」

「ふーん、山口じて並べてくのか」

「ああ、初めてだつたか。ま、やーゅーー」とだから。いやいやつと、  
やつて  
くれや」

「誰が並べるとかは決まってないのか?」

「あ? こんなもん、誰が並べたって一緒にだ。別に面倒くさいことも  
思わんが、  
好んで並べたがる奴なんかいねえよ。公式は当然違つだらうが、学  
校の賭場  
なんてこんなもんだぞ。」

「…ふーん」

やはり、実際にやってみないと分からなこととせ多ご。  
勉強になるな。

「ほれ、何をしておる。やつて始めるのじゃ

「いや、その前に賭け金の設定しないこと」

「お前、初心者なの、いきなり金儲けんのか」

「だつて、賭場だろ、山口。儲けのない勝負やつて何の意味があん  
だよ」

「ふん、泣いて後悔するのが容易に想像できるのがのう」

「どーするよ、初心者もいるし、レートはテンペングルーピングとくへか?」

「いや、ウーピングでいいわ」

瞬間、場の空気が凍つた。

「おま...一馬鹿か、それはいくら何でもないだろ」

「じじまで阿呆だと、舌葉もでんわ」

「別にいいだろ、じんなのちまちまやるのは性に合わねえんだよ。  
損をする

ときも、得をするとときも、どうせなら大きく派手にじょいぜ」

「またに畜勇と断つてふわわしい愚かねじや」

「まあ、お前がいいんなら、いこけどよ...」

「そつそつ、大人しく聞いといてくれよ。  
俺は手早く、金増やしたいんだからな。」

流川海斗。

「

こいつは天才か、馬鹿かの一択だな。  
ルール知っているとはいって、やつたことない奴がウーピンなんて、  
冒険にも

ほどがある。

賭けのことを少しなめてるんじゃないだろうか。

まあ、負ける恐ろしさを知らないからこそ、出来るとも思えるだろ  
う。

こいつもやうなのだろうか。それとも…

だが、この勝負どちらに転がるかと見る価値はありますだ。  
全く根拠はないが、これだけのマイナス要素が目の前に並んでいる  
のに、こ

いつからは勝つてしまうのではないかと感じさせられる。

それはタッグマッチでんな奇抜な作戦で優勝したからだろうか。  
キヤップとの勝負でありえないセンスを發揮して、無敵だと思われ  
た俺たち  
のリーダーを倒してしまったからだろうか。  
分からぬ、本当に分からない奴だよ。

まあ、お手並み拝見だ。

Side out

「じゃ、ゲームスタートといつか

38話 「駆け引き?」（後書き）

ありがとうございます。  
なんというか、準は使いやすいですね、重宝します。  
そして、実は麻雀にはそこまで詳しくないので、  
今回と次回、おかしいところがあつたらごめんなさい。  
役くらいは知ってるんですが、点数計算とかわけわからん（笑）  
次回の海斗はどんなことをして貰えるのか

39話 「いや、賭け引きだ」（前書き）

若干、自分の私生活の方が忙しく、毎日更新が相当危ないです。  
なんとか、毎日更新のまま、完走したいんですけど、  
微妙になってしましましたね。いやはや

39話 「いや、賭け引きだ

教室に牌を切る音だけが響く  
むー、なかなか揃わんもんだな

「コーコーチ」

「おーおー、マジかー

ん? もうコーコーチか、早いな  
まあいい、安全牌でやり過いしそうと決めてたしな。  
そんな感じで進み、流れるかと思ったのだが…

「ツモじゅ。リーチツモタンヤオドリへ

運のよろこことで。

ツモは流石に防げないからな。

だが、あがつてもう一つのは好都合だ。

俺は着物女の手牌の配置を観察し、記憶しておく。  
これは参考資料1だな。

「えじや、また混ぜるか

そして、牌を混ぜる作業に移る。

やはり、この作業は基本どうでもいいみたいだ。

皆、参加こそしているもの、牌の混ざる様子をじっと見ている奴なんて、

1人もいない。いや、俺を除いてな。

ちょっと試してみるか。

そう思い、俺はちょっとと明らかに自分のテリトリーから外れた相手に近い

牌の入れ替えを行つたりしてみた。

自分的にはわざとあからさまにやつたし、何か言われるだろうと思つたのだ

が、ほんとに誰も興味がないようだ。

この分なら、慎重にやれば、気づかれないかもな…。

そして、山を積む作業。

これも本来、一人一人が自分の目の前に山を積んでいくのだが、これまた、

全くやる気が見られない。

試しに他の奴の山を作るのを少し手伝つてみた。  
案の定、普通に受け入れて、お咎めはなかつた。

といふものの、これは若干怪しいな。

ハゲも最初“？”みたいな顔したし。

それに比べて、この着物女は全く警戒していない。

まるでやつてもらつのが当然のようにしている、さすが金持ち。  
完全にこいつをターゲットにしたほうがいいな。

幸いなことに位置は俺の左。

最後にサイコロだ。

これは流石に入れるものではないのだが……まあ、練習でもしどとか

「へえ、そのサイコロちょっと貸してくんね？」

「あ？ なんだだ。まだお前の親じやないだろ」

「いや、サイコロって振ったことねえから、どんな感じか興味あん  
だよ」

「お前、サイコロも振ったことないって、どういう人生歩んできた  
んだ……。

まあいいけどよ、振りたいならやつてみる」

「さんわゆ

俺はサイコロを受け取る。

重量、硬度、材質、全てを考慮したうえで軽く振つてみると。  
机とプラスチックがぶつかる音がする。

今ので“2”か。そして、こっちのは“5”と。  
なら、これで。

先の結果を踏まえて、再び振つてみると。  
よし、狙い通り。

サイコロの問題もクリアだな。

「へえ、サイコロって結構軽いんだな」

「そんな感想言つ奴、お前だけだよ」

そして、二局目。

またもや…

「リーチじや」

着物女がリーチをかける。  
そして、当然のように、

「ツモ。リーチツモイツツードラ」

2回連続あがりか。

あいつとしては、当然思い通りになつて、嬉しいことだらう。  
だが、これは俺にとつても良かつた。  
今の手牌、参考資料ーと合わせて、こいつの癖は分かつた。  
こいつは、ピンズ、ソーズ、マンズ、字牌の順で置いてるな。  
それが分かつただけで、収穫だ。

二局目

テンプレのように着物女がリーチしていくもんだと思つたのだが、

「リーチだ」

リーチしたのは、ハゲだった。

いや、だが少しおかしい。

この着物女、口角が少し上がっているし、目もなんかそわそわした  
感じがす

る。いや、本当にかすかなもんだが。  
だが、リーチは行わない。

これはそれほど良い役つてことか、下手すりや役満。  
俺が当たられるなんてことはないが、役満なんて出されて、得点を  
持つてい  
かれるのは非常に面倒くさい。  
ならば…

「あ、ロンだ。リーチ一発ピンフだ」

比較的弱いであらう、ハゲのロンをわざとへらつ方がいい。  
ハゲの手役なんて、牌の動きを見ていれば、大体分かる。

そして、局は進んでいく…

「高貴なるツモー！」

「んー、それロンだ。トイトイ役牌だな」

「ロン。タンヤオドラーだ」

遂にオーラスを迎えた。

俺は結局ハゲのあのロン以外、打撃を受けることはなく、しょぼい役でせこ

せこ稼いだ結果、初期点数より少し下くらいの点数に落ち着いていた。

順位的には三位か。

「ほほほ、やはり此方の圧倒的な勝利は決まっておったのじや。やはり、猿

は猿じやな、劣等種に変わりないわ、によほほほ

さて、やっと親が来たよ。

準備は万端だ、俺は集中力を高める。

結構な量がある麻雀牌。

だが、決して覚えられないほど多いわけではない。

要は難易度EVERY HARDの神経衰弱だとでも思えばいい。

そして、適当に混ぜている奴らの目を盗み、着々と進めていく。  
いじるのは、着物女のと俺のだけでいい。

そして、サイコロ。

机からの高さはこれで、このくらいの強さで振れば…

「自5だな」

全ては上手くいった。

表面上は今までやつてきた局となんら変わらない配牌。だが…

一ヤリ

自分の手牌を見て、思わずそうなってしまった。

こればかりは笑みが堪えられない。

あまりに上手くいきすぎだ。

これも散々相手を見下して、勝負をおざなりにしてくれたおかげだよ。

はあ、本当に油断つて最高だな。

「何を笑つておるのじや、遂に頭でも狂つたか

「天和 国士無双 ダブル役満だ」

「な、なにいいいい！？」

教室中が騒然となつた。

周りで観戦していた生徒たちは拍手や驚きの声を上げ、雀卓を囲む当事者たちは凍りついたような顔をしている。

「いやー、運が良かつたな。俺つて実は強運の持ち主なんじやね」

まあ、当然の」と、嘘なわけだが。

俺が狙って配置しただけのことと、サイロロで出す皿も狙えば、問題などなかつた。

「じゃ、金はあつたともいひや。次があれば、よろしくな

「へー、海じこのはじやー。」

「へー、魍魎の宴のための重要な資金が……」

よし、搾取完了したといひで、おれいがはすつか。

「お待ちください」

教室を出て行こうとするといひ、呼び止められた。  
そこには眼鏡をかけた優男が立っていた。

「先程の戦い、見させていただきましたが、お見事でした

「やつやじうむ、運だねじな。で、誰だお前？」

「ああ、すみません。私は葵冬馬と申します、海じこの准や哥キ

の友達で

すよ。学園内では結構有名だと皿負っていたのですがね」

そつ言つて、ふふつと笑う。

すると、周りの一年女子からきゃーと歓声が漏れる。

こんなのが女子にはもてるのか、分からんな。

まあ、そんなことをもてない奴が言つたところで負け惜しみにしか聞こえん

のだがな、はいはいお疲れさま。

確かに顔は美形?なのか、まあハーフっぽいけどな。  
人気があるんだと言われば、へえーとなりそつだが、..

「それで?その有名めがねが俺に何か用か?」

「おやおや、冷たい反応ですね。」

「暖かく迎える理由は?」にもなこと思つが。

「ふふ、その通りですね。びつです、私と勝負してみませんか、流川君」

長い休み時間はまだ続く。

39話 「いや、賭け引きだ」（後書き）

ありがとうございました。

もはや予想できた方も大半のこの展開。

やっぱり覚えちゃうという力技できましたね。

そして、登場してきました。

次回も続きます

## 40話 「天才と奇才」（前書き）

季節の変わり目といつのでしょつか。

自分で上着を羽織るなどして、温度調節をしつかり行わないと、簡単に風邪をひいてしまいます。

皆さんも気をつけてくださいね。

松風「馬や鹿だって、風邪はひくんだぜー。作者はその代表なのに、見事に体調崩したからなー」

## 40話 「天才と奇才」

「私と勝負してみませんか、流川君」

あー、もつもつきの麻雀で十分儲けたしな。

今更、はした金が入ったところで、あまり嬉しくないな。  
適当に流すか。

「俺もう結構儲けたから、1万円くらいじゃないとやる気になんね  
えんだ。」

悪いが、他をあたつてくれ」

「いいですよ。賭け金1万円で勝負しましょ！」

「ううう、素直に諦めてくれ……ん？」

「今、なんつった」

「ですから、勝負しましょ！」 1万円を賭けて。」

「え？お前もしかして、出せんの。そんな大金

「一応、医者の息子ですので。お金には困りませんよ」

はあー、今時の高校生はすげえな。

1万円を軽々出すのか、医者の息子は。

1万円って、お前あれだぞ、うい棒1000本買えるぞ。

1000本も欲しいと思つたことはないが。

ていつか、今日はラッキーすぎんだろ。

割とわっさの収入でも満足してたのに、このついで1万円追加か。

また、新しいにゃんこが増えるな…

いや、同じ過ちを繰り返してどうする。

ちょっと贅沢でもするか、ハーリンダッシュとか。

「何の勝負をするんだ？」

「そうですね、時間をかけても仕方ありませんし、これで決めませんか」

そう言つて、めがねが取り出したのは、一つの箱。

「トランプか？」

「そうです。ギャンブルで使われるといえば、カジノでもおなじみのこれで

しょう。向よりシンプルですし

「まあ、構わないが。なんだ、ポーカーか、ブラックジャックか？」

「ふふ、それもとも面白そうですが、生憎と時間もありません。

“ひつです、

「これは単純なお遊びで決めませんか？例えば、この一番上のカードを当てる

なんて、ひつでしょ！」

確かに単純だとは思‘うが…

「それって、完全な運じやねえのか」

「たまには、ひつこのも面白いと思いまして。それに運も実力のうちと言  
うくらいですから。それとも、ただの運に1万円を賭けるのは流石  
に気がひ  
けますか？」

「いや、逆にそれだけで1万円を手に入れられるんなひ、こんなに  
得な話も  
ないだろひ」

「ふつ、とても前向きな考え方ですね。分かつてゐるとは思います  
が、  
これは  
賭けなんですから、あなたも負けたら1万円を払つていただくんで  
すよ。そ  
れだけはくれぐれもお忘れにならないよひ。ひつよひつ。」

「心配すんな、大丈夫だ」

負けなければ、いいだけの話なんだからな。

## Side 大和

あーあー、受けちゃったよ。

麻雀で勝つたときは本当に驚いた。  
しかも、オーラスでダブル役満なんて、狙つてたとしか思えない、  
どうにも  
出来すぎたシナリオだ。

そう、そんな派手なゴールに辿り着くためには、険しく長い道を走  
つていか  
なければならない。  
当然、対戦相手も観客もその姿を見ているわけだ。  
いや、対戦相手は少し適当な感じもしていたが、俺はしっかりと観  
察してい

た、あいつの様子を。

だが、あいつは苦労して走る素振りなんて見せずに、ゴールに到着  
しゃがつ  
た。

それは自転車を使ったとか、近道をしたとかそんな次元じゃない。  
言つとすれば、瞬間移動。  
自分でも馬鹿げた例えだとは思うが、これが一番適切だ。  
コースを走ることもなく、歩いていると思つたら、気づいたら既に  
ゴールに  
いた、まさしくそんな感じ。

イカサマを使つていたわけでもない。

いや、違うな。

あんな手は小細工をしないと、絶対に来るわけがない。  
つまり、俺が見抜けなかつただけのこと。

目を離さなかつたにも関わらずだ。

つまり、こいつは狙つて、完璧な勝利を収めやがつた。  
なーにが、“運が良かつた”なんだか。

見抜けなかつたこちらは文句を言つてしまひ出来ないな。

今更ながら、キヤップが負けたというのも、頷ける。

流川海斗、キヤップ以上に異常な男だ。

優れているとは少し違う、“奇才”つてどこか。

だが、そこに絡んできたのは“天才”。

テストで常に1位を取り続ける男、葵冬馬。

流石に一筋縄でいかないことは分かりきつている。

ていうか、普通相手が提案してきたゲームをためらいなくOKする  
か？

どう考へても、マジックカードとか使つてるだら。  
変なところでぬけてるんだよな。

まあ、始まるからには見させてもらうか。

「一応、カードが揃つてるか見せてくれ」

「えへへ、確認してください」

カードを見る。

ちゃんとジヨーカーを抜いた52枚が入っていた。

「問題ないな」

「はい、もしごまつたり当てなくとも、数字が近いほうの勝ちとします。」

AとBはつながっているところだ

「構わない」

「では、始めましょうか」

「ああ」

「うわ、本当に受けたやつだよ」

「ほんと、トーマ君に勝てるわけないのに」

周りからみんな声が聞こえてくる。

やれやれ、一発かましつか。

「おー、めがね」

「はい? なんでしょう?」

「先に言つておぐが、俺はカードに触れる」とカードと対話することがで  
きる。降参するなり今の「うちだぜ」

「ふふつ、意外にロマンチックな」とを言つのですね。」

「信じてないのか? 全部当たまつかもしれないぞ」

「どうぞ、触つてください。表を見なれば、私は何も言いません  
よ。存分  
にカードと会話をなさつてください」

「は、後悔するなよ」

「あいつ向言つてんの」

「頭おかしいんじやない?」

「おこ、ひどい言われようだな。

別にファンの対戦相手のアンチになる必要はないだろ。

大人しく好きな奴の応援だけしてろっての。

そういうしてる間に相手がシャッフルを始めた。  
そして、カードの束を俺に差し出し、

「どうぞ、シャッフルしてください」

俺も何回か適当に切り、机に置く

「では、私は… 4あたりにでも」

「さてと、俺は」

そう言って、カードの上に手を置く。

「分かった。俺も4だな」

「流川君、それでは勝負になりますんよ」

「でも、対話の結果、4なわけだしな」

めがねがめぐると、勿論4だった。

「次から回しものは駄目にしましょうか」

「それなら、俺から先にやられせりが」

「それは不公平でしょう」

「じゃあ、じゃんけんで順番でも決めるか?」

「いえ、遠慮しておきます」

くそ、じゃんけんだつたら、絶対勝てたのに。  
警戒心の強い奴だ。

「まあ、とつあえずやります」

「はあ、そうですね」

だが、言つまでもなく結果は同じ。

二人ともフを宣言し、勿論正解もフだった。

「これじゃあ、埒が明きませんね」

「なら、上から一枚目のカードを並べるついでに並べるのはどうだ?」

「な...」

(「）の発言はやはり、マジックカードだということを見抜かれているのでしょ  
うか。分かりにくくいものを使ったつもりなんですが。そのうえで完全な運の勝負に持つていいくとこいつわけですか。」（）で拒否するのも不自然ですし……）

「いいじょう、それでやります」

そして、シャッフルされたカードが机の上に置かれる。

（今、一番上にあるカードはく。ならび、一番遠い6あたりでいいでしょうかね）

「私は6にします」

「ふーん、なら俺は……」

そう言って、一番上のカードをざかす。

「何をしているんですか？カードを動かすのは……」

「あ？ だって、上のをざかさないと、一枚目にさわれないだろ」

「だからと言ひて……」

「お前言つたよな。“表を見なければ、何も言わない”って。俺は触ってる  
だけで表は見てないぜ」

「なー?」

「口出しされるのは、おかしいと想つが

(…はめられました。ここで私が無理に不正だと押し通せば、それは裏を見たら、何の数字か判別できる」と、つまづマジックカードだと云ふことを自分で言つたつなもの。それを見越した上での作戦ですか。確かに彼はただ触るだけ、カードと対話をするだけ、そういうことになつてているのですから。おかしいところは何もないですね。)

「じゃあ、俺はっ這一

冬馬はめぐる前から、分かつていて。  
一枚目の裏に描かれた模様はしっかりと表していた。

「だな。俺の勝ちだ」

## キーンパーンカーンパーン

ちゅうじ試合終了のゴングのように休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。

机の上の2万円を取つて、海斗は教室を出て行つた。

そんななかで冬馬は笑うしかなかつた。

「ふふふ、海斗君、面白い人です」

## 40話 「天才と奇才」（後書き）

ありがとうございました

前回は完全に記憶力と田の良さで戦つていましたが、  
今回は言葉遊びって感じですかね。

頭がいいだけが勝利条件じゃないんですね。

#### 41話 「世のため、人のため、自分のため」（前書き）

いやあ、今日は日常編、結構長いですね  
いつ本編がすすむんでしょうか。  
気長にお待ちください。

## 41話 「世のため、人のため、自分のため」

Side 大和

「嘘、トーマ君が負けたの、あんな奴に」

「で、でも、ずるじやないの？あれって」

教室内は騒然となっていた。

予鈴が鳴っているにも関わらず、誰もすぐに動こうとはしなかった。

それもそうだ。

学年一位、医者の息子、ヒレガンテクアットロの一角、そんな才色兼備であ

り、天才と呼ばれる男が負けるなんて誰が想像したろう。葵冬馬が倒されるというのは、それだけのことだった。

俺はファンのように葵冬馬の勝利を信じちゃいなかつたが、それでもやはり驚きを隠せない。

まるで子どもの屁理屈のようなもので、そのくせ一切の反論の隙などはなくして、見事に丸めこんでしまった。口が上手いにもほどがある。

流川海斗、本当にほかれない男だ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時は放課後、とある空き教室にて。  
数人の男女が集まっていた。

「さーて、今日の依頼はなんだろうかねえ」

「今回も俺が競り落とさせてもらひやせ」

その中には井上準と風間翔一の姿もあった。

そこへ二人の教師が入つてくる。

「今日もよく集まっているようでおじやるの」

「では、早速、今日の頼み」とを発表する三

綾小路麻呂とルー・イーだ。

そう、ここは教師が有志の生徒に舞い込んだ依頼を消化させる、言うなれば、

依頼の競り場のようなものである。

当然、学校側の立場もあるので、報酬は現金ではなく、食券となつてている。

「今日の依頼はストーカー退治だネ」

「頼み人が実際に来ているでおじやる」

「なんでも事情を自分で説明したいってことだつたからネ」

ルーがせつし言つと、ドアから女生徒が一人入つてきた。

「ここにちは、1年C組の大和田伊予です。実は、私の元にこんな手紙がきてまして…」

「どれ、麻呂が読み上げるでおじやる」

ゴホンと咳払いをする

「伊予、お前のことiga好きで好きで好きで好きでたまらない。遠くから思つていてる

だけでも幸せだつたけど、もうこの溢れる気持ちを抑えられないん

だ。だが

ら、毎日君のグッズを押借して、なめたりして思いをぶつけているよ。」  
「」

なら、たとえ話せなくとも、僕らの気持ちは一つだよね。伊予も寂しくない

だろう?僕の愛が伝わっていることを願っています」

「もう、それは警察に届け出てもいいレベルの気持ち悪さだな」

準のツッコミも、もつともである。

「グッズというのは、私物のことだネ」

「お願いです、ストーカーを捕まえてやめさせてください。」

「頼み料は上食券50枚でス」

「奮発するじゃねーか、やつてやるぜー 50枚だー。」

「49枚にて候」

「48枚!」

競りが始まり、その枚数はだんだんと減つていぐ。

「38枚!」

「なら、俺は27枚だ！」

「27枚。他にいな力?なければ風間に落札!」

「やれやれ、またお前が持つていくのかよ」

準もいつものことと、半ばあきらめ気味の様子だ。

そう、百代が暴れたいために翔一は報酬が少なめでも、いつも仕事を持つていくのである。

「20枚だ」

誰もが決まったと思った瞬間、声が響いた。

それはドアの方向。

そこに流川海斗、その男が立っていた。

「流川先輩!？」

「なんだイ?」

「だから、その依頼、20枚で受けたって言つてんだ

「な、流川! お前がなんで、こんなところ

翔一がいきなりの登場に驚きつつ、依頼を持つてかれそなため、理由を問いただす。

「いや、今までは一度も海斗がこの場に顔を見せる」とはなかつたのだ。

疑問を持つのは当然であった。

「いや、なんかここ来たら、食券もらえるとか言われたから、来てみただけだ。どうせなら、今日一気に儲けようと思つてな」

「お前が自分から人のために働くってのか？」

「いや、俺も最初はただで食券がもらえると思ってきたんだがな」

「ならどうして、受ける？」

「別に人のためじゃねえ。今の話を聞いて、ストーカーを俺が個人的に殴り

たくなつただけだ。誰のためでもない自分のために働くってだけさ。それで

食券まで手に入るんだから、こんな得なことはねえだろ」

「20枚より下はない力！」

「そこまで言うんだつたら、これはお前に託すぜ」

「おひ、任せとナ」

「流川先輩……」

「さて、早速この手紙を送りつけたストーカーを特定しなきゃなんないわけだが、最初に言つておく」ことがある

「は、  
は」

「俺じゃないからな」

「え？ はい、それは分かつてますけど」

「いや、一応な。ほら、推理小説とかでよくあるじゃんか。事件解決のため俺なんて

「大丈夫です、流川先輩はそんなことをするような人に見えませんし、別に

「ん？」

「い、いえ、何でもないです。だいじょぶです」

「やうか？まあ、いいが」

そして、また作戦を考える。

犯人を手っ取り早く捕まえる方法を。

「あ、あの、流川先輩。」

「あ、なんだ？」

「ありがとうございます」

「いきなりどうした？まだ、何も解決していないぞ。それに俺は然るべき報酬

をもらうんだから、お礼は必要ないと思うが」

「いえ、そうじゃなくてですね…。流川先輩、前、私のこと不良の人たちか

ら助けてくれたの覚えてますか？」

「あー…」

そういえば、この子見覚えがあると思ったら、動物ビスケットのと

きの子だ

つたな。

そういうえば、それで知らない子からファンレターも「うつたりしたな。

「私、あのときすっごく怖くて、でも流川先輩が助けてくれて、嬉しくって。

だけど、私あのとき、お礼も言えませんでした。先輩が来てくれなかつたら、

どうなつてたかも分かんなこいつに、黙つちやつて、おまけに先輩が

らビスケットだけもらつて、何も伝えられませんでした。私のあのときのこ

とずつと想えてました。先輩にはすっごく感謝してるんです。だから、今更ですけど、本当にあつがとつれこます」

なんか、めちゃくちゃ感謝されてしまった。

でも、怖かったんだから、あれはしょりがないと思つんだが。

「別に気にすんな。あれはただ、あいつらが俺の視界に入つて、目障りだつ

たから、掃除したまでだ。結局、あれも今回と同じ、自分のために行動して

ただけつついひとよ。だから、そんな悪いことしたみたいな顔するな

そう言つて、軽くほんと頭に手をやる。

海斗としては特に意味のない動物好き故の無意識の行動だったのだが、やら

れた方は意識せずにはいられないものだつた。

伊予は突然の幸せに顔を赤くしながらも、

「で、でも、私が嬉しかったのは本当ですから。お礼は言わせてください。

助けてくれてありがとうございました。」

そつ言つた少女は、ずっと胸に引っかかっていたことが取れ、すつきりとした表情をしていた。

#### 41話 「世のため、人のため、自分のため」（後書き）

ありがとうございました

今まで海斗の並外れた実力にスポットをあててきましたが  
今回は海斗の本来の優しさの部分を強調してみました。

人気があるのも頷けるといった感じですね

## 42話 「ひねくれた愛」（前書き）

松風「オラの担当する前書き」「コーナーの名前が決まつたぜえー  
いえー、ドンドン、パフパフー！

その名も“言おう・M・心”だぜーーー！

どうだあー、勇往邁進 ゆおうまいしん、みたいなー  
センスに溢れてんだるー、ていうか、名前紹介で  
時間がないから、今回はこれでー、ぱいぱーいきーん

## 42話 「ひねくれた愛」

「よし、早速犯人を捕まえるぞ」

「え、犯人分かつなんですか?」

「いや、犯人が誰かはこの際問題じゃない。探偵じゃないんだから、証拠を揃えて、問い合わせるなんてことはしなくていいんだ。」

「といいますと?..」

「手紙を読むに相手はグッズ、つまりは私物に手を出しているんだ。だが、盗られているものはない。だから、私物をマークして、現行犯で捕まえちまえばいいのさ」

「ああ、でもどうやって、マークするんですか?監視カメラとか?」

「まあ、とにかく全ての自分の私物の場所を教えてくれ」

「はい、分かりました!」

俺たちは実際に私物のある場所をまわることにした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「まず、ここが1年C組、私の教室です。置いてあるのは、体操着とかリーフ

ーダーとか、実技教科で使うものですかね。」

「ふむ、席はどこだ」

「あ、あそこが私の席です」

「オーケーだ、次にこいつ

「[...]」は1年生の下駄箱です。当然、私の靴や上履きがあるんですね  
が、いつ  
も上履きは帰る時に持ち帰ります。」

「出席番号からして、この靴箱で間違いないな?」

「あ、はい。私のはそこです」

「了解した、次の場所へ案内してくれ」

「[...]」は自転車置き場です。私は自転車通学なので、毎日利用させ

てもうつ  
てます

「どの自転車だ」

「それで詳しくですか？ 私のはこれですけど…」

「まあ、必要なことだからな。当然、鍵はかけているよな?」

「はい、勿論です」

「これで全部か」

「はい、私の主な私物の場所はもう回ったと思います」

「じゃあ、ついてこい」

俺たちは全ての場所を確認して、ある場所に向かつた。

「あの…、流川先輩」

「ん?なんだ」

「どうして私は、流川先輩の教室にいるんでしょうか」

そう、ここは2・F。

俺たちしか、教室にはいらず、適当な椅子に腰掛けているというのが、現状だ。

「待機するところがここへいらっしゃと思いつかなかつた」

「いや、私物の場所を見張つてなくていいんですか？」

「だつて、俺らがいたら、犯人が現れないだろ」

「でも、監視カメラとか、仕掛けてる様子もなかつたし…」

「まあ、心配するな。確実に捕まえてやるから」

その言葉を最後に俺は意識を集中する。

探るのは3ヶ所。

1-C教室、下駄箱、駐輪場。

だが、調べるのはそこ一帯ではなく、完全なポイント。  
被害者の席、靴箱、自転車、そこだけに集中する。

それらの場所との距離が0になつた奴。  
つまりは物に触れた奴を探し当てる。

友達でも触れそうなものだが、こんな時間に本人の断りもなく、触

つていた

ら、怪しいことに何変わりない。

人気が少ないこの時間は犯人にとっては、狙い目だろう。実際、俺たちが回ったときも、数人とすれ違ったのみだった。十中八九、来るだろう。

その時であった。

ん？自転車に近づいてくる奴がいるな。

見回ったときに、少女の自転車は他から離して置いておいた。だから、隣に他の奴の自転車があるなんてことはない。

それなのに、その気配は迷いなく、そちらに向かっている。

これはかかつたか？

そう思考している間にも、その気配が止まる」とはない。

黒と見ていいだうな。

「おい」

「は、はい！」

いきなり、話しかけたから驚いているのか。

だが、今はそんなことを確認している場合ではない。

「今から60秒経つたら、駐輪場に下りてこご」

「犯人が分かつたんですか！？」

「いいから、言われた通りにしろ。俺は先に行ってるから。 60秒  
経つたら  
来いよ」

そして、俺は教室を飛び出した。

階段を使うのも面倒なので、廊下の窓から飛び降りる。

着地と同時に駆輪場の方向へ走った。

「フヒツ、フヒヒ、しめしめ、この時間だから誰もいないぞ！」

自転車置き場には明らかに拳銃のおかしい男が徘徊していた。

それはもう、何もしていなくても、通報されそうな気持ち悪さであった。

「伊予りやんの自転車ねつと。ああ、ウエーバー、これこれ！」

その男が一台の自転車の前で立ち止まる。

「！」のサドルに、あの可愛いお尻が！大事な部分が！ハアハア。フ  
ヒ、たま  
らないなあ、クンクンクン！」

カシャツ

「え！？誰だあ」

「今時のケータイって便利なんだな。ほら、証拠写真がこんなにバ  
ッチリ！」

「人！？見つかった、逃げねーと！」

「だから、証拠があるつづーに」

「な、速……う」

俺は逃げようとするストーカーの進行方向に回り込み、足払いですぐに倒す。

その倒れている途中の男の襟首を掴み、逆に引っ張ることで首をしめる。

当然、言葉は最後まで出なかつた。

これで逃げる気力はなくなるだろ。

「お前が犯人で間違いないな」

「違うんです。愛が溢れて、どうしようもなかつたんです。伊予ちゃんと幸せになりたい一心で……」

「本人は迷惑だつて言つてゐるから、俺がいるんだよ」

「そ、そんなはずはない！きっと伊予ちゃんだつて、僕のことを……」

「これだから、ストーカーは……。まあいい、お前はどうあがこいつが職員室で

みつちりじりかれるだらうからな

「しょ、職員室だけは勘弁してください。僕もただ愛の被害者に過ぎないんです。恋がエスカレートしただけなんです、しょうがないでしき？」

「自分は恋をしただけだから、悪くないってか？」

「そ、そうですよ。恋愛は個人の自由でしょ」

「ふーん……」

そこまで一回、言葉を区切る。

「ハハハハ、面白いなー、お前。」

「わ、分かつてくれましたか」

「人と真つ直ぐ向き合えない奴に自由に恋愛する資格なんかあるわけねえだろ」

「ひい……！」

笑っていた表情を変え、冷たく言い放った。  
相手も相当びびっているみたいだ。

そうだよな。

“人と真つ直ぐ向き合えない奴に恋愛する資格なんてない”よな…。

そこへ伊予がようやく降りてきた。

「流川先輩、その人が犯人ですか」

「おう、現行犯で捕まえた。おい、ストーカー、お前なんか言いたいことあるんじゃなかつたのか」

「そうだよ、伊予ちゃん！」いつに僕らは相思相愛なんだって、邪

魔なんて

されたくないんだって、言つてやつてよー。」

「『めんなさい、私、好きな人いますし。こんな迷惑な行為、もう二度としないでください！』

「う、嘘だよね、伊予ちゃん…。僕らは結ばれる運命じゃないかつ…今に

なつて、僕を裏切るのかい。そんなことしたら、復讐して…」

ガツ

上から、ストーカーの首をおさえつけた。

ギリギリと程よく力を入れる。

「なーんか、お前変なこと言おつとしなかった? あんま、しょーもないこと

ばっか言つてると、喉潰すけど、ビツする?」

「ひー、すみません。前回撤回します。もう一度としません

「よし、なら職員室行こつか。いいよな?」

「はい、あとは先生たちに任せます」

とつあえず、依頼達成だな。

……………

## 職員室からの帰り道

「今回もあつがとうございました」

「俺のせいで、こんなに食券もらつたひ、歸つてみなこせば

「べすひ」

報酬をもらつた俺と悩みが解決した少女、一人で歩いていた。  
決して氣まずいなんてことはないのだが……

「あー……えつとな

「はー?なんですか

「あの」とせ誰にも言わねえから

「あの」とへ

「ほら、好きな人がいるとか、どうこうだよ。当然とはいえ、聞い  
ちました

しな。あ、それとも、ストーカーを諦めさせるための嘘だったか？」

「あーあれですか。ふふつ。本当にいますよ、好きな人は…」

「そうか…、まあ忘れるのは流石に無理だが、口外はしないから安  
心しり」

（…私の隣にですけどね。）

## 42話 「ひねくれた愛」（後書き）

ありがとうございました

見事、後輩を救うことに成功しましたね。

これで少しでも海斗の優しさを知つてくれると嬉しいです。

そして、相変わらずのモテ具合。

まあ、こんなに優しい先輩がいたら、仕方ないですわ。

#### 43話 「海斗の秘密」（前書き）

これから一週間とちよつとの間、  
私生活の方がとても忙しくなるので、  
申し訳ありませんが、感想などに返信が出来ないと 思います。  
ただ、毎日更新は出来るだけするのでよろしくお願ひします。  
だけど、一応感想は見ているので、返せないのに言うのもなんですが  
書いていただけたら嬉しいです。（極稀に返すかもされません）

## 43話 「海斗の秘密」

今日の目覚めはよひし。

昨日、ストレスを発散できたおかげだろうな。

やはり、悪い奴相手といつのは、一番やりやすい。

そりやあ、勿論、相手が悪い方が、罪悪感がないといつのは、あるのかもし

れないが、俺の言っている点はナリではない。

ああいう奴らは基本、世間から信用されてない。

自分の行いで、わざわざ周りからの評判を下げているからだ。

だから、そんな奴らが誰に何を言つたところで聞く耳はもたれない。

発言に効力がないとでも、言つた方が分かり易いか？

故に“自分がこんなことをされた”、“あいつは容赦なく、あんなことをし

てくる”と言つたところで、信じるものなどいないのだ。

所詮はふざけた野郎の戯言だと、無視されるだけ。

これも田頃の行いつてやつなんだろーな。

そのおかげで、俺は特に気にすることなく、力を振るえる。

そんなわけですつきりした俺は、いつも以上に早く起きてしまった。いつもより、時間に余裕があるので、川辺で休憩中だ。

なんか早朝の川って、独特な雰囲気を持つてるよな。

こつじて、改めて見ると、心が安らぐぜ。

そう、俺はそのとき、あまりにも安らぎすぎていた。

だから、近づいてくる者に気がついたのが遅れてしまった。

「あの……」

S.i.d.e 一子

今日も今日とて、朝から修行だ。

ん~、やっぱり朝の風を受けながら、走るのは気持ちがいいわ。

しゃーしゃーひって、すーとしゃー

そう、いつもと変わらない朝。

いつもと変わらないトレーニングメニューになして、汗をかく朝。

でも、その日はいつもとは違うことがあった。

川辺に座っている人影があった。

別に人がいることは珍しくない。

知らないおじいちゃんが犬を連れて散歩してたりするのは、よくあることだ。

だけど、違う。

グレーのパーカーを着ている、その姿。

アタシはその姿をよく知っていた。

アタシはほぼ毎日、この川沿いでひたすら、修行をしている。

そりゃ、ファミリーの仲間と一緒に登校したり、天気が悪いときは別だけね、

それでも、ほとんど毎日。

そして、そのグレーのパークーの人も毎朝見かけた。

アタシが修行をしていると、何回か、川沿いを通りてているのを見かける。

たぶん、この辺をコースを決めて、走っているんだと思う。  
アタシが来て、修行を始める前に通ることもあった。  
もしかしたら、アタシより、もっと早くから始めるのかもしれませんい。

アタシは同じ修行仲間として、興味を持った。

フードを深くかぶっていて、顔は見えないんだけど、男の人で間違いない氣がする。

それでタイミングを見て、何度か話しかけようとしたんだけど。  
その人はアタシが近づこうとすると、離れていくてしまい、その場所からいなくなってしまう。

偶然とかではなく、近づくと決まってそうなのだ。

一回、アタシもムキになつて、全力で追いかけたことがあった。  
でも、その人の足はとつても速くて、追いつけるものじゃなかつた。  
そのうえ、持久力だつてあるから、その差は離れる一方で。  
結局、アタシがそのあと、何度も挑んでも、結果が変わることはなかつた。

アタシも相当修行して、足には自信があつたんだけど、考えてみれ

ば、この

人もアタシと同じかそれ以上の修行をしてるのよね。  
やっぱり、修行ばわーって、恐ろしいわ。

そんなことを考えたら、もつと話してみたくなって、今度は何度も  
通ること

を利用して、待ち伏せ作戦をやってみた。

だけど、アタシが待ち伏せをしてるときに限って、まるでアタシ  
のいる位

置が分かっているかのように、上手く迂回していく。

気配はアタシなりに隠しているはずなのに……。

悔しいわ。

そんなんで、良い友達になれそうだと思いつつも、結局一度も話す  
機会なん  
かは訪れなかつた。

だけど、今、目の前に座つているのはまさにその人。  
休んでいるところなんて、一度も見たことなかつたけど、今は完全  
に川を見

て、ぼーっとしていふようだ。

なんか、意外なイメージだ。

つて、そんなこと考へてる場合じゃなかつたわね。

これはまたとないチャンスだわ。

そう思つたら、話かけるのにためらひは無かつた。

「あの……」

まずい、完全に逃げるタイミングを見失った。  
油断しそぎだら、俺。

よつによつて、一矢に絡まれてしまふなんて、一生の不覚。

いやいや、まずは落着け、俺。  
焦つても、何も始まらないぜ。

落ち着いて偶数を数えるんだ。（既に落ち着けていない）  
2、4、6、8、10…あれ、なんか難易度低くね？  
ていうか、俺、0つて言つたっけ、なんか言つてない気がする。  
あ、じやあ最初から……じやなくて！

とにかく、黙つてるのはもつと怪しい。  
適当に言葉を返そつ。

俺はフードをよつ深くかぶり、答えることにした。

「な、なんだ？」

「あの、こつもこりひらひ、走つてしますよねー。」

「あ、ああ、そつかもしれないな」

「私、何度か話しかけよつとしたんですけど、すれ違つちがつて。」

そりや そうだよ。

だつて、俺全力で逃げたもの。

努力なんて、人に見られた時点で終わりなんだよ。  
相手の油断を引き出せなくなるしな。

「そうだったのか、気づかなかつたなー…」

「ていうか、凄く足速いですよね。アタシ、全然追いつけなくて。  
いつも、  
どんな練習をしてるんですか?」

そんなに瞳をキラキラさせるな。

直視できんだろーが。

いや、それじゃなくても、ばれないために直視なんかできないが。

「えーと、それは…」

「? あの、アタシたちつて、どつかで話したことありますか? な  
んか、よ  
く聞いたことのある声のようにな…」

「ああー、そうだー俺の修行方法はね、まず空を見るんだー」

「え? 空」

バツと上を指差す。

それに従い、一子が空を見上げる。

「で、どうするんですか？」

返事が返ってくるのが遅いと思い、顔を戻すと…  
そこには、もう一子一人しか立っていなかつた。

「あれ、いなくなつてる…」

周りには人影すら見えないどころか、今までそこに人がいたのかと疑う

ほど、気配まで綺麗さっぱり感じられなくなつていた。

一方、その頃…

「本格的に危なかつた」

危機一髪で思わず、本氣で逃げてしまつた海斗がいた。

朝こそ大変だったが、今日の海斗は平和だった。  
と、そこへ…

「海斗」、なんかルー師範代が呼んでる

「あ？」

突然の来訪者があつた。

#### 43話 「海斗の秘密」（後書き）

ありがとうございました

この話を現段階で出そうか結構迷つたんですが、  
いつまでも謎ばつかなんで、少しだけ秘密を書いてみました  
一子の修行する姿を毎日見かけたとかいうあれも  
毎朝海斗もいたからこそ、言えていたことだったんですね

## 44話 「高級計画」（前書き）

遅くなりました。

変わらず感想を書いてくれている方はありがとうございます。  
絶対に一週間ちょっとしたら、返信するのですみません。

## 44話 「高級計画」

「おお、来たネ」

「俺に何か用か?」

「実はまた依頼が入つてきてネ。君に持つてきたといつわけだ」

「ちょっと待て。確かに昨日は受けましたが、なんで今日も俺のところに持つ

てくる?他の奴にまわせばいいだろ」

「そうだ、昨日は乗りに乗つっていた流れで、仕事をこなしたが、別に食券も若干少ないとはいえ、少しの間はこれでやうやく出来るだらうし、これ以上、

進んでやる必要はあまりない。

それこそ、昨日競り落とせなかつた奴にでもやうやくしてやればいいだる。

「それがね、今回の依頼は名指しなんだヨ。流川海斗、君にネ

そう言って、指を指される。

一瞬だけ、思考が遅れる。

えーと、つまづきついことだ。

「は？そんな依頼があんのか、俺限定つことだよな」

「そうだネ。初めてのパターンではあるけれど、別に禁止もしていないし、

今まで前例がなかつたつてだけだヨ。さて、どうすル？」

本当なら、ここで依頼内容くらには聞くもんなんだろうが…。  
今更、ちまちま稼いでも、しゃーないしな。

「いや、別にいい。そいつには悪いがな」

「そうカ。非常に残念だネ。上食券100枚という優良物件だったんだけど  
ね。仕方が無い、依頼人には断る旨を伝えておくヨ」

「おい、今なんつた、100枚つて言つたか？」

「言つたヨ。今回、依頼料は上食券100枚の大奮発

「100つて、百鬼夜行のあの100か？」

「百物語のあの100だヨ」

「百代の過客の、あの100か！？」

「川神百代の、あの100だネ」

いや、そいつは知らんが……。

ともかく、そんなビッグな報酬なら、話は別だ。

100枚って、一体何日もつんだよ。

いや待て、それだけあつたら、他の奴に売つてもいいな。

「よし、ひとつあえて話を聞くつか」

そして、昼休み。

俺は弓道場に来ていた。

「お前が頼み人つてことでいいのか？」

「はい、私が流川先輩に直接依頼させていただけだ、1-S所属の

七二二九

「S組か。エリートクラスは奮発するな」

「どうしても先輩に引き受けさせていただきたかったのですから」

「ふーん、それにしても、弓術を見せてほしいだなんてな。普通、弓道部員が頼むもんなのかね。俺、現役でもなんでもないんだけど」

「風間先輩との決闘のときに流川先輩の腕は見ました。あんな状況の中での一発での的の真ん中を捉えるなんて、見事でした」

「いや、でも俺の前にやった女子も、一発で当てるだぞ」

「あー……、流川先輩は知らないかもしねないですが、椎名先輩は弓矢やってますから。しかも、その腕はかなりのものです」

「なら、尚更そいつに教えてもらつた方がいい気もするがな」

「それじゃあ、意味が……ゲフングフン。じゃなくて、それは無理なんです  
よ。確かに椎名先輩は『弓道部に所属していますが、幽霊部員気味で、  
とても教われるような状況じゃないんですよ』

「はあ。まあ、100枚もくれるっていいうなら、文句無く、やるけどな」

「やつですかー！ありがとうござります」

さあさわわ やあさわわ

「それでさつきから思つてたんだが…」

「な、なんでしょ'つか。」

「なんかギャラリーが多すぎないか」

「いやー、流川先輩が見れるなんて噂でも流れたんでしょ'つかねー。  
検討も  
つきませんねー。」

「まあ、いいけどさ」

Side 小杉

なんとか作戦の第一段階は成功したわ。  
プレミアムに上食券100枚も用意したんだから、釣れてくれないと困るん  
だけど。

ともあれ、順調にここまで運ぶことが出来たわ。  
1年生全体に噂を流し、「道場に集めるのも完璧。  
そして、この男がこの大勢の前で弓矢を射るのだ。

そんなことをして、成功されたら、もっと人気を上げる」とになる  
だろう。  
だけど、そんなことは起こりえない。

この男は自分を応援してる数多くのファンの前で失敗をするのだ。

そして、恥を晒した結果、1年生の話題から消えていく。

あの先日の戦いを見る限り、この男、弓道に関しては素人だ。

“小さい頃にやつたことある”とかなんとか、言つていたが、あれはただの

ハツタリだらう。

どんなに弓道を極めている人でも、的も見ずに矢を放つなんて、邪道もいいところね。

それだけならまだしも、弓を構える前から、目をつぶっているなんていうのは、どう考へてもおかしい。

つまり、あの時当たったのは偶然か勘でしかない。

もう一度やれ、と言われば、成功は出来ないだらう。

それでも、成功する可能性がないわけではない。

あの時のことを感覚的に覚えているなんてことがあつては、たまらない。

チャンスは一度だけだから。

だから、念には念をと、矢に細工をしておいた。

あの時、使つた矢とは、材質も重量も長さも、何もかもが違う。

そのうえ、削つたりして、重心をめちゃくちゃにしておいた。

自分で言つのもなんだが、矢と言えるのかすら怪しい、まさに形だけのもの

となつてゐる。

この矢を使って、素人が的の真ん中に当たられるわけがない。

というか、弓道の上手い人でも無理な気がするわ。

こいつの失敗は確定したも同然。

そして、その後に私が普通の矢を使って、華麗に真ん中を打ち抜く。それを見ていた1年生は当然、この男より私の方が凄いと理解する。話題の中心は流川海斗から、そのまま私に。

完璧なシナリオね。

うーん、我ながらプレミアムな作戦だわ。

早くその時が来ないかしら。

S i d e o u t

「じゃ、とりあえずやつますか

俺はそちら辺の弓矢を使おうとする。

「あ、先輩！」の弓矢を使ってください！

「ん、別にいいけど、どれ使つても同じだろ」

「それが貸し出し用の物なんです」

「へいへい

ちやつちやと済ませようと弓矢を構えるが…

ん?なんかこの矢おかしくないか。  
持った感覚が違うような気が…。  
気のせいいか?

「おー、この弓矢…」

「さあ!流川先輩、打ち抜いちゃってください!」

「いや、だか…」

「どうれ、見せてください!その技を…」

なんか、勝手に盛り上がりついていて、聞ける状態じゃないな。  
しうつがない、これでやるしかなせそうだ。

的をしつかりと見据える。  
あの時の感覚を思い出す。  
そして、射抜く!

次の瞬間、

「ああああああああああああ

矢はしつかりと箭の中心を捉えていた。

「なー~どひじて」

少し矢の質が、川神戦役のときと異なったが、基本一度その経験があれば、

いくらでも応用は可能だ。

経験に基づき、重量など、異なった条件を方程式を解くように代入していく

ばいいだけのことだ。

あの重さではこの高度だから、この重さではもう少し上りにな具合にな。

やつぱ、一度見たあの手本が相当レベルが高かつたんだな。  
基盤がしつかりしていれば、それだけ活用の幅は広がる。  
プロ級の弓術をまとめてことだ。  
実際にいいものを盗めた。

「じゃ、約束通り、食券100枚はもうじてこべが」

「な、ちよつとま…」

「あーそつだ。その矢、重心がずれてるから、新しいのに交換することをお  
薦めするぜ。ちゃんとしたのを使わねえと、せつかくの実力も伸び  
ないぞ」

そう言い残して、海斗はその場をあとにした。

「うわー、何今。素敵すぎる、流川先輩」

「わかったらやうのが、またカッコイイんだよね」

「こんなことって…」

結局、武蔵小杉のプレミアムな作戦とやらば、海斗の人気に拍車をかけただけだった。

## 44話 「高級計画」（後書き）

ありがとうございました。

まあ、タイトルは読んでもらつた方は分かると思いますが、  
こつきゅうではなく、プレニアムです。  
はい、どうでもいいですね。

次回もよろしくです

## 45話 「海」（前書き）

はい、今回からは水上体育祭編です。

なんだかんだで日常編が長かつたですね。

やっと結構前から話が出ていた水上体育祭のスタートです。

まあですが今まで通り、どうぞ、じゅるりと見てください。

45話「海」

太陽がギラギラと照りつける。

「夏だ！」

一海だ！」

真夏の砂浜に男たちの声がこだました。

「はあ、これから、男つていうのは…」

「まあ、こんな天気のいい日に1年に1度の水上体育祭なんですか  
ら、はし

つかりと見守ります」

そう、今日は水上体育祭当日。

海辺には川神学園の生徒たちが一様に水着姿で並んでいた。  
勿論、学校行事なので1年から3年まで全ての生徒が揃っている。

「フフフ…、今回の体育祭は例年以上に楽しいことになりますだ

不敵に笑う三年生もいれば、

「うう、初めての体育祭。なんとしても、ここで活躍して、友達を増やしたいです。田標まではまだまだですからね」

緊張している一年生もいた。

そして…

「へえー、ここが海か。やっぱ、写真とかで見るのとは迫力とスケールが桁違いだな。いい経験したわ、ほんと」

「海斗、本当に海来たことないのね。珍しいわ」

「自分も日本の海はこれが初めてだな。日本の海の波はあのフジヤマを飲み込むほどだといつ。流石は侍の国だ」

なんか確実に“富嶽三十六景”あたりと勘違いしてた雰囲気がそこはかとな

く感じられたのだが、面白こので放置しておいたとする。

それよりもこれが海か…

想像通りの感じだが、なんか複雑だな。

何もかもを全て飲み込むこの広大な“海”。

空から降り注ぐ雨も、流れてくる川の水もな…。

“お前、名前はなんていうんだ。”

はあ、馬鹿みてー。

何、今更思い返しちゃってんだか。

祭りの前にテンション下げて、どうするよ。

いやー、忘れた忘れた！

今日は楽しもう、なんてつたつて初海だし。  
テンションが上がることには違いない。

それに最近、色々なことがあって、気がつかされた。

最初はタッグマッチ、次いで川神戦役。

それでいちやもんをつけられて、クリスと決闘なんてこともあったか。

そしたら、そのバカ親父の軍がやってきて、マルギッテとかいう強い軍人と

も戦つて、ちつとばかしハッシュルしちまつた。

最近では、ストーカー退治や弓道とかの依頼もこなした。

人と関わらないことに固執していた頃からは考えられないくらい、面倒に巻きこまれている毎日だ。

だが、驚くくらい充実している。

退屈からの脱却、求めていた非日常が実現している。

なにより、力を出せる奴らがいるということは良い。

やっぱり独りでの訓練も悪くないが、人との対戦とは別物だ。

なんだかんだで体を動かすのは好きなんだよな。

ずっと何もしないなんて、ストレスだって溜まる。

運動でもなんでもそうだが、たまにはやらないと、腕もなるまるしな。

今まで不良とかで我慢してきたんだが、やはり物足りないと感じが否めない。

強い弱いとかの話ではなく、あいつら自分が最強だと思って、常に人を見下してゐるからな、そのくせ仲間任せだし。

そういう意味では、それこそ真剣の喧嘩でなくたって、よっぽどこのいつらの方が楽しめる。

この学校に入ったのは、正解だったな。

：本当にあの頃とは何もかもが違う。

自分が知りたいと思ったから、入った。  
だが、いざ来たら、俺は逃げていた。

変わったつもりが、何も変わっていなかつた。  
結局どこかで恐れていたんだ、繰り返しを。

それでも、あいつは、一子は話しかけてきた。  
俺の対応なんて、冷たいものだつたはずだ。

それこそ、一度と関わりたいなんて思わないよ<sup>う</sup>。こ<sup>う</sup>いつと話そうと思ったのが馬鹿だつたと、後悔するよ<sup>う</sup>に。

だけど、一子は俺の思惑通りには動かなかつた。

俺がそんな接し方をしたところで、他の奴のように嫌悪の目を向けるわけで

もなく、ただ笑っていた。

「流川君、ウメ先生にあんなこと言っちゃダメよ

「あ？」

「一応、鞭の使い手で強いのよ。それに大和が年上の人に対する敬語を使<sup>う</sup>のは、  
“しゃかいつーねん”？だつて言つてたわ

「で?」

「いや、それだけなんだけど…」

「あつや」

「なんか流川君、疲れてて、今話すの嫌かな?」めんね、無理矢理  
話しかけ  
ちやつて。また今度、話しましょ」

「いや…」

「疲れはしつかり休んでとらなきやダメよ。あとは食事も気をつけ  
てね」

「だから…」

「またね、バイバイ!」

（

本当におかしい奴だ。

客観的に見ても、悪いのはどう考へても、俺の方だろ。  
なのに、謝られてちや、こいつの立場がない。

よくまあ、こんな奴に“またね”なんて、言葉が出てくるもんだ。  
少なくとも俺なら、今後は近づかないようにするだ。

でも、その後もたびたび話しかけてきて、俺も遂に相手の名前を覚

えるまで

に至ってしまった。

そして、タッグマッチのペアに進んでなつてくれた。  
そのおかげで、由紀江やクリスと知り合ひ、俺の日常はガラリと変  
わつたわ  
けだ。

一子がいなかつたら、今頃俺はどんな生活を送つていたんだろうか。  
独りで退屈な日々に飽き飽きしていたのだろうか。

そう考へると……

「おーい、海斗ー」

「ん、なんだ？」

「なんだじゅないわよ。こきなつ黙つちゅうじ

「ああ、悪い悪いー」

ちよつと物思つこふけつちまつたよつだ、俺らしへもねえ。

「ていうか、今日は暑いんだから、しつかり水分とらないとーせい、  
海斗、  
これ配られてるドリンクだから、ひやんと飲んでね」

「ああ、俺の分までわざわざ持つてきてくれたのか」

「そんなペットボトル1本持つてくるのも、2本持つてくるのも変わらないわよ」

そう言って、一子がいつもの笑顔で飲み物を手渡す。こいつ、自分がどれだけのことをしてるとか、人に影響を与えてるとか、全然分かつてないんだるーな。

それがいいとこなんだろうけどさ。

「一子。」

「ん? なーに?」

「ありがとうな

「へ?」

瞬間、一子の顔は真っ赤になる。  
その火照りを冷まそうといふのか、手に持つて居る冷えたペットボトルを頬に当てて、目を見開いている。

「い、いきなり、何よ、もう。飲み物運んできたくらいで大げさよ」「はつ、まあそーかもな」

「まつたく…、おかしな海斗ね」

たとえ、何の感謝かは云わらなくてもいい。  
目の前の少女に対して、言葉にしておきたかった。

## 45話 「海」（後書き）

ありがとうございました  
ちょっとほんと長くなりますかね？

ストーリーよりも日常の方が長いのが定着していますから  
次回からは競技が始まる……はず

## 46話 「借りたら返せ」（前編）

感想で多数？いただいたんですが、  
一子がメインヒロインなのかといふ件について…  
なんか無意識のうちに出来番が一番多いんですね。  
あの素直な反応が書きやすいといつもあると思いますが、  
やはり愛ゆえでしょうか（笑）

## 46話 「借りたら返せ」

さて、そろそろ競技が始まると頃だらう。

最初の競技が何とか、どのくらいの競技を行うのかとか、プログラムみたい

なものがないので、皆田見当もつかない。

学校として、それは大丈夫なのか？

あの学園長はただ水着見たいだけなんじゃねーのか。  
こんなこと思つてるのは、俺だけじゃないはずだ。

一子とかだつて、そうだろう。

ていうか、隣にいるはずなのに、さつきから静かすぎないか？

一子のほうを見る。

すると、一子もこちらを見ていて、何か言つたそつとしていた。

「海斗、あのや…」

「ん、どうした？」

「この前、大きさは気にしないって言つてたじゃない？」

大きさは気にしない？

なんだつけ、それ。

確かにそんなことを言つた記憶はしつかりとある。

「ど、どつかな…、アタシの水着姿…」

「ん? 水着姿?」

“どうかな”って、どうゆうひことだ。

大きい小さいの話はもうどうかいつたのか。

それにしても、一子の水着姿ね…

着ているのは勿論、学校から指定されているスクール水着だ。小柄で明るいイメージの一子にはぴったりな気もするがな。まさにスポーツ少女といった感じだ。

「似合つてんじゃねーか?」

「いや、やうじゅなくて、海斗がどう思つてるのかを聞きたいいなんて…」

「健康的で可愛らしい格好だと思つが」

「かかか、可愛らしく…ー?」

びっくりすんなよ、そつちが聞いたんだる。

体は日々の修行で適度にしぼってあり、無駄な肉はない。  
かといって、筋肉で角ばった感じなどは一切なく、締まりつつも丸  
みがあつ  
て、一子の小動物的な可愛さを損なつていない。

とこいつが、普段はポーネークールに縛つている髪を下ろしてこぬといふ口癖とのギャップに魅力を感じてしまつのは、男としては仕方ないだろ？

「あ、ありがと。あの、海斗もさ…水着…その、かつこいこと思つわよ……、  
うひゅう」

そういった一子からは蒸氣でも噴出せん勢いだつた。  
顔も言うまでもなく真つ赤で、ただでさえ暑い陽射しの中、その周辺だけが最高気温を記録していたほどだ。  
もはや、恥ずかしさからのうめき声も、暑さのせいで瀕死の状態になつてい  
るようになつた。

「だ、だいじょうぶか？」一子。

「だ、大丈夫よー。」

「まあでも、この水着、店員にすすめられたのを買つただけなんだ  
けどな。」

そんなに有名な会社のやつだったのか？

「え…セーラーじゃなくて、アタシがかつこつこつと言つてるのは、そ  
の…、水  
着 자체の」とじゅなくして…」

「海斗ー」

一子が何か言いかけたときだつた。  
その間にクリスが割つて入つてきた。

「犬ばかりでなく、自分はどうだ」

「ちよ、ちよとクリ！ いきなり入つてこないでよ」

「ああ、似合つてゐる似合つてゐる」

「ふふ、せうだらう。海斗に認めやせいやつたぞ」

まあ、クリスもいつもとは違つた感じで髪を結んでいて、可愛らし  
いことに  
違ひない。

だが、みんな何故俺に聞くのだろう。  
そんなにセンスがあるわけでもないのだが…。

「もう、クリ邪魔しないでよねー」

「なんだ犬、勝負するか」

「望むどいりよー」

二十九

「はいはい、そのやる気は競技にぶつけとけ」

何故か急に機嫌が悪くなつた一子と好戦的なクリスが決闘を始めようとした

ので、俺は一人を適当に押さえおいた。

「では、最初の競技を発表する」

まえ、おひせ

しかし、海でやる競技つて、どんなもんなんだろ？な。  
流石に泳ぐだけじゃ尺足りないだろうし。

「最初の競技は借り物競走じゃ！」

は？

いやいや、全然海関係ないんだけど。  
なに、海にも入させてくれないわけ？

せつかく、こんなにも水があるのに、活用しないのかよ。

“水上”でもなんでもないよね、それ。

「まあ、今海と全く関係ないと思っている者もいるじゃねえが、落ち着きなさい。その辺はしっかりと考えておる」

ほ

その考え方を是非聞かせてもらいたいもんだ。

今の状態では確実に俺と同じ考え方のやつも落ち着けないだろ？

ほ

「借り物競走とは、その名の通り、物を借りる競技じゃ。そして、

水上体育

祭の要素を入れるのは、ずばり…。借りるものは全て例にもねず、  
海や水

にちなんだ物になつてある。貝殻だったり、水羊羹なんて変り種も  
入つてお

る。その難易度は高いものから低いものまで様々じゃ。何を引くの  
かも運次

第じやが、重要といつてになるの。ワジが色々考えといったので、  
難しい

ものも生徒らの頑張りに期待する」

へえ、色々考えられてんだな。

まだ、海にまで来なくてもできるんじやないかといつ疑問はあるが、  
大体の

頑張りは認めよう。

海に直結するものだつたら、手に入りそうなもんだが、名前だけが水に関係しているとかいうものだと大変そうだな。  
そこら辺は運に任せるとしかねえか。

「よーい、始め！」

一斉にスタートする。  
まずは紙をとらないとな。

一番に紙が置いてあるといひまで辿り着くと皿の前にあつた紙をとる。

こんなのが悩んでも仕方ないから、せつせつと決めた方がいい。  
そして、その紙を見ると、

“1年生の水着（女子に限る）”

と書いてあった。

……おい。

確かにドストレートで水には関係があるが、難易度も高すぎないか。  
絶対にこれ書いたの深夜とかだろ。  
徹夜特有のテンションで書いたらだろ。

もはや、あのじじいの願望としか思えん。  
主にかつこの中とかな。

てこうか、皆着てるものをビリヤシで借りて貰ひだよ。  
ともかく向かうしかない。

俺は一年女子の塊に走つていぐ。

「ねえ！流川先輩、こっち来てない？」

「ほ、本当だ、なんか借りに来たのかな。私が貸したいな…」

「おい、ちよつといいか。こんなで水着もう一着持つてゐやつこ  
ないか

「え？ ビリヤシ」とですか？」

「いや、あの変態が…じゃなくて、指示が一年生の水着なんだよな。  
だが、  
当たり前だが、皆着てるだろ？スペア持つてゐやつでもいいのかと  
思つたん  
だが、普通いねえよな…」

「やうですね…」

いや、まず指示がおかしいんだけどな。

「わ、私、先輩のためなら、別に…」

「おー！ 鳩鹿、やめ！」

「あや…／＼／＼

いきなり水着に手をかけた少女の両手を押さえる。

こんなところで脱がれたら、確実に俺が脅迫したようにしかならない。

第一、行動が思い切りすぎだろ。  
もつと自分を大切にしようぜ。

ん？待てよ。

「おー、ちよっと一緒に来てくれるか

「あ…は、はい」

手を掴んでいる少女の目を見て、頼んでみる。  
何故か顔はそらされたが、了承してくれた。  
うむ、優しい子だ。

そうだ、別に水着単体で持っていく必要はない。  
水着を着ている子に来てもらえばいい話だったんだ。  
危なかつた、危うく一人の少女に心の傷を負わせてしまうかもしれ  
なかつた。

そのまま、手を引っ張ってゴールに向かつた。  
終始、その子は何も話さなかつた。  
やつぱり少し迷惑だつたかね。

「よし、これでクリアだろ」

「つむ、ええのうええのう」

「何を触れようとしてんだ」

「失礼な、手も動かしておらんわ」

「いや、もう目が犯罪者だったから。確認できたんだつたら、もうこの子は

元の場所に返していくからな」

学園長は“もうちゅうと”みたいな田を向けてきたが、その田を確  
認したう

えで完全に無視してやつた。

やつぱ、むりあいつの願望じゃねーか。

はじめっから、カオスな体育祭だつた。

## 46話 「借りたら返せ」（後編）(脚本)

ありがとうございました  
もはや海斗の人気がよく分かる回でしたね。  
脱ぐ覚悟すらあるって凄いですね。  
クリスや一子も自分を見てもらいたいと  
羨ましいかぎりです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1374w/>

---

真剣で私たちに恋しなさい！

2011年10月10日09時45分発行